
ねずみ姫

じゅう・かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねずみ姫

【Nコード】

N8538F

【作者名】

じゅう・かわせみ

【あらすじ】

恋愛？そんなもの、綺麗な容姿と心を持った人だけがするものでしょう？わたしみたいに、どっちも醜い人間には無縁なものよ。ずっと、そんな風に考えていた。だけど……。

第一話・高校生活のはじまり（前書き）

この作品は数年前に、某ゲームの二次創作作品としてネット上で公開していたものです。ですが、元々オリジナルキャラクターを多く登場させ、ストーリー展開も原作ゲームとは離れたものだったので、この度登場人物の名前を変更して再公開することにしました。どこかで拙作を御覧になっていた方はご了承ください。

第一話・高校生活のはじまり

小学6年のとき、私のクラスにとっても可愛い女の子が転校してきた。

「伊佐波小学校から転校してきた驚見^{すみ}美音^{みねこ}子です。前の学校では美音ちゃん、って呼ばれていました。みなさんどうぞよろしくお願いします」

美音ちゃんは可愛いだけでなく、話し上手な明るい女の子で、たちまちクラスの人気者になった。美音ちゃんのことを好きになった男子も結構多かったみたいだ。

二学期が始まってまもないある日の昼休み、教室でおしゃべりをしている時に、流れて美音ちゃんはみんなに猫の鳴き真似を披露した。

「そっくり」「可愛い」

みんなが褒め称えていると、男子の一人が言った。

「そうか。『み”ネコ”』だから猫なのか」

みんな笑った。

笑われた美音ちゃんは舌を出し、両手を頭の横に添えて猫の耳のマネをしてみせた。そんな仕草も可愛らしかった。

するとその直後、別の男子が言った。

「それじゃ、関根は『せき”ネ”か”ズミ”』だから鼠か？」

えっ、と私が言葉の意味を把握しようとしていると、みんなが笑った。さあっと血の気が引いた。

だけど笑われた私は……ただ、つられるように愛想笑いをした。それが引きつっていたことに気づいていた子はいただろうか。

その日から美音ちゃんのあだ名に「ネコちゃん」と「ネコ」が加わった。

そして私のあだ名は（男子にだけだけど）「ネズミ」になった。

そうして私の初恋は終わった。だって、その子にだけはそう呼ばれたくなかったのに。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。……

耳障りな電子音と雀の鳴き声が混ざって聞こえる。

「んー」

私は布団から手を伸ばすと目覚まし時計を捕まえて中に連れ込んだ。

目覚ましを止めると身体を起こす。

「……………」

まだ身体が眠たいと叫んでいる。

それもそのはず、私の起床時間はつい先日から1時間早くなっているのだ。

とは言え、私が望んで私立の高校に通わせてもらったのだから文句は言えない。

進路を決めたとき、学費と通学の面から両親にこの学校への進学を反対されたけど、何度も頼み込むことでようやく許しを得た。

私がここを選んだ理由はただ一つ。同じ中学の出身者が一人もない、ということだ。

私の通う桑苑学園^{くわぞの}高等部は中等部からそのまま進学する生徒が多く、外部からの編入試験はやや難易度が高い。けれど私は付け焼刃ながらも必死で勉強して、合格に漕ぎ着けた。

私は逃げる時になら一生懸命になれる。そういう人間なのだ。

中学時代はずっと逃げてきた。ここに進学してきたのも逃げただけだ、高校では一からやり直したい。だから、できれば高校では、人の悪口をいったり、他人の不幸を喜ぶような人とは出会いたくない。

——お願いだから、そうあってほしい。

パジャマ姿のまま朝食を取りに部屋を出る前に、鏡を覗き込んでみる。

ハア。相変わらず冴えない顔だ。

鏡の中には自分に呆れている私の顔があった。

不健康に細い輪郭。顔の中央には汚らしいそばかす。短く切つていてもなおクセの強さが目立つ全然可愛くない髪。

いつだったか女子の間で髪を留めるカラーゴムがやったことがあったけれど、私がやるとただのちょんまげにしかならなかった。気にしていたらクラスの男子がちょんまげちょんまげって囃し立てたので一日でやめた。

見も知らない男子からまでからかわれたときはさすがに腹が立った。

男の子の評判なんてとうにあきらめている。私はここ数年、男の子を好きになっていない。

小学校までは確かに異性を好きになる気持ちがあったはずだが、今ではなぜそんなものが存在しえたのか不思議でしようがないくらいだ。だから女の子の間だけのおしゃべりでも、好きな男の子の話題になると私は場を白けさせる邪魔者になった。

「おはよう……」

台所でお母さんの背中に朝のあいさつをすると、私はひとり、食

卓についた。

食卓には3人分の食器の準備がされている。私以外のは、お父さんとお母さんの分だ。

「おはよう。和美」

「ん」

お母さんは私が早起きになったのに合わせてくれたが、お父さんにはそれが無理のようだった。

私の両親は「セキネ理容室」という床屋を経営していて、店舗と家とは建物が繋がっている。だから通勤時間はゼロなのはうらやましい。もう一時間寝ていても仕事の準備は全然間に合うからだ。

お母さんが味噌汁を入れるためにお碗を持っていく。その間に私はご飯をよそう。

肉親ゆえ、客観的評価がどれだけでできているかわからないが、はつきりいってお母さんは綺麗な女性だ。たぶん私の容姿はほとんどがお父さんから譲り受けたものなのだろう。

味噌汁の具はなめこと油揚げだった。

お母さんは料理も上手だ。私は小さい頃は母親というものは皆すべて料理がうまいものだと思っていた。友達との会話や、友達の家招待されたときに実際に出された料理を食べて、この世には料理の下手な母親がいるのだと知った。

そしてお母さんは理容師でもある。基本的に手先が器用なのだ。

その点だけは私はお母さんの血をひいたようで、小・中学校を通じて図工、美術の成績だけはよかった。

でも、そんな器用なお母さんなのに、何故か私という失敗作を産んだことだけは気づいていない。

『和美はひどいクセツ毛だからねえ』

それは私が小さい頃から髪をお母さんに切ってもらうたびに聞くセリフだった。

私には短髪が似合うんだよって、ずっと今の髪型を続けている。けど私には、私の欠点だらけの顔を強調しているだけにしか思えない。

でもお母さんには言えない。

だって、お母さんは綺麗で優しい人だから。

ブスで卑屈な私の気持ちは分らない。

「高校の生活はもう慣れた？」

「うん。まあまあ。もう友達もできたし」

「ああ、そう。そういえばクラブはまだ決まっていなかったっけ？」

「ああ、今日の午後説明会があって放課後入部受け付けだって」

「和美はまた美術部に入るの？」

「うん。そのつもり」

新人生へのお決まりの言葉に受け答えをしながら、私は物思いを振り払っていった。

好きな人と会話するのは好き。もやで覆われている私の胸を晴らしてくれるから。

朝食を終えた私はごちそうさま、と告げると洗面所に向かった。

洗面所には、鏡。歯磨きと洗顔をする間、私は私と向き合うことになる。

生まれつきのものを今更取り繕っても大したことはできないというのに、それでも少しでも綺麗になりたいと思うのはなんでだろう？友達づきあいに容姿は関係ない。容姿の良し悪しで友達を選ぶとは思えない。

それじゃあ、私は心のどこかで、男の子達に媚を売ろうとしているのだろうか？

だとしたら、私はいやらしい女の子なのか。

ああっ、もうっ……！！

私は洗顔をぐるぐると顔じゅうに塗りたくった。鏡の中の私の素顔は隠れた。

ふと、私が小さい頃、女子高生の間で『ガングロ』が流行ったことを思い出した。

ひょっとしたら顔を真っ黒にしている女の子の中には、私と同様なコンプレックスを持っている娘がいたのかもしれない。だから周りに溶け込むように隠していたのかもしれない。

お化けみたいな顔のまま、私はくすりと笑った。

制服に着替えたときにはまだ時間に余裕があった。

起きてきたお父さんにおはよう、と言うと一緒にTVの天気予報と星占いを見て時間をつぶした。

「いってきます」

「ああ、いってらっしゃい」

靴を履いてドアを開けたところで、わざわざお母さんが玄関まで見送りにきてくれた。

「じゃ、いってきます」

「和美」

「ん？」

「今度は美術部、最後まで続けましょうね」

「……うん。今度は大丈夫だと思うから」

「ん。じゃあ、いってらっしゃい」

中央線と京葉線で1時間、新桑苑駅から徒歩で15分のところに私立桑苑学園はある。

中央線は通学時間でもよく事故を起こすので、それは心配だ。

一応駅で証明書をもらえば遅刻扱いにはならないそうだけど、担任の先生の渋い顔を頭に思い浮かべると私は縮み上がりそうになった。

私のクラスの担任は音羽武人先生おとわ たけひとといって若くて美形の数学の先生なんだけど、冷たい雰囲気おとわ たけひとの漂うとても厳しい人だ。まだ高校に

入って日が浅いというのに、音羽先生が怒っている場面はもう何度も見ている。

でも私は音羽先生が嫌いではない。学校の先生は理不尽でさえなければ厳しい方がいいに決まってる。生徒が悪いことをしているのに見て見ぬフリをしている先生なんて最低だ。そんな先生は生徒が困っていても何もしようとしないんだから。

校門に入る直前に、私は後ろから背中を叩かれた。

「和美ちゃん、おはよう」

声の主は私が歩調を緩めると真横に並んだ。

ぽっちゃりとした体型に童顔、髪は襟足が隠れる程度のサラサラのショートゆずきの女の子。クラスメートの柚木珠美ちゃんだ。

「おはよう、珠美ちゃん」

彼女は私の前の席に座っている女子で、入学式が終わって教室に戻ってくるとすぐに私に話し掛けてきたのだ。

はじめて会話したのが彼女で本当によかった。

女子も男子も同じだと思うけれど、クラス内で出来る仲良しグループは新学期早々は混沌としているがやがては大体「活発系」と「おとなし系」に分かれていく。初めに一生懸命話し掛けて友達になろうとした相手が、だんだん話が合わないとわかり疎遠になっていくのはちよつと寂しいものだ。

当然、珠美ちゃんと私は「おとなし系」の女子だ。

珠美ちゃんは、最初が肝心とばかりに私に話し掛けてきたのだが、他人に話し掛けるのが苦手な私にとってそれはとてもありがたかった。

私達はお互いにその心境を告白して笑いあった。彼女となら長く付き合えそうだと、私は喜びながら安堵した。

「ねえ、和美ちゃん。この間私が言ってたのはこれだよ」

「え……、何だっけ？」

教室につくと、珠美ちゃんは鞆の中から一時間目の教科の教科書

類と一緒に一冊の雑誌を取り出して私の席に振り返る。

それはちよつとエッチな話題も載っている女の子向けの情報誌で、彼女が開いているのはいろいろなメーカーのシャンプーやリンスの比較検討記事だった。

それで私は数日前に珠美ちゃんの前で自分のクセツ毛を自嘲したことを思い出した。

わざわざ覚えてて持ってきてくれたんだ。

胸が、つまる。

普通の子なら何てことない友達同士のひとコマなんだろうけど、私にとってはとても嬉しい瞬間だった。恋愛関係やおしゃれ関係の話題は中学時代、私のいる場ではほとんど持ち上がらなかったものだ。

いけない。こんなことで泣いたら珠美ちゃんに変に思われる。

「ありがとう！ 珠美ちゃん」

にっこりと笑顔を向ける。

「えーとね、私がおすすめるのはこのシャンプー。最初に試しに使ってみたら次の日髪の毛がサラッサラになって本当、びっくりしたよ。あの、枕と髪の毛の擦れる感じが？ が気持ちよくてね」

「へー」

珠美ちゃんの熱弁は嬉しかったけれど、私の胸中は複雑だった。

我が家は床屋という商売柄、わりといいシャンプーを使っているけど、私の髪はそれ以上に頑固なのだ。

珠美ちゃんご推薦のシャンプーは使ってみるつもりだけど、既にあきらめの気持ちも大半を占めていた。

チャイムが鳴り、音羽先生が教室に入ってきた。たちまち私達の

クラスはシーンとなる。日直の号令と共に起立、礼、着席。HRが始まった。

「今日は授業は午前中まで。ただし午後からは体育館で2、3年によるクラブ紹介がある。必ず出席すること。なお、クラブ紹介では派手なパフォーマンスを行って1年生の注意を引こうとするものがあるが、くれぐれも君達はショーの観客ではないことを自覚しておくように。あらかじめ忠告しておく。クラブ活動は遊びではない。君達自身の適正と意欲を真剣に考えて選択するように」

「ねえねえ、和美ちゃん。和美ちゃんはもうどのクラブに入るか決めているの？」

休み時間になると早速珠美ちゃんが私に尋ねてきた。

「うん。私は美術部に入るつもり」

「あ、美術部？ 和美ちゃん、絵とか描くの好きなんだ」

「まあね」

私の最初の記憶は、テレビアニメを見て、その一場面を画用紙にクレヨンで模写しているところだ。たまにデパートにお出かけた時には親に好きなアニメ（確か「夢のクレヨン王国」）のキャラクターグッズをねだったものだが、すぐ飽きるから、と買ってもらえなかった。その欲求不満を晴らす為に私はひたすら絵を描いた。

ある日小学校でノートの落書きを友達に見られた途端、私に描いて描いてとせがまれてびっくりしたことは今でも憶えている。やがてアニメやマンガの模写だけでは飽き足らなくなり、オリジナルの絵も描くようになったが女子の間ではわりと好評だった。

私自身の酷いコンプレックスの裏返しで、私の描く世界は幻想的で透明感のある物体にあふれていた。中学時代にろくな思い出のない私が、私の精神を保っていたのはひとえに絵の世界のおかげだと思う。

「で、珠美ちゃんは？」

「私はねえ、バスケットに入ろうと思ってるの」

「ええっ？ 籠球部？」

「……どうして漢字に訳すの？」

「ごめん。びっくりしたんだ。だって、珠美ちゃんって、全然バスケットするタイプに見えなかったから」

「ああ、違うの違うの。私、男子バスケット部のマネージャーになろうと思うんだ」

「あー、マネージャーね……」

正直なところ、私は運動部のマネージャーになりたいという心理が全然理解できない。どんなに頑張っても自分の運動能力が上がるわけでもないし、まして活躍できるわけでもないのに。珠美ちゃんの気分を害したくないので今は何も言わないでおくが、いつか私は彼女に理由を訊いてみようと思った。

2時間目の地理の授業が終わると私は一息つくために珠美ちゃんを誘ってトイレに向かった。

「地理の杜岡先生ってダジャレ好きだよね」と私。

「うん。あんまり面白くないけどね。でもみんな（音羽先生の）数学みたいだったら疲れちゃうからちようどいいのかも」
などと他愛ないおしゃべりをしているたが。

ふわり、と。

柔らかな薫風が私の鼻をくすぐった。

「!？」

「どうしたの、和美ちゃん？」

珠美ちゃんは今の風に気づかなかったのだろうか。急に話を中断して顔をそむけた私に、不思議そうな顔をして声を掛けた。

目の前を長髪の男子生徒が歩いていた。髪は肩にかかる程度の長さで、ゆるいウェーブがかかっていた。

今の風は彼が私達を追い抜いたせいだろう。

「和美ちゃん？」

「ね、あの人、男子……だよね」

「やだ和美ちゃん、何言っているの？ 当たり前じゃない。男子の制服着てるもん。ロン毛の男の子なんて珍しくないでしょ？」

「……」

そうじゃなかった。私が彼に注意をひかれたのは彼から漂う芳香と、そして輝くように美しいその髪質のためだった。

第二話・美術部入部

「次は、美術部の紹介です」

司会進行の人の声がマイクを通じて体育館に響いた。

わたしはプログラムが印刷されたA4の西洋紙から目を上げた。

やっときたか、とわたしは首をぐるりと回転させて軽く凝りをほぐした。

お願いだから、美術部はマジメな人が出てきてほしい……。

クラブ紹介は、特に男子の運動系クラブのものが笑いをとろうとしていた。周りのみんなが笑っているのを聞き、わたしはそんなものかと思いつきながら見ていたが、いい加減うんざりしてきたので、美術部の番になるまでプログラムを眺めたりあるいは目を閉じて、ステージに集中するのをやめていた。

そして、ステージの上手^{かみて}からマイクを持った女性が登場した。

クラブ紹介が始まってからしばらく経つと1年生席はひそひそと話す声で小さくざわめいていたが、彼女の登場によってそれらが一瞬シンクロし、そして静かになった。わたしが「女性」という言葉を使ったのは、彼女が濃いグレーのスーツに身を包んで青いネクタイを締めるという女子高生らしからぬ服装をしていたからだ。確かに、これまでの紹介でも受け狙いでコスプレをしている生徒はいたけれど、このパターンは初めてだ。

背をぴんと伸ばしてその女性はステージ中央まで歩いてくる。長いストレートの髪を首のあたりで束ね、レンズが横に細長い眼鏡を掛けている。口元が目立つのは薄く口紅をつけているからだろうか。一見したその女性の印象は……大企業のエリート社員、だった。

「1年生の皆さん、遅ればせながら、桑学高等部へようこそ。私は美術部部長の牧瀬千秋^{まさせ ちあき}です」

3年生……だよね？

スーツを着ているからとは言え、この人がわたしとたった2学年しか違わないなんて。すごい、オトナのヒト……。

一旦言葉を区切ると部長さんは上手の方を向いてさっ、と片手を挙げた。

それを合図に制服を着た2人の女子生徒と1人の男子生徒が画材や美術部で作ったと思われる作品を持って現れ、部長さんの後ろで作業の真似事を始めた。

「美術部は自由な発想と感性を磨く場です。新しい何かを創造したい、そう思っている方々はどうぞ美術部にいらして下さい。堅苦しいことを考える必要はありません。入部はいつでも大歓迎です」

部長さんは後ろの人達に背を向けたまま再び手で合図した。美術部の人たちがばたばたと動き出す。片付けか、と思っていると次には不思議なことが起こった。

キャンバスが、イーゼルが、石膏像が、パレットが、粘土の塊が、美術部員たちの手で1箇所に寄せ集められた。

あっ……！

また1年生席のざわめきがシンクロした。

まるで手品のようだった。

集められたそれぞれが組み合わせられて、モチーフの異なる全く別の作品になったのだ。

「共同で作業すると、このようなこともできます。大勢の仲間たちでお互いの感性を高めあおうではありませんか。美術部への入部はいつでも大歓迎です」

——ひょっとして美術部って凄くレベル高い？

わたしが美術部としての活動をやめていた1年半の間に美術の世界は大きく変わっていたのだろうか。

——そう言えば以前そんなことを聞いたような、聞かなかったよ

うな？

わたしは早くも自分が部活をしている様子を頭に思い浮かべた。ピリピリとした雰囲気の中で緊張しながら絵を描くわたしの姿だった。

放課後になった。

美術室は3階。校舎の端っこにある。

わたしは緊張で上がりっぱなしの心拍数を少しでも正常値に戻す為に、呼吸を整えながらゆっくりと美術室に向かった。

——大丈夫、だよね？

中学時代、美術部に顔を出すのをやめてからは、わたしは授業以外では自分の部屋でもっぱら鉛筆画とクレヨン画だけを描いてきた。それは自己満足の為の行動にしか過ぎなかったけれど、でもわたし自身は満足させることができた。

それにわたしは入ったばかりの1年生だ。少しくらいなら下手でも大丈夫だろう。

すうつ……。

ドアの前に立って大きく息を吸う。

さあ、ここから、

ガララッ……。

「！」

不意に目の前のドアが開く。

「おっと。あ、入部希望の子？ 入っていいよ」

そう言ってその女子生徒はわたしの横をすり抜けていった。

息を止めて立ち尽くしていた状態でいたところを見られてしまっ

た。

変な印象を与えていなければいいけど…。

あっ、しまった。ちゃんと挨拶できなかった。

美術室では、大きな机を囲んで6人の女子生徒と1人の男子生徒が座り談笑していた。

わたしが入ってきたのに気づいて皆が一斉にこちらを向いた。わたしは無言のまま、ぺこりと頭を下げた。

わたしと同じ1年生であろう女子がわたしを手招きして空いている椅子を指し示した。わたしは頷いてそこに座った。

聞いてみると、新入部員は今のところわたしを含めて4人、全員女子だ。彼女達3人は中等部の時からの友達で一緒に入部したそう
だ。

その1年女子の一人、小林さんは上級生の部員に積極的に話し掛けて
いる。

「さっきのクラブ紹介面白かったですよ。あれってどれくらい準備
したんですか？」

小林さんはどことなく日本人形を思わせる色白でボブカットの女の子だ。彼女の質問には男子の先輩が答えた。

「あれは…春休み入ってからだったか？ 何かしらないけど、ウチはコンクールへの出展とかよりもこういうことに熱心になってしま
うんだよなあ。全く」

「牧瀬さん、カッコよかったですよ」

「そうか？ わざわざスーツ借りてきた甲斐があったってもんだな」
牧瀬さん？

わたしは小林さんにそう呼ばれた女子生徒を見た。

につこりと笑った彼女は丸顔にポニーテール。女の子にしてはや
や大柄な体型をしている。雰囲気的に「ねえさん」とか「かあさん」
と呼ばれるのがふさわしいような人だ。

その顔には見覚えがあったような気がした。

「……あっ！」

わたしはつい声を出してしまった。視線を浴び、顔がカーツと熱くなった。

「どうした？」

「すみません。あの、部長さん、でしたか。クラブ紹介の時の、」
我ながら間の抜けたことを聞いてしまったと思ったが、牧瀬部長は嬉しそうに笑い出した。

「おい、聞いたか、健太郎！ 私だと気づかなかった子がいたじゃないか。賭けは私の勝ちだな！ 三里屋さんりやの雑炊おぐれよ！」

「はいはい。まったく千秋さんは立派に化けましたよ」

と、健太郎先輩は面倒くさそうに手を振った。

何だかよく分からないけれど私の発言は牧瀬さんを喜ばせたらしい。

それにしてもわたしも情けない。

顔立ちも体型も変わっていない。よく見れば牧瀬さん本人を認識するのはたやすいことだったのに。

眼鏡やスーツという記号がわたしを惑わしていた？

いいや、そうじゃない。わたしは、人を覚えるのが苦手なんだ。

たぶん、無意識のうちにそれが不必要なことだと脳が命令を下しているから。

クラスメートだって、まだ顔と名前が一致しない人が多い。

やがて、さつきドアですれ違った先輩が戻ってきて、美術部のミーティングが始まった。

部員それぞれの自己紹介。

そして美術部の年間の活動の説明。

今年の美術部では、文化祭、高校美術展、蒼彩展そうさいへの出展は既に決まっている。

それらの展覧会が近い日は全員同じような活動をするが、そうでない期間は自由に自分の好きなものを作ってよいそうだ。もちろん、

展覧会に向けた作品をこの期間から取り掛かってよい。

で、4月である今はその自由期間だ。わたしは他の1年生部員の話す声を聞きながら、自分の予定を考え始めた。

「関根さん、一緒に帰ろう？ ちょっと寄り道していいかない？」

ミーティングが終わって帰りかけたわたしは1年生部員の子達にそう声を掛けられた。

「うん…。でもわたし、電車通学だから…ごめんなさい」

「あれ？ 遠いの？ ねえ、関根さんは外部編入って言ってたけど、どこ住んでいるの？」

わたしは自分の住所を彼女達に告げた。案の定、目を丸くされた。「うわーっ、大変だね。それじゃ、仕方ないか」

言ってからしまったと思った。これから美術部の活動をしていくのに帰りが遅くなるのは当然だ。今日のようない日は、ちょっと遅くなってもどうということはないのに。

いつのまにかわたしに悪い習慣が身についている。

彼女達の会話が、これから寄る店の話になっている。知らない店だ。もう、口を挟めない。

「あ、関根さん、ケータイの番号教えてよ」

一人（確か敷島さん）が振り返って自分の携帯電話を取り出しながらわたしにそう尋ねた。

わたしの胸がちくんとした。

「ごめんなさい。わたしケータイ持っていないの」

せっかくわたしを置き去りにしないように話を振ってくれたのに、それに応えられないわたしにわたしは腹が立った。

「あー、そうなんだ。あー、うん。自宅のはさっき教えてもらったし、じゃあ、後で電話、するね」

「うん、ごめんなさい」

携帯電話はわたしには必要ない。普段はそう思っているけれど、

こういう流れになるとなんとなく惨めになる。だからと言って買ってもらっても結局使わなければもっと惨めな気持ちになる。

わたしは校門のところで3人と別れた。

心の翳りを見せないように、笑顔で手を振って。

帰りの電車の中、わたしはわたしの代償行為として3人の顔と名前を頭に焼き付けた。

それから数日がたった。

わたしの高校生活は、おおむね良好だった。

クラスでは珠美ちゃんを介して珠美ちゃんの友達ともおしゃべりをしたり、屋上でバドミントンをしたりするようになった。

授業の方も、受験勉強をいっぱいしてきたおかげで今のところ付いていくことが出来る。

美術部では、わたしは水彩で静物画を描き始めた。

一番家が遠いので、一番早く帰ることになるのに少し罪悪感を感じることもあるけれど、でも、それぐらいのことなら。

大丈夫。わたしはこの「桑苑」でやっていける…。

今日は最後の授業が数学だった。そのままHRとなり、音羽先生からの連絡もなし。

わたしが美術室についたときには、まだ誰もいなかった。部屋の隅から描きかけの絵と画材を取り出してくる。正直なところ、数学の時間の残り15分くらいはこの絵のことを考えていた。

準備を整えると、わたしは作業を再開した。

と。

「その色がいいね」

「ひゃ!？」

突然、後ろから声を掛けられて、わたしは思わず絵筆を間違えた方向に滑らせてしまった。わたしの絵に汚い線がはいつてしまった。誰！？

男の人の声。でも星見（健太郎）先輩ではない。

わたしはそれが誰でも、一言文句を言ってやろうと振り向いた。

……。

……。

…。

でも、言葉が出てこなかった。

わたしは知っていた。彼を。

顔を見ていなくてもわかる。

近づかれてもわからなかったのは、美術室が絵の具の匂いであふれていたからだ。

あの芳香の男。悔しいくらいに髪きれいな男。

あれから彼のことは頭から払ったはずなのに、彼を目の当たりにしたとたん、嗅覚と視覚がたちまち記憶を取り戻した。

「驚かせちゃったかな？ 『ハシモトカオル』が美術部にいるなんて」

彼は落ち着いた態度でわたしの目を見、柔らかに微笑んでみせた。わたしはカッとなり目をそらした。しかし、彼の名前を思い出したわたしは、驚きのあまり、つい向き直ってしまった。

はしもとかおる

嘴本薫。わたしはその名前を以前から知っていた。中学で美術部にいたころにその名前を初めて聞いたと思う。

そう、自分と同じ年でありながら、日本の美術界に変革をもたらすだろうと言われた天才だ。

「嘴本薫、ってあの天才と呼ばれた……？」

その天才が今わたしの目の前にいる？

嘴本薫って、桑苑の生徒だった？

それがこの間見かけた彼？

そんな偶然が？

そう言えばどうしてわたしは彼だとすぐに判った？

わたしは人を覚えるのは苦手じゃなかったっけ？

ぐちゃぐちゃと、わたしは。

しばし、言葉をつむぐことができなかった。

しかし不思議と彼は何も言わずこちらを見ていた。

第三話・傷痕

わたしは少女マンガが好き。でも嫌い。

何の取り得もない平凡な女の子が、小さな事件を通じて憧れの人と恋仲になるという物語が好き。でも嫌い。

美形で優しい男の子が登場するから好き。でも嫌い。

平凡な女の子だなんて大嘘だもの。どうみても主役の女の子は平均をはるかに越えて可愛いもの。

男の子とのきっかけができた後、急速に仲良く慣れるのは絶対に顔が可愛いからだ。

本当の男の子はあんなにきれいじゃない。あんなに優しくない。がさつだし、だらしないし、人に平気で酷いことを言う。

わたしは少女マンガが嫌い。でもやっぱり好き、なのかも。

だって、わたしが人物の絵を書くときは、いつも少女マンガに出てくるような男の子の絵ばっかりなのだから。

彼——嘴本薫は優雅に右手で髪をかきあげた。

「天才……うん、誰もがボクをそう呼ぶね。でも、言うなれば本当の天才はボクの両親なんだよ」

「?..?」

彼の家は芸術一家なのだろうか。

「だって、ボクという芸術作品をこの世に産み出したんだから」

え…、今なんて…?

コノヒト、イマ、ナンティッタノ?

冗談めかして言っている様子はない。

信じられないけど、彼はその言葉を本気で言っているんだ。

わたしは彼の作品を写真でだが何度か見たことがある。

絵画、彫刻、珍しいところでは河原の石を使ったアート。彼の手がけるジャンルは多岐にわたっていた。

それらはわたしと同じ年の人間が創り上げたとは信じられないものばかりだった。

彼は自身の姿をも芸術作品としての対象にしているのだろう。

ニキビひとつない顔にイヤミのない芳香……肌や髪の毛の手入れを怠っていないことがよく解る。

わたしが髪を短くしている唯一のメリットは手入れが楽なことだ。見る限り彼は少なくともわたし以上に気を使っているはずだ。

桑苑の男子の制服はブレザーで、ネクタイを結ぶのが標準となっているが、だらしない男子の中にはネクタイを緩めたりあるいは完全にはずしてしまっている人もいる。

しかし彼の場合、ネクタイを締めるべき場所にエメラルド色のブローチをネクタイと同色の紐で結んでいた。

似合っていた。もちろんそれは彼だけのスタイルだ。

音羽先生あたりが黙っていないと思うのだが、なぜかそんなトラブルは耳にしていない。

『ボクという芸術作品』という彼の発言は根拠のある自信からきているのだろう。そういった意味で確かに彼は天才なのだ。

「そんなことよりも……」

彼が何か言いかけたとき、美術室のドアが開く音がした。

「おう、嘴本。来ていたのか」

入ってきたのは部長の牧瀬さんだった。わたしはぺこりと頭を下げた。

「ええ、牧瀬さん。来ましたよ」

「嘴本お。ついに美術部に入ってくれる気になったか」

「牧瀬さんがどうしてもというものだから今日は見学に来ました。ボクとしては、ボクが入部することで美術部のみんなの自信を失わせてしまうのではないかと危惧しているのですけどね」

「ふっ。我が美術部には嘴本の作品を見たぐらいで自信喪失する腑抜けなどおらんわ」

「そうかもしれないですね。彼女の作品…彼女は？」

と、彼はわたしを手で差した。

「ああ。彼女の名は関根和美。新入部員だ」

「関根くん…それがキミの名前なんだね」

こくん、と何故か身体を固くしていたわたしはただ頷くだけだった。

「ボクはこの作品に興味を持った。そのことを教えてあげようと思つてさっきキミに声をかけたんだ」

ああ、そうか。さっき見つめていたのはわたしじゃなくてわたしの描いていた絵の方か。道理で。

「うん、なかなかいい色を使っているね」

「ふっふっふっ。そうだろう、そうだろう。和美は我が美術部の期待の星だ。わたしが3年も手塩にかけて育てた娘だけのことはあるだろう」

と、牧瀬さんは腕を組んで頷きながらナンセンスな冗談を言う。

でも、実際彼が私の絵に寄せた興味というのはどれほどのものなのだろう。

彼のような天才の目から見たら、凡人のわたしの絵はどのように映るのか。

大人が子供の絵を見て、微笑みながら「うまいよ」という程度のものなのだろうか。

…その程度のものなのだろう。

「今日のボクは道具を用意していないので、美術部のみんなの作品を見るだけにしますよ」

「うん、それでいい。うちの優秀な部員達の作品でおまえのインスピレーションに刺激を与えるがよいさ」

「はははっ。できればそうしたいものですね」

「ま、これからはおまえの存在で美術部に刺激を与えてやってもらうがな」

彼の知名度は大したものだった。

部員の人たちはその後美術室に入ってきて彼を見とめるなり驚いた顔になり、彼に駆け寄って言葉を交わす。

中等部の時から見知っている人物だからなのだろう。

さすがだな、と思いながら彼を見ていたが、1年の子たちが3人そろって入ってきたとき、キャーッと悲鳴をハモらせ彼に「薫サマ！」と呼びかけたときは椅子から転げ落ちそうになった。

「様」って……。王子様扱い？

半ばバカにするつもりでわたしはそのような言葉を思いついたのだが、あながちその比喻は間違っていないのが悔しかった。

「薫サマ、美術部に入ってくれるんですか!？」

「ボクが入部したらキミ達は嬉しいかい？」

「もちろん! 絶対入って!」

女の子達に囲まれる彼。

異性からの憧れの視線を浴びても照れることなく、かといってエッチな目つきになることもなく、自然に彼はそれらを受け止めていた。

女の子の心を捕らえて離さない容姿。あふれる芸術の才能。自信に満ちた態度。

彼がモテるのは当然だろう。

ああ、なんて、なんて……!

「こら、いつまでも喋っているな。もう作業にはいつているのいるんだぞ」

牧瀬さんの叱責の声が飛ぶ。敷島さん達は、はあい、と返事をし

て自分の場所に散った。

彼は牧瀬さんに、優雅に英国紳士のような礼を試みせた。

ああ、なんて、なんて……。

——なんて世の中は、不公平なんだろう。

わたしの心に、墨が流れる。

やがて、全員が集中してきたのか美術室に緊張交じりの静寂が訪れた。

彼は美術室をゆるゆると歩き回ってはオブジェやわたし達の作品を眺め、時には微笑み、時には顔をしかめていた。

彼は無言のままだったが、ハッキリ言って非常にやりづらい。

何度も彼にウロウロしないで、と訴えようとしたが、他の誰も言おうとしないのでわたしは黙っていた。

それにさっき牧瀬さんがお世辞でもわたしのことを「期待の星」と言ってくれたので、ここで大人気ない真似はしたくなかった。

作業に一区切りついたところで時計を見ると、いつものわたしの下校時間になっていた。

わたしは片づけをすると、美術室の中の人達に挨拶をして廊下へ出た。

——ん？

階段を降りていると、わたしは自分のもの以外の足音を聞き取り、足を止めて振り返った。

「嘴本くん……」

「やあ」

彼だった。

「他の美術部の人とは、以前から面識があったからね。だけどキミとは初対面だったから少し話でもしようと思ったんだ」

「！」

わたしが彼にどうして、と問う間もなく彼は話し出した。

「キミは中等部るとき何部だったのかな？ 美術部にはいなかったよね？ でもボクが見たところ、キミは全くの未経験者とは思えないんだけど」

「ああ、わたし、外部編入だったから」

「あ、なるほどね。どこの中学だったんだい？」

回答を拒否する理由もないので、わたしはその中学の名を告げた。続けて彼がその場所を聞いてくるのは予想できたので、わたしはそのことも彼に教えた。

友達には気楽に話していることだったが、なんとなく彼に話すのはおっくうだった。

「ふうん。随分遠いんだね。どうしてそんな遠いところから来ているんだい？」

——話せない。

「この学園の噂を聞いてやってきたのかな？ ここは理事長が芸術に深い理解を示していることもあって、とてもいい環境に囲まれているからね」

「……まあ、そんなところかな」と、適当に話を合わせる。

「キミの桑苑学園の感想は？ 楽しいかい？」

「うん……。まあ」

「明日からもっと楽しくなるよ」

「え？」

「このボクも美術部に正式に入部することに決めたからね。間近でボクとボクの作品に触れ合えるよ」

「——っ！」

彼が素でそのような発言ができる人だということは今日の部活だけで充分分かった。

他意がないことはわかってる。
けれど。

彼のその言葉は、わたしの記憶をえげつなくつついた。

どうして、そういう考え方をするの？

わたしは男の子のために部活をしているわけじゃないのに。

何でも色恋沙汰に結び付けて考えるのはやめてほしい。

『おい、弘明^{ひろあき}。ネズミの奴、お前に惚れてるぜ。へへへ』

『うるせえなあ。ジャマだからあっち行ってろよ』

『うわっ、何だよ。絵の具つけることないだろ。あ、まさかお前も
あいつに……』

『そんなわけないだろ！ うるせえって言ってんだ。消えろ！』

——闇が。目の前に闇が。

「別にあなたに会うために部活するわけじゃないから」

彼に向けた声のトーンが自然と低くなった。微かに震えたことには気づかれなかっただろうか。

「それじゃ、さよなら」

わたしは顔も見ないで彼から離れ、早足で帰路を急いだ。

やっちゃった。イヤな思いをさせてしまった。

彼はわたしを傷つけようとした訳でもないのに。

わたしは他人から傷つけられるのは大嫌いだから、わたしも他人を傷つけたくはないのに、どうしてこうなってしまっただろう。

イヤな女だと思われたに違いない。

電車の窓から流れる外の景色を眺めていると、やがて西日が余力

を使い果たした。

中央線の窓に映ったわたしの顔は、いつにもまして不細工だった。

高校に入ってから今まで、結構うまくいったのになあ。

わたしはまた、ネズミになってしまうんだろうか。

明日からの美術部では彼と顔を合わせるのかと思うとわたしは気が重くなった。

第四話・疾風

帰宅したときには既に夕食の準備が出来ていた。

お父さんはわたしに、おかえり、と告げたかと思うとおなかが空いていたのか、早くごはんにしよう、と急かした。

わたしはうん、と頷いて自分の部屋に戻り急いで着替える。

そして洗面所で手を洗う時に、わたしの指がまだ絵の具で少し汚れていたことに気が付いた。

彼——嘴本薫がいい色だと褒めてくれた色だった。

食卓ではお母さんに背中が丸いよ、と注意された。夕食はおいしかった。

「ふう…」

湯船に身を浸すとわたしは目を閉じた。

食事が終わると次はお風呂。我が家では特別な日を除いて、お母さん、わたし、お父さん、の順に入浴をする。

温かなお湯がわたしの心の中に出来ていたしこりをとろとろと解きほぐしてくれた。まやかしかもしれないけれど。

今の気分のままなら彼にごめんね、と言えそうな気がした。

葛名弘明君は、中学の時わたしと同じ美術部だった。かずなひろあき

美術部はわたしに優しい場所だった。

悪口がない。陰口がない。ひとを噂だけで判断する人がいない。だからわたしは放課後こそが安らぎの時だった。

葛名君はわたしの絵をからかう以外の目的で批判した初めての男子だった。

それは椅子のデッサンだったと思う。

その頃わたしは自分の絵に自信を持っていたので（今から考えると恥ずかしい自惚れだが）葛名君の言葉を聞いた瞬間に感じたのは只の反発心だった。

わたしはスケッチブックを手で隠すと、いかにも迷惑だと言わんばかりに葛名君を睨みつけた。

そんなわたしの態度に葛名君は気を悪くし、一度舌打ちをするとそれきり黙ってしまった。

けれど次の日、冷静になってスケッチブックを見直してみると確かに彼の指摘は正しかった。

そしてあるうことか、わたしがその部分を直しているところを葛名君に見られてしまったのだ。

クククという忍び笑いに振り返ったわたしを見て、葛名君は慌てて目をそらし変な口笛を吹き始めた。

わたしは腹を立てるはずだったのに、なぜかプツと噴き出してしまった。

そして葛名君は、中学に入ってからわたしの初めての男子の友達になったのだ。

そう、友達。恋愛感情なんか介入していない「友達」。

葛名君とする話をもっぱら美術関連の事ばかりだったし、美術室以外でふたりきりになることだってなかった。

彼とは友達。普通の女の子ならば何人いてもおかしくない男友達。なのに、どうして、わたしに関しては、それが恋愛の対象であると断定されなければならないのか。

その日、美術室の入り口は開け放たれていた。そこから男子のやがや声が聞こえてきた。

美術部には他の人の邪魔をしないために美術室で大声を出さないという不文律がある。

だからそんな不躰なことをする彼らは男子部員ではない。わたしは入り口の前で一旦立ち止まって中の様子を伺った。

キャンバスを前に作業をする葛名君。その後ろで二人の男子生徒が葛名君に何度も話し掛けていた。不良じゃない、普通の格好をした生徒だ。

友達が遊びに来た……そんな様子だった。彼らの大声は不快だったが、目を吊り上げて怒るほどのことでもない。

だが、聞こえてきた話の内容が中に入ろうとしたわたしの身を凍らせた。

作り事にしても安易で笑えないシナリオだった。わたしが葛名君に恋愛感情を抱いていて、彼に会いたいがために放課後美術部に通っているというものだ。

女子の間でもよく誰が誰が好きという話題が持ち上がるから、男子の間にもそういうのがあっても何の不思議も無い。

しかし彼らの声に侮蔑のトーンが混じっていたのは「わたしが」関係していることだからだ。

顔の筋肉が、びくびくと痙攣するのがわかった。あいつらは葛名君に嫌な思いをさせた。わたしの気持ちを勝手に決めつけた。美術の世界を侮辱した。許せなかった。今でも許せない。

私がそのまま美術室に入っていた場合の彼らの行動パターンというものが容易に想像できた。

わたしは嘲笑など浴びたくなかったので、その日は部活をさぼった。

そして次の日から、わたしは葛名君の態度が変わったことに気が付いた。

わたしに話し掛けようとしてそれを中断する。

わたしが座っている場所を避けて移動する。

やっぱりわたしの側について、冷やかされるのが嫌なんだと思い知らされた。

彼らがデタラメを吹き込みさえしなければ、友達でいられたとい

うのに。

わたしは必要以上に葛名君に近づく気持ちなど元々なかった。わたしみたいな女に言い寄られても迷惑だとはわたしが一番良くわかっていたから。

葛名君は女の子にもてるタイプだった。彼らがわたしの事を女子にも触れ回らないとも限らない。だから……。

こうして美術部は、わたしにとって安らぎの場所では無くなってしまった。

描きかけの絵も放り出して、わたしは美術部から逃げ出した。

たったそれだけのことだ。くだらない、他の人から見ればとてもくだらない理由だ。

そんなことで彼を傷つける訳にはいかない。心の中までネズミになるのはもうゴメンだ。

目を開けて右腕を湯から上げる。

もう、手には絵の具の跡は残っていない。でもあの色は憶えていた。

美術部から逃げ出すなんてことはもうしない。お母さんとも約束した。

さて、彼に何と言ってフォローしたものか。

『昨日はごめんなさい。あなたに会いたくないと言ったわけじゃないのよ』

……上手に言わないとそれこそわたしが彼に特別な感情を抱いているかのように思われそう。

いやいや、それよりもどういうタイミングで彼に話し掛けようか。むしろそちらのほうが問題だ。

何度か頭の中でシミュレートして……結局まともな答えは出ずじまいだった。

お湯から上がった時には頭がふらふらした。
結局その夜は眠ってしまうまで、過去への悔恨と彼へのフォローのことを無駄に頭の中に巡らせていた。

翌朝、悩んだまま登校していくと、もう教室には珠美ちゃんがいるた。

彼女はわたしに気づくと自分の席からわたしに手を振ってくれた。
わたしも笑って手を振り返した。

そうだ、珠美ちゃんから元気を分けてもらおう。

「珠美ちゃん、おはよう」

「おはよう……。和美ちゃん……。ねえ、わたし、またやっちゃったあ」

「……あれ？」

珠美ちゃんはさっきのテンションから一転、甘えるような泣き声でわたしの腕を柔らかく掴んで顔を伏せた。

「どうしたの？」

「昨日ね、バスケ部の紅白試合があっただけど、わたしったらその最中にドジって籠の中のボール全部コートにぶちまけちゃったの」
「ありゃー」

わたしはその様子を頭に思い浮かべた。

「皆の視線が冷たくて恥ずかしかったよう。駄目だなあ。わたし」

「ま、まあ、失敗は誰でもするっていうか……」

「でもわたしって鈍臭いから、初日から先輩マネージャーさんに怒られっぱなしなの。あ、今日部活行きたくないな」

あ……親近感。

なんとなく珠美ちゃんの頭を撫でたい気分になったりして。

なでりなでり。

あ、ホントにサラサラヘア。

珠美ちゃんは日向ぼっこしている小動物のような表情で顔を上げた。

おまけに、本当に動物みたいにふにゃと声を立てたので、わたしの顔はゆるんでしまった。

と、珠美ちゃんが私の肩越しに視線を反らした。つられてわたしもそちらを見た。

「あつ、相模^{さがみ}くん、おはよう」

「ああ、マネージャー」

珠美ちゃんが挨拶したのは、左目の下に絆創膏を貼った短髪の男子だった。うちのクラスの男子である。

身長はそう大きい方ではないけれど、筋肉質でひきしまった体型をしている。いかにも体育会系の男子らしい。

相模という苗字と彼の顔は覚えていたが、彼の名が相模なんとか君だということは今覚えた。

「昨日はごめんね？」

「昨日？ ああ、あれか。別にいいぜ、もう。いつものことだから「はうっ」

「おい、そんな情けない顔するなよ。ちょっと失敗したくらいで「でも」

「そんなことくらいで落ち込んでたら、いつもファイブファウルで退場くらっている俺はどうなる？ とっくにバスケ部退部してるぜ」

「それは……」

「誰だって初めは失敗は当たり前だ。あまり気にしないで今後取り返せばいいだろ」

「うん……ありがとう」

相模くんは自分の席についた。珠美ちゃんは黙ってしばらくその姿を眺めていた。そして小さくわたしにつぶやいた。

「同じクラスにバスケ部の人がいて良かったあ……。だいぶ楽になったよ。あつ、和美ちゃんも撫で撫でありがとね？」

わたしはクラスメートだからという理由だけじゃないだろう、と思ったが黙っていた。

わたしもこんなに簡単に楽になればよいのに、と珠美ちゃんをうらやましく思った。

放課後、わたしは重い足取りで美術室へ向かった。顔を合わせた時が一番気まずい。さてさて……。

美術室のドアを開けるとすぐそばに2年の永山先輩がいた。挨拶しようとする、人差し指を閉じた自分の唇に当て、わたしを口止めた。

わたしは「？」と目で永山先輩に聞いた。先輩は淡く微笑んで指で一方向を指してみせた。わたしはその方向を見た。

「あ……」

うっかり声を漏らし、あわてて口をつぐむ。

そこにはやや大きめのキャンバスが立てかけられていた。その前で男子生徒が上着を脱ぎエプロンをつけて立っていた。

彼——嘴本薫だった。

キャンバスにはすでに完成しかかった油絵が描かれていた。

彼は昨日の今日でもうここまで描きあげたというのだろうか。

しかし、そんなことは驚くに値することではない。

なぜなら、なぜなら——

彼の言葉が蘇ってくる。

『ボクが入部することで美術部のみんなの自信を失わせてしまう』

それは間違いだった。

彼のレベルがそこそこ上手いという程度ならば、わたしは親近感やライバル心を感じていただろう。

それ以上のレベルなら、わたしは実力差に愕然とし、自分の技量の低さが恥ずかしくなってしまうだろう。

でも、彼の場合、そんな次元すらも超越していた。

彼のレベルは、見ている他人のレベルをも引き摺り上げてしまう……！

わたしの胸がどきどきと鼓動を速めていた。

彼が描いていたのはこの学園の敷地内にある記念館のようだった。わたしも学園の下見のときに見たことがある。

荒々しく力強い線に、単独ならば暑苦しさも感じさせる暖色系の配色。

それなのに、全体としてみると、記念館を照らす柔らかな陽光が見事に再現され春らしい暖かさにとどまっている。

こんなに荒っぽい線なのに記念館の神秘性を損なわせないのは何故だろう。

こんな色の使い方があったなんて、こんな筆の使い方があったなんて。

——試したい。わたしもこんな絵を描いてみたい。

彼の予言は当たった。

『明日からもっと楽しくなるよ』

『間近でボクとボクの作品に触れ合えるよ』

ああ、認めなくちゃいけない。

彼の作品から目を離すことができない。もっともっと彼の作品を目にしたい。

わたしの中に激しく湧き上がる創作意欲の奔流。

わたしってこんなに美術を愛していたっけ？

さっきまでのつまらないわたしの悩みなど、とっくに押し流されていた。

「やあ、関根くん」

一息ついた彼が振り返ってわたしに気がついた。わたしはごくりとつばを飲み込んだ。

「あ、うん……」

完敗だった。何に負けたのかは分からないけれど、とにかく完敗だった。

彼の見ている世界はあまりに広い。

昨日のわたしの言葉とて、もう気にしていないのだろう。

永山先輩が彼の絵を指差しながら何事かを彼に話し掛けた。彼もうんうんと頷き先輩に笑顔を見せていた。

これが天才・嘴本薫——！

第五話・課外授業

うん、大丈夫。わたしには「絵」さえあれば。きっと……。

「次週日曜、水族館にて課外授業を行う。参加希望者はいるか？」
帰りのHRで音羽先生がだしぬけにそんなことを言い出した。
聞きなれない言葉にクラスはざわめき、先生はわずかに眉を顰めた。

その様子に気づいた一人の眼鏡の男子生徒が手を挙げて先生に質問した。彼は男子にしては背が低くて色も白く大人しい印象だが、授業中はよく発言をしており頭の良さそうな印象を受ける。名前は……えーと、今は思い出せない。

「先生、課外授業というのは何でしょうか？」

「ふむ、諸君らに課外授業をするのは初めてだったな。説明が必要だろう」

ゴールデンウィークも終了し、わたしも大分クラスメートたちとの距離が決まってきた頃のことだった。

「我が音羽学級では不定期に課外授業を行うことにしている。既に自覚していることと思うが、音羽学級の一員たるもの様様な点において優秀な生徒であることが要求される」

わたしは（それに、たぶん他のクラスメートも）ツツコミを入れたくなったが黙っていた。

「現在学園で定められているカリキュラムでは、各専門分野の知識を吸収することまでしかできない。もちろんそれも大切な勉強だ。自身に蓄えられた知識量に比例して諸君らの将来の選択の幅も広が

ることになるだろう。しかし、それだけではただ各教科の定期試験の点数を取るだけでよいという認識をしてしまう危険性もある。そこで私が行う課外授業によって多角的な視点で物事を見、そして総合的に判断する力を養ってもらいたいというのが目的だ。無論、学園外に出ることによって一般常識や礼儀、そして集団行動における良識も身につけてもらいたい」

教室内はまだかすかにざわめきつつも、いつものように静かになっていった。

音羽先生は目を細め教室内を見回した。

「課外授業への参加は自由だ。強制はしない。次週日曜日の午前10時、いさや臨海公園の正門広場に集合だ。参加希望者は挙手せよ」水族館か……。

わたしがぼんやりと頭の中の水族館の記憶を引き出していると、やがてパタパタと手が上がった。初めに音羽先生に質問した男子を含む、このクラスでの優等生組が主だった。

と、わたしの斜め前の方に座っていた珠美ちゃんが肩越しにちらりとこちらを振り返るとウィンクしてみせた。

この前の席替えでも珠美ちゃんとあまり席が離れなかったのはラッキーだった。時々、退屈な授業中にわたし達はアイコンタクトを取っている。

珠美ちゃんは前に向き直って手を挙げた。彼女のウィンクの意図が判ったわたしは合わせて手を挙げた。

見回すと手を挙げた女子は、わたしとよく話す「おとなし系」の女の子達だった。

参加メンバーは男女あわせて全部で8人だった。

「……よろしい。では、次の日曜、挙手したものは必ず集合するよ。以上、HRを終了する」

そしてわたし達は机を後ろにさげ掃除を担当の人に任せて教室を出た。

「珠美ちゃん、どうしたの？ 何で課外授業に出る気になったの？」
廊下に小さな集団が出来た。課外授業に参加する女子達の集まりだ。

「うん、実はね、わたしの3つ上の先輩から音羽先生が課外授業をするってことはちょっと聞いていたんだ」

「あー、そうなんだ」

「で、どんな感じなの？ 音羽先生は」

「うん、数学の授業中ほど怖くはないらしいよ。勿論あんまり騒いだりしたら怒られるけど、先輩は結構楽しかったって言ってた。何かね、集団デートみたいだったって」

「集団デートか？」と、女子の一人、小笠原静香おがさわら しずかちゃんが視線を斜め上にあげ嬉しそうな顔をする。

「ねえ、珠美ちゃん？ これって内申書とかよくなるのかな」と、聞いたのは間紀子はざまのりこちゃん。

「なんかそういうのもあるみたい。先輩が直接先生に聞いたわけじゃないんだけどね」

「いさや臨海水族園、この間オープンしたばかりだからちょっと気になってたんだよね」

「でも水族館で結構久しぶりだなあ」

「そうだよな。近所にあると、かえって『いつでもいいや』って思っちゃうよね」

わたしも水族館は久しぶりだ。それからわたしたちの話題は最後に水族館に行った時のことに移り変わり、掃除当番の人に追い立てられるまでそれは続いた。

期待はいやがうえにも膨らんでいった。

そして水族館行きを明日に控えた土曜日の夜。

「んおっ!？」

居間の絨毯の床の上にうつぶせになっていたお父さんは変な声を上げるとテレビの方向へ身体を捻った。

「わっ、危ないなあ、お父さん！」

お父さんの背中を踏んでいたわたしはバランスを崩して床に片足をついた。

踏んでいたといっても別にわたしは家庭内暴力をふるっていたわけではない。

お父さんは仕事で疲れるとお風呂上りにお母さんやわたしに背中を踏ませて按摩代わりをさせる。

お母さんは体型は普通だけど背が高いので体重はそれなりにある。わたしは背は普通でも痩せ型なのでお母さんよりは軽い。

だからどちらを選ぶかによってその日のお父さんの疲労度がわかるのだ。

何、とわたしが問うとお父さんは、見てみ、と言ってテレビを指差した。

テレビの向こうでは、一人の女性タレントがたくさんマイクの前でレポーター達の質問に答えていた。

『藍原ちはる 電撃離婚』と太文字のテロップが流れている。

合わせていたチャンネルでは報道番組とワイドショーをミックスしたような番組を放送していた。

藍原ちはるといふのは幼稚園児からお年寄りにまで人気がある女性アイドルグループ「CAT & amp; KITTY」のメンバーの一人だ。年齢は22歳（と、テロップに書いてある）。

去年TVの恋愛ドラマで共演した同い年の俳優、三井寺拓郎みいでら たくろうと結婚し、このときも週刊誌やワイドショーを騒がせた。

それから二人はわずか1年3ヶ月で離婚してしまったことになる。

「若すぎると思ったんだよなあ。二人とも」

と、お父さん。そう言えば結婚の報道のときにはそんなことを言っていたような気がする。

藍原ちはるは演技なのか本気なのか視線を下に落とし顔を歪めていた。

——お互いに仕事が忙しくてすれ違いが多かったような気がします。

——決して愛情がなくなった訳ではないんです。

——今でも一俳優として拓郎さんを尊敬しています。

矢継ぎ早やにレポーターの質問を受け、彼女の目に涙が滲んできた。

……わたしは何だかムカムカして大きく息を吐いた。

「考えなしに結婚するからこんなことになるんだよ」

「ん？　なんだ、和美は独身主義者か？」

「そうじゃなくて。結婚するからには一生そばにいる覚悟をするはずでしょ？　それがたった1年だって。いかにいい加減な気持ちで結婚したかってことよ」

「ははっ。人を好きになるときは誰もその気持ちが終わるだなんて考えもしないさ」

「でも、一度結婚という形で恋愛感情を明言したなら、その言葉には責任をとるべきだわ」

「世の中には1日で終わる恋もあれば一生ものの恋もある。俺を見ても。かなと結婚して16年。片思いの時間を加えると27年。ずっと俺はかな一筋だぜ」

「あう……。お父さん、それ、この間も聞いたばかり」

「大助、呼んだ？」

と、かなさんことお母さんが自分の名前を聞きつけ台所から居間に戻ってきた。

そう言えば、子供の前で夫婦が名前で呼び合うというのは割と珍しいことらしい。これも友達の家遊びに行ったときに知ったのだ。

「ああ、いや。ほら、藍原ちはる、離婚だってさ」

「ん？　あら……やっぱり。若すぎると思ったのよねえ。二人とも」

と、二人は夫婦らしさを見せつける。

「ドラマで役作りしすぎたのよね。まあ、二人とも芸能人としてもまだ若いんだからいい勉強になったでしょ」

わたしはそれはちょっと違うんじゃないか、と思った。

結局藍原ちはると三井寺拓郎は恋愛ドラマをやったせいで勘違いの恋に落ちてしまったのだろう。

でも勉強になったというのはどうだろう。

芸能活動をするための糧としての恋愛というのは何か違う気がする。二人は芸能活動をする為に結婚生活を破棄した。だからこの場合、恋愛は仕事に不要なものとして判断されたということなのだと思う。

そこのところはわたしの場合と似ている。

わたしが美術部として活動する際には恋愛は必要ない。

かつては、わたしの部活動を恋愛感情と強引に結び付けられ不愉快な思いもしたが、高校に入って一ヵ月半たった今、そんなことで腹を立てていたことが馬鹿馬鹿しくなった。

それはわたしが美術に専念できず雑念に惑わされていたただけなのだ。

最近、日常のふとした一コマから絵のモチーフを見つけることが多くなった。

美術部のみんな——特に天才と呼ばれた彼——の作品と触れ合ったことでわたしの中の感性がブルブルと活性化しているのを感じる。これだけでもわたしが桑学に入学した甲斐があるというものだ。

「そうだ、和美」

「何？ お母さん」

「和美、明日ヒマ？」

「え……何？」

「お米、買ってきて欲しいと思ったんだけど」

「あ、ごめん。明日水族館に行くんだ。学校の側の」

「帰りに……って疲れてるか。まあいいわ。明日の朝パンにすれば間に合うから。ところで水族館って？ デート？」

「ちがーう！ 学校の課外授業」

「あら、そんなのがあるのね」

お母さんはたまにこういうデリカシーの無いことを言う。

とは言え、お母さんは全然悪くない。お父さんの話によると、お母さんは高校の頃からものすごくモテていて何人もの男の子からデートの誘いを受けていたそうなのだ。

だからお母さんにとっては休日のデートは極普通のことという認識らしい。

当時純情少年だった（と、お父さんは自分でそう言う）関根大助くんはライバルが多すぎて遠くから眺めることしか出来なかったのだという。

高校を卒業して毎日顔を合わせることができなくなると、お父さんは諦めて気持ちちが自然消滅するのを待ったこともあった。

でもどうしてもお母さんを忘れることができてなくて一世一代の大決心でお母さんの家の電話番号をダイヤルしたのだった。この時お父さんの頭の中にはフィンガー5（昔の流行歌手だそうだ）の歌がリフレインしたという。

それがお父さんのお母さんへの初めてのアプローチだったそうだ。

「和美、もう一回、背中頼む」

お父さんがわたしに呼びかけた。わたしは「ん」と言って再びお父さんの背中の上に立ちゆっくり足踏みを始めた。

お父さんはうーと低いうなり声を出した。このお父さんがそんな引っ込み思案だったなんて信じられないんだけど…。

番組は次のニュースに移り変わっていた。

「おはようございまーす」

いさや臨海水族園は『いさや臨海公園駅』を出るとすぐそこにある。

この駅はわたしの定期を使えば一駅乗り過ごしたただけの交通費で行ける。

集合場所には銀色のオブジェがあり、そばにスーツ姿の音羽先生が立っていた。

「関根か。おはよう。お前が一番乗りだな」

「あ、そうなんですか？」

真の一番乗りである音羽先生が言う。

まあ、わたしが一番距離的に遠いので用心の為に早めに来るのは当然だ。

「関根はここに来るのは初めてか？」

「はい、毎日通学時に建物は見えていたんですけど」

「そうか」

わたしは広場のオブジェを中心に周りを見回した。この辺は最近再開発が進み、臨海公園も出来たばかりだ。

公園の施設である建物はどれも近未来的で今わたしが踏んでいるレンガ道も真新しい。

時おり風が運んでくる潮風の匂いが心地良かった。

こんなきれいなところならもっと前から来ててもよかったかな、とわたしはきっかけを作ってくれた音羽先生に心の中で感謝した。

やがて参加メンバーが次々と現れ、定刻になったところでわたし達は先生の後について水族館の建物に向かった。

全員でいっぺんに移動すると他のお客さんに迷惑になる、ということであつたたちは入り口のところで二班に分かれてから見学を始めた。

「わあ、見てアレ！ 凄い綺麗！」

「ねえねえ、あの魚さ、人間でもああいふ顔の人いるよね」

「あー、この水槽の分だけウチに欲しい」

「あつ、あつ、ホラ、エサに群がってるよ！ 凄い迫力！」

わたしが心を惹かれたのは、紅海をはじめとした暖かい地方の海に住む魚達の水槽だった。彼らのボディのサイケデリックな色づかいと模様はわたしの想像力をはるかに凌駕している。それらは小さな子供の描く絵を思い出させた。

仮にわたしが知らずにこの魚の絵を見たとしたら、その不自然さから人工物であるかのような印象を受けたかもしれない。そう、普通の魚の体にいたずらして原色の絵の具の線を乱暴に描きなぐった、といわれた方が信じてしまいそうなくらいだ。自然界はわたしたち平凡な人間が想像する程度の「自然さ」などでくれるものではないのだという事をわたしは身をもって知った。

ああそうだ、しまった。どうせならスケッチブックを持ってくればよかった。

近くにいた家族連れがデジタルカメラで水槽を撮影しているのを見てわたしは後悔した。

こんなにもいいモチーフが1000円もかけずにいくらでも見られるというのは甚だ魅力的だ。

今は班行動だからあまり自分のペースで観賞できないのが惜しい。

「和美ちゃん、そろそろ行こう？」

珠美ちゃんが水槽を見つめ続けていたわたしの肩を叩いて先に進むことを促した。

「何を見ていたの？」

「ああ、この魚の色。この青とも緑ともつかない蛍光色」

「うん、綺麗よね」

「わたしが前に水族館に行ったのはもう小学校の頃だけどこの色はハッキリ覚えている。水族館の色だなあって」

「あー、うんうん。水族館でなきゃこんな色見ないよね」

「そうでしょ。……あ、ごめん。先に行こうか」

わたしは皆に合わせて移動する。だけど近いうちにまたここに来たいと思った。

今度はスケッチブックを持参して……。

時間を気にしないでいいよう一人で……。

ああ、いや一人じゃダメだな……この感動を交換し合える人がいないと楽しくない。

今日はみんなや他のお客さんの口から漏れ出した感想を聞くのも楽しかったんだし。

そこまで考えてふと悲しくなった。

わたしには誘える人がほとんどいないんだっけ。誘えそうな人と言えば全員今日参加したメンバーだ。

あ、美術部の人はどうだろう。もし部活動の中で何らかの機会があったら提案してみるのもいいかもしれない。

うん、鋭い意見の交換ができるかも。

わたしはその状況を思い浮かべると、少し胸が躍った。

水族館の見学が終わったのはお昼少し前だった。

音羽先生の解散宣言のあと、女子グループはそのまま水族館内のレストランで海を見ながら昼食をとることにした。

「面白かったね、今日」

「うん、大満足。魚見てると、癒される感じ」

「うんうん。またしばらくしたら来てみたいな」

「うん。その時は私服で……」

「青野君と？」
あおの

「んっ、んんっ……ゴホゴホ」

青野君というのは、この間課外授業のことを先生に訊いた男子のことだ。その名前を出された静香ちゃんは慌てたようにむせた。

「で、これからどうするの？」

「ん？ どっか寄ってく？」

「和美ちゃんはどう？ 今日これから何か予定ある？」

「別にないけど……」

「それじゃさ、静香ちゃんの要望もあるから」

「わたし、別に要望してない」

「ちよっと服見ていかない？　ここの近くにアリタっていう新しいブティックが出来たんだよ」

「あ、そうなの？」

「値段はちよっと可愛くないんだけど、おしゃれなのがそろっているみたい」

「へー、知らなかった。行きたい行きたい」

「……」

ブティックのことで盛り上がるみんなを見て、わたしの胸はトクンと嫌な音を立てた。

3人とわたしの距離が開いていくような気がした。だってわたしは、自分で服を選んで買うことができない。

——他人には言えない、本当に情けない話だけど。

店に並んだ洋服を見ていいな、と思うことはある。

勇気を出して試着したこともある。

だけど試着室の鏡に映った自分の姿を見てわたしは心底嫌になった。

わたしが完全に洋服に吞まれていた。

洋服の可愛らしさのせいで冴えないわたしの容姿が余計に浮いてしまった。

試着を終えたわたしを見る店員さんの顔が嘲笑わらっているように見えた。

だからわたしはお母さんと一緒にないと洋服が買えない。

自分の好みとお母さんの見立てとの折り合いをつけて、やっと新しい服が買えるという体たらくだ。

制服を着ているときのほうがほっとする。制服なら着ている本人のセンスは問われないで済むから。

「…ちゃん？」

「和美ちゃん？」

「ねえ？」

「えっ、何？」

「どうしたの？ おなかいっぱいなの？ 気持ち悪くなったの？」

眼下には料理が一口分だけ申し訳なさそうに残っていた。わたしはあわててそれを口に放り込んだ。

「それじゃ、しばらく休んだらアリタ行きね」

「…うん」

ここでわたしが断っては変に思われてしまう。

…うん、ただ見るだけなら大丈夫だろう。

考えてみれば変な話だ。美を追求するはずの美術部員のわたしが、自分のことではこんなにも無力だなんて。

わたしは何か欠けた人間なのだ。

ふと、音羽先生が課外授業の目的をわたしたちに説明していたときのことを思い出した。

わたしにとってはここからが課外授業なのだ。そんな気がした。

第六話・ブティック・アリタ

中学二年の時の見学旅行のことだった。

入浴時間が終わり、わたし達は割り当てられた部屋の中で就寝までの自由時間を過ごしていた。

6人で構成されていたわたし達の班のメンバーは畳や布団の上に輪になって座りランプをして遊んでいた。

「はーい、あがりっ、と。関根さんがビリね」

「あっ、あっ、ああっ…」

「じゃ、罰ゲームよ。男子の班、ここに呼んできてね」

「ちよ、ちよっと待って。できない。わたし、そんなことできない」

「ダメよ。最初に決めたことでしょ。ルールは守らなきゃ」

「でも、でも…」

「ズルいわよ、関根さん」

わたしを睨みつける副班長の小泉さんこいずみ。わたしはその視線に耐えられず俯いた。

「……もういいでしょ。できないって言ってるんだから」

「何よ、関根さんだけ特別扱いするの？」

「仕方ないじゃない。関根さんに男子呼んで来いなんて可哀想だわ」

「そうよそうよ。可哀想だわ。もう一回やりなおししましょ」

「えーっ」

わたしの態度に腹を立てた人たちと、わたしをかばってくれた人たちの言い合いになり、部屋の中の雰囲気が悪くなった。

わたしにとってはどちら側の人も針の筵の針だった。

「ごめんなさい。わたし、もう寝る…」

バカ、バカ、バカ！ わたしって最低……！

部屋の隅っこの布団に逃げるようにもぐりこんで、卑怯にもわたしは自分のためだけに泣いた。

ほら泣いちゃった、と誰かの声が聞こえた。胸がつん、と痛んだ。

わたしは珠美ちゃんも静香ちゃんも紀子ちゃんも皆好き。
好きな人と会話するのは好き。
だから、離れていかないで。お願いだから。

ブティック・アリタは臨海公園駅の側の噴水を囲んだショッピングモールにあった。

わたしは不安を少しでも和らげる為に、店に入りながら珠美ちゃんに本音の一部を打ち明けた。

「こういう店に入るのは緊張するなあ」

「え、そうなの？」

「うん：わたしが普段服を買うときはデパートの店でなんだ」

しかもお母さんと一緒にでなきゃ買えない、とはさすがに言えない。
靴下や下着など、目立たない部分の衣類は特に意識することなく
自分の好きなものを買えるのだけれど、人目にさらす衣類を選ぶと
きはどうしても怖じてしまうのだった。

「どうしてデパートの店ならいいの？」

「だって、ほら仕切りとかないから、他の買い物ついでに気楽に
寄れるし、気に入ったものがなかったらすぐ逃げられるじゃない」

「あははっ、なるほど」

珠美ちゃんは『逃げられる』という言葉にウケたらしい。

「和美ちゃん、マジメっ子さんだもんね」

「それ褒めているの？ 貶しているの？」

「ん？ どっちでもないよ。和美ちゃんらしいな、って思っただけ」

「……」

「大丈夫だよ。わたしだって今日は買うつもりないし……あつ、店の人に聞かれてないよね？ えへっ」

目をキョロっと動かし悪戯っぽく舌を出す珠美ちゃん。

わたし達は適当に分かれて、自分の好みの服を探したり、服の感想を話し合ったりした。

「どう、和美ちゃん？ あ、パーティードレス見てたの？」

珠美ちゃんが近づいてきて話し掛けた。でもわたしはあまり真剣にドレスを見ていたわけではなかった。

わたしは所詮冷やかしてしかないため、店員さんに声をかけられると困るので出来るだけ離れた場所に移動してただけだった。

「うん……。まあ、本当に見ていただけだね。高いね、やっぱり」

「まーね。でもやっぱり『ここぞ』という時のために何着か持っておきたいじゃない？」

「……」

ここぞ、ってどういう時だろう。

「わたしは静香ちゃんの家みたいにお金持ちじゃないから、気に入ったものをすぐ買うことはできないけど、

まめにいろんなお店に通って、自分好みの服があるかどうかチェックだけはしておくのよ」

「チェックだけ？」

「そう。お洋服みたいに長い付き合いになる買い物は、後悔しないように普段の地道な調査が必要なのよ」

熱弁をふるう今日の珠美ちゃんはいつもより数倍活き活きとして見えた。

「あせって高いお金出して買った後でバーゲンセールになったり、違う店で同じのが安く売ってあるのを見たらがっかりするもん。……なんて、お母さんと一緒に服を見ているうちに自然に身についたことなんだけどね」

そう言えばわたしのお母さんもおなじようなことを昔言っていたような……。

「珠美ちゃん、今もお母さんと一緒に服を選んだりする？」

さりげなさを装って訊いてみる。

「行くよ。でもお母さんとわたしのセンスには隔たりができちゃったから、今はどっちも自分のだけ別々に選んでる。せっかくわたしが大人っぽい色合いの服を選んでいるのに、お母さんたらわたしにフリルつきのとか花柄模様とかの服着せようとするんだよ。恥ずかしいから、今じゃほとんど意見は聞かないなあ」

「そうなんだ」

やっぱりわたしとは買い物の仕方が違うな、と実感した。

お母さんに服の買い物に付き合ってもらうのは床屋の定休日とわたしの学校が休みの日が重なる日なので機会はそう多くない。

だからお母さんにも悪いので、買い物ではいつも妥協している。

……子供だな、わたし。

「でも、待ちすぎて誰かに買われちゃうこともあるでしょ？」

「あるよ。その時は泣く」

くすつ、と笑う珠美ちゃん。

「まあ、その時はその時で、イソップ童話の酸っぱい葡萄だったと思っただけであきらめるの。勿論そのときのために第2、第3の候補を決めておくのもぬかりありません」

……気に入った服を見つけるために、いろいろなお店をチェック、か。

そう言えばこの間、美術部でも同じようなことがあった。

彼……嘴本薫が美術室での作業を中断し、窓から空を見上げてため息をついたかと思うと牧瀬さんに外出を告げた。

どうやら欲しい色の絵の具を探しに町へ出るということのようだ。

『滑稽だよ。僕はこの雄大な青空からほんのひとしずくだけ分けてもらえれば満足なのに』

その時は彼に、詩人だなあ、などという感想しかもたなかったが、

今に思えばそれは彼の絵を描くことに対しての徹底したこだわりの証だ。

その姿勢は、わたしが珠美ちゃんや彼に見習わなければならないものかもしれない。

と、向こう側で紀子ちゃんが手を振っているのが見えた。

わたしがそれに応えて手を挙げると、紀子ちゃんは今度はおいでおいでと手招きした。

珠美ちゃんとわたしはそちらへ歩いていった。

「静香、今、試着中」

紀子ちゃんが親指でそちらを指し示す。

そして試着室のカーテンが小さくふわりと動き、中から変身した静香ちゃんが現れた。

静香ちゃんは自分を待ち構えるようにして立っていたわたし達にちよつとびつくりして目を見開いた。

「えっと。どうかな？」

青紫のリボンのサマーニットに、桃色がかった赤のブーツカットのパンツ。

もうすぐ来る夏を意識したのか全体的にスマートな印象を与えるファッションだった。

「うんうん。いい感じ」

「静香ちゃん、脚長〜い」

「凄いなあ。さわやか少女してる…」

「褒めてくれるのは嬉しいんだけど、あはは」

と、静香ちゃんはひきつつた笑いを浮かべた。

「どうしたの？」

「き、つ、い。ひ〜ん」

静香ちゃんは試着室に駆け戻り、元の制服に戻って出てきた。

そして店員さんにサイズのことを訊いたが、店員さんは申し訳ございません、と答えた。

「気にいったんだけどなあ」

「どうするの？」

「うーん、あきらめなきゃいけないかな…」

「似合ってるのに」

「あ、そうだ、ねえ、和美ちゃん」

「？」

静香ちゃんがわたしに目を止める。

「和美ちゃんが着てみて。これ」

「え、わたしが？」

「うん。だって、この4人の中で一番スリムなの和美ちゃんだもん」

「ええっ、でも……」

「お願い。普通に着られる人の姿を見ておきたいの」

「……」

友達の願いとあらば無下にも断れなかった。

静香ちゃんからニットとパンツを受け取ると店員さんに1度ぺこりと頭を下げて更衣室に入る。

わたし自身はしたことのない服装だった。

身体のラインがでてしまう衣類は恥ずかしくてあまり着たくないのだ。

……わたしはそっとカーテンを開けた。

「着てみました」

「おー」

「そう言えば制服じゃない和美ちゃんて初めてだね」

「結構かわいいかも」

見つめられる私。姿を評価される私。

社交辞令といえどあんまり褒めるような言葉は言わないで。

わかっているのに……顔が赤くなってしまう。

わたしは色が白いので特にそれが目立ってしまう。

隠せなくなっちゃう。

わたしがさっき見た鏡の中のわたしを見た時の思いを。

そんなはずない。こんなそばかすだらけの貧相な顔に明るくて爽やかな服装は似合わないはずなのに。

「どう？ きつくない？」

静香ちゃんは上から下までわたしの体を舐めるように見ながら訊いた。

「え、あ、うん。別に」

「……よし決めた。わたしの目標は和美ちゃんボディよ！」

「えー!？」

思わず背中を曲げ、両手で自分を抱きしめるようにして隠してしまおうわたし。

「あー、何で隠すの？」

「変なこと言わないでよ」

「えー、うらやましいよお。和美ちゃん、痩せてて。しかも色白だし」

「……」

わたしの方は、痩せすぎなのがコンプレックスなのに。

「静香ちゃんだって全然太ってないじゃない。わたしの方が不健康なんだよ」

「それは違うわ。和美ちゃん。いい服着て格好よく見せるにはスリムなほうがいいよ。絶対」

「わたしの場合はスタイルがいいんじゃないかって、子供の体型なだけだよ……」

「そんなことないってば。和美ちゃんは普段何かしてるの？ 食事とか運動とか」

「何も……何もしないよ。わたしいつも好きだけど飯食べてるし、運動も全然してないけど体質的に太らないみたい」

「「「!?!?!」」」」

全員がわたしを凝視する。店員さんまで。

静香ちゃんがふう、とため息をついてわたしの肩に手を置いた。

「うらやましい……。で、和美ちゃん、体重いくら？」

「……」

わたしは静香ちゃんにその数値を耳打ちする。

「うー、がんばらなきゃ」

静香ちゃんは苦笑して頭を掻いた。

「でも決めた。やっぱりそれ買うっ。和美ちゃんが太らない体質ならちょうどいい。その体型崩さないで。わたしの理想体型にするからっ」

月曜日の朝。

夕べは早く寝たのでは目覚ましの直前に気持ちよく起きることができた。

パジャマから制服に着替えるときに習慣的に見ている目覚し時計の時刻もいつもより早かった。

友達同士で買い物なんて久しぶりだった。

学校の行事に関係のない買い物だったら確か初めてのはず。

……楽しかった。

まだ顔が火照っていたときの感触を覚えていた。

まさかわたしがあんなこと言われるなんて。

そう言えば、みんなも家族と来るより友達同士で来るのが楽しいって言ってたっけ。

でも……まだやっぱり1人でブティックに入るのはちょっと怖いかもしれない。

昨日は4人だから気持ちも楽だったけど……。

……あれ？

ブラを留めようとして背中に戻した手が微妙に違和感を覚えた。

きつく、なった？

ゴメン、静香ちゃん。

もしかしてわたし、ちょっと太ったかも。

第七話・雛鳥

チャイムの音が教室内に響き、わたしはシャープペンシルを机の上に手放して小さく息をついた。テスト終了だ。

先生の指示通り一番後ろの席の生徒が立ち上がってテスト用紙を順に回収していった。

紙の擦れる音と、緊張を解いた生徒たちの声で辺りはにぎやかになった。

これで1学期の期末テストはすべて終了した。

窓の外を見ると、曇り空も緊張を解いたのか雲がゆるゆると流れて晴れ間を覗かせている。

このまま梅雨が明ければいいな、とわたしは思った。

クセツ毛の人間が一番苦手とする季節は雨季だ。

湿気を吸った髪の毛は宿主の気持ちを無視して元気に暴れだしてしまう。

だからわたしはこの時期だけはお母さんに言われる前に「切つて」と自分から頼んでいる。

晴れ間から差し込む太陽光がこれから湿度を下げてくれるのだと思うと、ちょっとだけありがたいものに見えてくる。

とはいえ、その光がまもなくわたしの最大の敵になるのだということもまぎれもない事実である。

夏の日差しに含まれる紫外線がわたしのそばかすを広げて目立たせてしまうのだ。

……全く。欠点が多い人間には安心できる時間も短くしか与えられない。

放課後。わたしは誰とも連れ添わず京葉線のホームに立って家とは逆方向の臨海公園駅へ向かう電車を待っていた。

試験の終了とともにクラブ活動も解禁される。美術部では9月末に行われる高校美術展への出品の準備にとりかかるところだ。

尤も、もっと以前から製作に取り掛かっている部員の人もいるし、自分のペースだけで活動している人もいる。それは星見先輩と嘴本くん……美術部所属の二人の男子部員が二人ともそうなのだ。

一応今日もテスト期間ではあるが事実上今日の放課後から活動再開となる。

しかしわたしは活動が自由な美術部員なので今日は自主的にお休みして（つまり休んだぶんの責任は自分でとるということ）、午後の空いた時間を私用にまわすことにしていた。

その予定というのはショッピングモールでブティックの「はしご」だ。

家の近所ではなくてこちらを散策場所に決めたのには幾つかわけがあるが、珠美ちゃんからいろいろと情報を仕入れておいたから、というのが最大の理由だ。

一人で洋服をあれこれ見て回る――他の人が聞いたら他愛ないことなのだろうが、これはわたしにとっては一大決心を要することである。

電車が到着した。

ショッピングモールの入り口をくぐり、わたしはゆるゆると端から店を眺めて歩いていく。

わたしの家がある商店街とは違って店舗は皆新しく、また住居と一緒に建物でもないので生活臭はあまりしなかった。

ブティック・アリタに近づくとなわたしは歩調をさらに緩めた。

ここは以前に来たことがあるので、ある意味一番入りやすい場所でもある。

とはいえ、アリタのショウウィンドウに並ぶ服はわたしには縁の無さそうなカッコイイものばかりだった。

でも、それだけではないことは、この前静香ちゃんに頼まれて試着したときに分かっている。

——もし、あのときの感情が自惚れでなければ。

わたしはあの服が気に入ってしまった。もっと言わせてもらおうと自分に似合っているんじゃないかとさえ思ってしまった。

みんなも褒めてくれた。

友達としての最低限のお世辞として底上げ評価はされているだろうけど。でも。

わたしが気に入った、というのは大きかった。

だから今日はもうちょっと真剣にお気に入りを探してみたいと思ったのだ。

幸いにもわたしは画材以外でお小遣いを使うことは少ない。高校に進学してお小遣いを上げてもらったが正直なところ中学までの額でも何とかやっていける。

だからと言って「下げてもいいよ」などと言うほどわたしは清くないので今のわたしはそれなりのお金を持っていた。

だから今日、どこかの店で気に入った夏物を見かければ一着買ってもいいかなと思っていた。

自動ドアが開き、わたしは店の中に体を滑らせる。いらっしやいませ、と声をかけられる。

トクン、と心臓が鳴った。

——落ち着け、わたし。

わたしはまず、この間静香ちゃんがいた場所からあたってみることにした。

.....。

.....。

わたしが小さい頃「マーフィーの法則」というものが流行っていた。

要するに、探し物は欲しいときに見つからず、どうでもいいときに見つかるといふようなものだ。

今のわたしの状況はまさしくそれで、精神的に力んでいるのかどうにも気に入ったものが見つからなかった。

——そろそろ他のところ行こうかな。

するとレジの方から店員さんのいらっしやいませ、という声が聞こえてきた。

わたしがそれに注意をひかれたのは、その後で店員さんがちょっと違う声を上げたからだった。

わたしは顔を上げて入り口の方を見る。

——あれ？ 男の子？

その人影は店員さんや他のお客さんたちより背が高かったからすぐ目についた。

そしてその人は桑学の男子の制服を着ていた。

ここは女性の服専門の店のはずなのに……カップルの片方なのか？

と、その桑学男子生徒がこちらを向いた。

「！」

わたしは息を呑んだ。どくん、と心臓が鳴った。

目が合った。合ってしまった。

どうして、ここにいるの！？

——彼だった。

「やあ、関根くんじゃないか。奇遇だね」

彼はわずかに目を見開いたが、ごく自然にわたしに話し掛けてきた。

でもわたしは、早くこの場から逃げたい、そう思っていた。

知り合いだけど友達ではない人と偶然会ったときの間の取り方を

わたしは知らない。

とは言え、話し掛けられてしまった今、まさか目をそらしてこの場から去る訳にもいかない。

そんな冷たい真似をするのは4月のあの時だけでもう充分だ。

そう言えばあの時のフォローはうやむやにしたままだった。

彼は、もう気にしてはいないだろうが覚えてはいるだろう。

ああっ、マーフィーの法則。

出たいと思った途端に出られなくなる。

早いうちに見切りをつけていれば彼と会うこともなかったのに。

なんてタイミングの悪い……。

「こ、こんにちは…嘴本くん」

なんて、他人行儀な挨拶をしてしまう。

美術部ではムニャムニャとおざなりな挨拶で済むから楽だが、学校外ではどう接して良いのかわからない。

「うん、こんにちは。面白い物？」

「うん、まあ……。嘴本くんは？ どうしてここに？」

「ボクかい？ ボクはね、この店のオーナーさんから新作のデザインを依頼されていたんだ」

「え？ 新作って、服の？」

「そうだよ。このオーナーさんと学園の理事長とは旧知の間柄でね、ボクは理事長を介して仕事を頼まれたんだ」

「仕事……？」

「うん、あれを見てごらん」

そう言って彼は黒と青の系統の色の衣装で着飾ったマネキンの一体を視線で指す。わたしもそちらを見る。

「例えばあれはボクの作品なんだよ」

「えっ」

声を出さずにはいられなかった。

彼の方を向き、またマネキンの方を向き、再度彼の方を向いて、またマネキンを見る。

「……凄い」

彼の芸術作品の凄さは既知のことだ。しかしそれは美術界という限られた特殊な世界でのことだと思っていた。

けれど、今ここにお客さんに出すものとして彼の作品がある。

彼はわたしと同じ高校生なのにもう社会の一部として仕事をしているんだ。

わたしなんかまだ将来のビジョンすら見えていないのに。

「今日、この時間にここでオーナーさんと待ち合わせだったんだけど……ねえ、そうだよね？」

と、彼は店員さんの一人に目をやる。

「はい。申し訳ありません。もう少々お待ちください」

彼は今日が待ち合わせの日だと言った。

はあ。どうしてわたしはよりによってその今日という日を散策の日に選んでしまったのだろう。

なんてタイミングの悪い………悪い？

「あっ、嘴本さん。来ました。今オーナーがいらっしやいました」

「あら薫クン。もう来てたのね。ようこそ。ごめんなさい。遅れちゃって」

「!？」

口調は女性だが、声質はそこそこの年齢を重ねた男性。その違和感にわたしは注意を引かれた。

あっ……。

極彩色で独特なデザインの衣装、明るい色に染めた髪。一目見れば絶対忘れない姿の人物がそこにいた。

この人、わたし知っている……！

わたしは開けかけた口をそつと手で覆う。

TVの情報番組やバラエティー番組、それにファッション雑誌でときどき見かける顔だ。芸能人のファッションを厳しい言葉で評価

する、“アパレル界のご意見番”。

「有田さん。ボクの作品、持ってきましたよ。きっと女の子達が気に入るはずですよ」

そう、有田啓一という名前だった。TVではだいたい有田先生と呼ばれている。

嘴本くんは有田先生と言葉を交わしながら鞆の中からスケッチブックを取り出し手渡した。

この人が……アリタのオーナー？　そう言えばこの人は会社の社長でもあったんだっけ。っていうかまんま「アリタ」だ。

頭の中がクラクラとしてきた。

今日は非日常的な出来事がよく起こる。

わたしが呆けている間にも有田先生は嬉しそうな笑みを浮かべ、ページをめくりながら何度も頷いていた。

「ところでそちらのお嬢さんは？　お連れさん？」

不意に有田先生がこちらを向いたのでわたしは体を硬直させた。

「えっ？　いえ、違います！　わたしは偶然出会っただけで」

反射的にパタパタと手を振り、その直後にしまった、と思った。

有田先生は嘴本くんに聞いたのにわたしが答えるなんておかしい。

わたしは何をやっているんだろう。

直視はできないが嘴本くんも驚いたようにこちらを見ているようだ。

わたしは自分が恥ずかしくなっとうつむいた。

「フーン」

有田先生はそう意味ありげに鼻から息を吐いた。

「ちょっと、アナタ？」

「は、はい？」

わたしは顔を上げるしかない。

「アナタ、ちょっとそうやって、ウン、顔を上げたまま、目を閉じて、ン、もらえるかしら？」

「え、ええっ？」

「目を閉じてって、言ったでしょう!」

「は、はいっ」

わたしは言われるままに目を閉じた。

わたしはミーハーではないつもりだが、こういう偉そうな態度はTV画面での有田先生そのものであり、わたしはそれが気に入っていたので戸惑いはしたものの反発心は感じなかった。

「……ふーん、そう。へえ……ほう、それは、はあ」

目を閉じていても視線を感じる。

胸はどきどきと鳴りっぱなしで、聞かれてしまうのではないかと思ったぐらいだ。

「あの……」

「……うん、もういいワ」

目を閉じていた時間はそれほどでもないのに、目を開けると一瞬さっきまでと違う場所にいたような錯覚を覚えた。

有田先生が、アリガト、と声を掛ける。そしてわたしがちらりと嘴本くんを見ると彼もまた腰に手を当て、いつもの微笑を浮かべてこちらを見ていた。

なんだか自分を値踏みされたような気になって、わたしの胸の鼓動のリズムはまた変わった。

「……ねえアナタ、アナタ実はあんまり流行のおしゃれに興味ないんじゃないかって?」

「えっ!？」

ドキリ、とした。今は普通の制服姿なのに、そんなことが分かるのだろうか?

「ちょっと今は時間が押しているから詳しい話は出来ないのが残念だわ。でも、おしゃれについて少し考えてみてはどうかしら。一度アタシのホームページを見て頂戴」

そう言う和有田先生は衣装のどこかから名刺を取り出して、わたしに手渡した。

世界的ファッションデザイナー、と普通肩書きには使わない肩書

きと、有田啓一という名前。そして”http://”で始まるアルファベットとピリオドの綴り。

「そこにアドレスが書いてあるでしょう？　ぜひいらしてね」
はい、と答えたもののわたしはパソコンも携帯電話も持っていない。

「それじゃ、薫クン。細かい打ち合わせは事務室の方で、ネ」
「ええ。……それじゃあね。関根くん。またね」

「じゃあね、アデュー！　桑学の可愛い雛鳥さん」

二人は店の奥へと引っ込んでいった。アデュー、って。

わたしはパチパチと瞬きをして「こちらの世界」に戻り、そそくさと店を後にした。

今のような精神状態では何も買わずに店を出てくるときの罪悪感など心に入り込む隙もなかった。

雛鳥って、どういう意味だろう。

アリタを出て外の空気に触れているとだんだん有田先生の最後の言葉が気になってきた。

ただ単に年齢の若い子を喻えただけのようにも聞こえた。

クセツ毛で短髪のわたしの顔を指して言ったようにも聞こえた。

ふと横を見ると店舗のガラスに映ったわたしの顔。

雛鳥。

——やっぱり後者かな。

第八話・みねこ先輩

美術室に小さな人ばかりが出来ていた。

週が変わって月曜日の放課後。わたしのクラブ活動再開の日だ。

2年の永山美柊子先輩が、1年の部員のみんなに囲まれていた。その中の一人、敷島さんがわたしに気づいて手を上げる。

「おはよー、関根さん。ね、ちょっと来てみて」

「？」

部員の人たちと軽く挨拶を交わしながら近づいていくと、永山さんが少女漫画雑誌を持っていることに気づいた。

覗きこんでみると、わたしも毎月買っている雑誌だった。

「みねこ先輩ねえ、凄いんだよ」と、稲城さん。

「何？」

わたしはにこにここと笑う永山さんから雑誌を受け取り、開かれていた頁を見つめた。

それは読者のお便りコーナーだった。「にぎやかサロン」という銘がうたれている。

ひょっとして永山さんの投稿が載ったのかな。

「今月から『にぎやかサロン』の絵が変わってるでしょ」

「うん」

読者からの投稿に対して、返答をつける雑誌側のキャラクターたちのことを稲城さんは言っている。

「それ、みねこ先輩が描いたんだよ」

「えっ」

慌ててタイトルイラストの隅っこにある名前を見た。

イラスト／わらびー

と書いてある。

「この『わらびー』って、」

「それがわたしのペンネーム」

「へええ」

「みねこ先輩のプロデビューなんですよねー。凄いなあ」

「うん。まだ本当にちょっととしたイラストしか描かせてもらえないんだけどね」

「これからは……？」

「やっぱり漫画を連載したいね。編集部の人とも『いつかは』っていう話はあっても具体的には全然だから」

「永山さんはこれから本格的に漫画家としてやっていくつもりなんですか」

「まあね。親はまだ反対しているけど」

「……んー。凄いなあ」

わたしはため息をつく。

「美術部の人たちってみんな将来のこと、きっちり計画立ててますね」

「そう？」

「永山さんは漫画家だし、牧瀬部長は……それから星見さんは……」
わたしはつい最近、牧瀬さんや星見さんがわたし達に進路を語ったことを持ち出した。

牧瀬さんは美大に進んで建築物デザインの仕事をするために勉強するつもりのようなのだ。

星見さんは、美術はあくまで趣味、と公言しており将来は美術とは無関係の税理士か会計士になるつもりらしい。

「それに嘴本くんは服飾デザインの仕事……」

「え、そうなの？」

敷島さん達が不思議そうな顔でわたしを見ていたので、わたしは余計な事を言ったか、と口をつぐんだ。

「ねえ、薫サマがそういうこと言ったの？」

「う、うん。ちょっと、ね」

「……」

幸いにもそこで牧瀬さんがやってきて全員に集合をかけた。
高校美術展と夏休み中の合宿についての連絡だった。

「ねえ、カズミン」

目を開けた途端に声を掛けられてハッとしてわたしは振り向いた。

永山先輩だった。

「寝てたの？」

「違いますよ」

イメージを固める為にわたしはイーゼルの前で目を閉じていただけだった。

寝ていたという誤解だけは解いておきたい。

永山さんはわたしの肩に手を置くとわたしの耳元で小声で囁いた。

「カズミン、今日は早めに切り上げてちょっと今からわたしに付き合わない？」

「？」

永山さんは人の呼び方が定まらない人で、普通に名前で呼ぶこともあれば唐突に自作のあだ名（しかも複数）で呼ぶこともある。

カズミンなんて呼び方は永山さんだけのものだ。確率は低いがつわたしを「ネズミ」と呼ぶかも知れないのが気がかりといえど気がかりである。

一方永山さんの方は美術部のみんなから「みねこ」とか「みねこ先輩」と呼ばれているのだが、その名前にいろいろ複雑な思いがあるわたしだけは先輩を苗字で呼んでいる。

「いいかな？」

「………はい」

こちらの返答に永山さんはにっこりと頷いた。

わたしは道具を片付けることにした。今日はあまり作業は捗らなかったのでもいい息抜きになるかもしれない。

「じゃあ、今日はお先に」

土曜日と今日と、ルール違反はしていないはずなのになんとなく2日ともサボったような気分になった。

それにしても永山さんはわたしに何の用だろう。

永山さんは誰にでも親しげに話すのでわたしに声を掛けること自体は珍しくない。

でもこういう誘いは初めてだった。

「ところでさ、関根っち。今日、カオルちゃん（嘴本くんのことだろう）が服飾デザイナーになるつもりだなんてどこで聞いたの？ 彼から聞いたの？」

永山さんとわたしは並んで歩きだした。

「えっと…」

「あ、ちよつと待って。メール入ってる」

桑苑学園は校内では携帯電話の電源を切っておく決まりになっている。

尤も、休み時間に先生に隠れてメールしている生徒も結構多い。

わたしには関係ない話だが、なんでそこまでして……と思うことはある。

放課後になると堰を切ったようにメール交換をする姿は下校中に慣れたものになった。

「げ、全部、拓哉^{たくや}じゃん」

携帯電話の画面を見た永山さんが眉をひそめ低い声を出す。

一瞬だけ、永山さんが違う人に見えた。

両頬に散在するニキビ。ポニーテールにしているクセツ毛（わたしの程ひどくはない）。

永山先輩は美人というより親しみやすい顔立ちの人だった。

だから、いつもは見せない負の感情を表す表情は少しだけ怖かった。

「あ、これわたしのカレシ。他校なんだ。ちよつと待っててね。返信するから」

戸惑うわたしの視線に気づいた永山さんがちらりとこちらを見て言った。普段の優しい表情だった。

カレシ？

わたしの胸の奥に小さく、何だかわからない熱いものが走った。どうして、恋人からのメールなのにあんな嫌そうな顔をしたんだろう。

わからない。

尋くことはできなかった。

わたしが知っている恋愛のカタチとははずれた永山さんの行動がわたしを不安にさせた。

……なんて、恋する気持ちをどこかに置いてきたわたしが、どれだけの恋愛を知っているというのか。

「ごめん、お待たせ。で、何だっけ？ 薫ちゃんの進路の話だね」
こちらを向いた永山さんの表情がわたしの不安を追いやった。

「憶えてましたか？」

「どうしたの？ 言いたくないの？ ああ、あなた達、隠れて付き合ってるのかいうなら……」

「まさかっ！ 違いますっ！」

——だから、どうして？ 繰り返したくないのに。

嫌な流れになるのを避けるためわたしはぶんぶんと頭を振った。

冗談よお、と永山さんは驚きながら呆れたように言った。

……別に隠さなければいけないようなことでもないか。

わたしは先週の土曜日のことを永山さんに語った。

「……で、これが有田啓一の名刺です」

わたしは入れっぱなしにしていた名刺を永山さんに差し出した。

「あ、ホントだ。へー。あ、この人のホームページなんてあるんだ。見てみた？」

「ああ、わたしパソコン持っていないので」

「そうなんだ。あ、それじゃ、ウチに来なよ。パソコンあるから。ちょっと予定を変更してウチで話をしよ。うん。歩いて15分くらいだから」

友達（正確には友達じゃなく親しい先輩だけど）の家に招待されるなんて久しぶりだった。

あの頃のわくわくした気持ちを思い出し、かすかに胸を躍らせながらわたしはこの気さくな先輩と共に道を歩いていった。

「ねえ、和美」

永山さんはわたしの名前を普通に呼んだ。

「漫研に入ってみる気ない？」

「漫研？」

「そう。漫画研究同好会。わたし、そこに掛け持ちで入っているんだ」

そう言えばクラブ紹介のときにプログラムの隅っこにそんな名前の同好会があったはず。

規模が小さくて部になっていないのだろう。

「この3ヶ月、1年のコたちを見てきたけれど、わたしは和美にはイラストを描く才能があると思うの」

「そう——ですか？」

「うん。どうかな。もちろん美術部の活動を主体にして掛け持ちでいいのよ」

真剣な顔でわたしの顔を覗き込まれる。

「でも、わたし、絵は描いてもお話は…」

「そこは難しく考えないで。イメージイラストみたいなものでもいいの。和美の絵にはそれだけで何か訴えているものがあるからね」

「……」

「ね。考えてみてよ。あ、そうだ。ズミちゃんは夏休み何か予定はある？」

「え、いいえ……」

「だったらさ、合宿終わったらいいとこ連れて行ってあげる。わた

したちのサークルが、」

「サークル？」

「あー、うん。漫画研究同好会ってのは学校での呼び名で、実は同人サークルでもあるんだ」

そう言って永山さんは同人誌の世界をわたしに簡単に説明した。

永山さんはもう一人の漫研同好会の人と『アカシア風景』という名前の同人サークルを作っていて、時々即売会で小冊子や、CGを印刷した小物などを販売しているそうだ。

今日、一緒にしてもらいたいと言ったのはこの誘いのためだったのだ。

「いつでも歓迎するよ。考えておいて欲しいな」

「……でも、どうしてですか？」

「何が？」

「美術部でも漫研でも絵を描くということは同じなのにどうしてわざわざ掛け持ちするんですか」

「うん。いい質問。それはね。自己表現のときにどれだけ他者を意識するか、ってことよ」

「えっと……」

「岡本太郎は知っているわよね」

「はい、もちろん」

日本を代表する前衛芸術家。

上野の美術館に作品展を見に行ったこともある。

「あの人は『芸術とはうまくあってはならない、きれいであってはならない、ここちよくあってはならない』と言い切ったわよね。わたしなりの解釈んだけどそれは自己表現を既成の概念でくくって小さくまとめてしまっただけは芸術とは呼べない、ということだと思うのね。ほら、お兄ちゃん（星見先輩のこと）はゴーイングマイウェイで骨アートばかりやってるでしょ？」

星見先輩の作品は絵や彫刻だが、そのモチーフは常に人間か動物の骨格なのだ。

不気味さを交えた美しさは所謂「万人にウケる」というものではない。

「でもわたしは、見ている人ができるだけたくさん喜ぶようなものも作りたいと思うの。『芸術』じゃないものをね。それが漫画やイラストの方なのよ」

「だから漫画家を選んだんですか」
「うん」

この間の有田先生の格好はまさしく自己表現そのものと言っていだろう。

わたしの感性では、有田先生の服装は恥ずかしいものであり、わたしは真似したいとは思わない。数々の流行を生みだした人物でありながら、自分はそれとは距離を置いた場所にいるのだ。

けれど、美に関して自分の信じた道を突き進んでいるということはハッキリと感じとることが出来る。その点は本気で尊敬できるし、羨ましいと思う。

ただ他者と違うことをやればそれが自分の個性だと思うのは愚かしい勘違いだ。

流行するのはやはり多くの人の感性に訴えるものがあつたからだ。それを考えて作り出すこともやはり偉業だろう。

永山さんが立ち止まった。ここが自宅らしい。

「じゃ、あがつて」

「おじゃまします」

玄関に入ると、わたしの家とは違う匂いがした。木か芳香剤か：とにかく他の人の家の匂いだ。なんとなく懐かしい。

靴を脱いでそろえるとわたしは永山さんの後についていった。

家にいた永山さんのお母さんに挨拶して、わたし達は二階の永山さんの部屋に向かった。

そのときふと思い出した。

鷺見美音子——ネコちゃんのことだ。

6年の3学期のとある日曜日、ネコちゃんがわたしの家に遊びに来たことがあった。

それとは立場が逆だけれど、とにかく友達の家で遊ぶ、というシチュエーションで思い出した。

あの時は結構びっくりした。

あの頃にはもう、わたしは自信を喪失して暗い女の子になっていたはずだ。しかもネコちゃんへの逆恨みもあって距離を置いていたはずだった。

でもネコちゃんにとっては距離を置いていたつもりはなかったのかもしれない。

いつものように気さくに、ちよつと馴れ馴れしいくらいの態度でわたしに接していた。

そういう性格は永山さんに似ている。

美柰子と美音子、名前の発音が同じだから性格も似ているなんてこじつけも甚だしいけれど、一度意識しだすと何だかそんな気になってきた。

部屋に入れてもらう。永山さんの部屋は整頓されていてもなお、物がいっぱいあって窮屈そうだった。

「ごめんね、狭くて」

言いながら部屋の真ん中のテーブルの上にあるノートパソコンの電源スイッチを押す。

わたしがなんとなく画面を見つめていると、永山さんが、起動には時間がかかるよ、と言って部屋を出た。私も画面から目を離して部屋の中を見回した。

特徴的なのは、物凄い量の漫画単行本や大きな写真集にCGの参考書、そして積み上げられた紙の山だった。漫画を描くための資料のようだ。

永山さんは麦茶をお盆に載せて戻ってくると、ちよこちよことパソコンを操作して画面をわたしに見せた。

「わたしもホームページ立ち上げているんだよ。ほら」

「これがそうなんですか？」

画面に現れた長方形——ウィンドウには『アカシアの雨』という文字とかわいいイラストが描かれて彩られていた。

「ここにCG置いたり、活動報告載せてるの。ま、今はいいや。じゃ、有田啓一のページ、行ってみようか。……やってみる？」

ノートパソコンをずらし、わたしを隣に座らせると、先輩はわたしにマウスを握らせた。

「そこにカーソルをあわせて……ここにアドレスを打ち込んでいけばいいの」

それからわたしは初めてのインターネットにはまり、2時間近くも先輩の部屋に長居することになってしまった。

駅までの帰り道を永山さんのお父さんに車で送ってもらうことになった。

第九話・その瞬間

——色鉛筆とスケッチブックを使うことはなかったけれど。

グラウンドからは運動部の部活の声と音が聞こえてくる。

まだ朝だというのに日差しが強く、気温は高かった。やはり日焼け止めを荷物に入れてきてよかった。この間永山先輩の家で見た有田先生のホームページの内容が早速役にたったようだ。

「おしゃれコラム」というコーナーには最近の流行のファッションや、夏に向けての注意、キレイになるための秘訣などが書かれていた。

いろいろと参考にはなったが、中には、わたしにはとても実行できそうにないものもあった。

それがキレイな女の子とそうでない女の子との差なのだろう。

校門を抜けると、すぐに美術部の人たちが輪になって集まっている場所が見つかった。

わたしはおはようございます、と言ってその輪へ近づいていった。稲城さんが、挨拶がてらに、その帽子可愛いね、と褒めてくれた。日差しよけの実用本位の帽子だったのだがちょっと嬉しかった。

わたしは輪の側に自分の荷物を置くと、夏休みの校舎へと入っていった。

今日からわたしは、美術部の合宿で、海の側にある宿泊施設で三泊四日の寝泊りをする。桑苑では、慣習的に行われていることなの

だそうだ。

一旦学校に集合し、必要がある人は美術室から画材用具を持ってくる。そして全員の準備が整ったところで合宿場所へ向かうという段取りだった。

桑苑学園の正面玄関を抜けた先の玄関ホールの壁には嘴本くんの絵が飾られている。

四月に彼が描いた学園内の記念館の絵だ。

ホールには桑学がこれまで様々な部活動で勝ち取った優勝カップや賞状などが展示されているが、それと同格の扱いだ。

この展示に際しては一悶着があった。

少し前に美術室に突然美術エージェント——エージェントってどういう意味だろう——の会社の人を訪ねてきて嘴本くんの絵を買い取りたいと言ってきた。

その時は美術部の顧問の先生や学園長、理事長まで巻き込んでちよつとした騒ぎになったのだ。彼が何らかの作品を創作すると、そこには大金の話がまわりついてくるからだ。

いわゆる「名画」というものに値段が付くことは知っている。

わたしはたまにデパートで有名な画家やイラストレーターの展示即売会を見に行くことがあるが、そこで表示されている値段の高さを見て「すごいな」と思うことは確かにある。

でも、わたしはその美術エージェントの人に対して「美術品をお金の代用品としか考えないやらしい人間」という印象しか持てなかった。

わたしの両親はわたしと一緒に展示即売会に行ったとき、会場の人にしつこく絵の購入を勧められ嫌な思いをし「二度と行かん」と激怒していた。

わたし自身はお金を持たない中学生だったので、押し売りされることもなかったのだが、その時の両親の気持ちがあったような気が

がした。

美をお金に換算することなんかできない、なんて思ってしまっただが、この世界にはプロの芸術家がいるのだからわたしの考えなど子供の理論でしかないのかもしれない。

嘴本くんが初め美術部に入ろうとしなかったのは実はこういう騒ぎを起こしたくなかったからという意図もあったのかもしれない。わからないけど。

その日は美術部の人たちも落ち着かず、部活動の時間は嘴本くんを囲んで大変だね、という雑談タイムになった。

彼が語るところによると、自分の作品はいつも完成された側から誰かが持っていてしまうのだという。

その件に関しては彼に同情したくなった。わたしだったら自分の折角の会心作を手放すなんてことはできない。

でも彼の言葉を借りればこうだ。

「ボクの作品をより多くの人の目に触れさせて幸せにできるのならそれがボクの幸せでもある」

まさに天才少年芸術家らしい言葉だ。

結局理事長がなんらかの手を講じて事態を収拾したらしい。

そして次の日から嘴本くんの絵は玄関ホールに飾られるようになった。

さすがに毎日見続けると、あの初見の時ほどの衝撃は無くなった。それでも、今でもわたしは調子が悪いときに、ときどき美術室を抜け出しこの絵の前まで来て感性を刺激させてもらう。

この絵を持っていかなくてよかった。

美術界にとっては勿体無いことなのかもしれないけれど、そんなことはわたしの知ったことではない。

美術室から道具を持って戻ってくると、玄関のところで敷島さんと顔をあわせることになった。

一瞬、言葉が出ないわたし。

敷島さんがオハヨ、と短く挨拶をしてきたのでわたしもオウム返しにオハヨ、と挨拶した。どうもこの間から、敷島さんに対しては溝を感じてしまう。わたしが過剰に意識しているだけだと信じたいけれど。

夏休み直前のある日、いつものように部活の準備をしていると敷島さんが声を掛けてきた。

なに、と軽い気持ちで彼女の方を見ると何だか敷島さんの目が怒っているようなのでわたしはつい一步後ずさりしてしまった。

「関根さん。薫サマからきいたわ。彼、別に服飾デザイナーになるつもりはないそうよ。ただ理事長からの申し出を受けただけだって」

「そう…なの？」

どうしてとんがった口調なんだろう、と思った。

「あんまり当て推量で物をいうのはよしたほうがいいわよ。じゃな、何…？」

怒られる理由が分からなかった。

わたしが呆然としてしていると制服の袖をくい、と引っ張られた。今度は小林さんだった。

「なに…？」

「関根さん、ちょっと」

そう言われてわたしは小林さんに袖を引っ張られたまま廊下へと連れられてきた。

「関根さん。羽織（敷島さん）のこと、気を悪くしないでね」

「え……。ん、と、敷島さん、何か怒っていたみたいだけど」

「嘴本くんのことでは何か言われたんでしょ」

あれ：『嘴本くん』？『薫サマ』じゃないんだ。

小林さんのいつもと違う彼の呼び方が気になった。

「そうだけど……」

「羽織ね、この間嘴本くんと遊びに行ったとき、彼の機嫌を損ねちゃって気が立ってるんだ」

遊びに……って？

違和感が私の胸を通り過ぎた。

今の小林さんの口調からして二人で？ 俗にいうデートってやつ

だろうか。

……。

うまく想像ができなかった。

嘴本くんが大勢の女の子に囲まれてにこやかにしている姿はよく見かけている。あれはアイドルタレントとそのファンクラブといった形容がふさわしい。

その姿を見慣れていたためだろうか。彼が一人の女の子のために時間を割くという話には違和感を覚えた。らしくない、と思った。胸の収まりが悪かった。

「でも、わたしは確かに嘴本くんがデザイナーになるとか適当に言っちゃったけど、そこまで怒られるとは思わなかったよ？」

「そこが嘴本ファンには許せないのよ。自分が知らない嘴本情報を他の人が知っていると言うだけで気分が悪いモノなのよ」

小林さんはあくまでクールに話していた。

敷島さんや稲城さんと一緒の時は『薫サマ』と呼んでいるのは付き合いからだろうか。

「……」

「ほら、それに将来の夢の話をすると言えば、結構親しい間柄ってことでしょ？」

それもそうか、と合点した。

わたしのお父さんがお母さんを好きになったのは、自分の夢を語ったとき笑わずに聞いてくれたから、とかよく話していた。

……でも結局お父さんの夢は破れて、おじいちゃんの後を継いで床屋になったんだけど。

「まあ、嘴本くんや風間くんみたいな王子様と接触するときは気を付けようってことね。ちよつとしたことですぐ噂になっちゃうから」
風間^{かざま}くん、というのは、わたし達と同学年にいるモデルの仕事をしている男子のことだ。

女の子達だけのおしゃべりのときはよく名前が持ち上がる男子だ。ただ、嘴本くんと違うのは、彼は女子も男子もあまり周りに寄せ付けない孤高の人だということだ。

「わたし、敷島さんに嘴本くんとは何でもないよ、って安心させたほうがいいかな」

「今は、止したほうがいいと思う。余計に怒らせちゃうだけだから」
「……ん」

「大丈夫。少したったら羽織も元に戻るから」

そして小林さんの言うとおり、次の日には普通に話ができるようになった。

でもそれは小林さんや稲城さんが一緒にいる時の場合で、二人だけではなんとなく言葉を交わせない雰囲気 flowed。

『王子様と接触するときは気をつけようってことね。ちよつとしたことですぐ噂になっちゃうから』

小林さんはそう言った。

噂をされ易い人、か。

わたしの中学時代の場合は逆で、ブスなわたしを揶揄するために生まれた噂だったけど。

……………。

………？

……本当にそうだった？

逆に葛名君が人気者で注目される存在だったからこそ噂を立てられたのだとしたら。

葛名君は、王子様ではないけれど、明るい性格で話しやすかったし、客観的に見てモテるタイプの男の子だったと思う。……多分。例えば、葛名君を見つめ続けていた女の子が、彼の近くにいたわたしを不快に思っただけで噂を立てたとしたら。

……無意味な想像だ。

どちらにしてもわたしが蔑まれるオチには変わらないんだから。

下駄箱の前で随分物思いにふけてしまったようだ。

わたしは靴を履くと、外の美術部員の輪に加わりに行った。

もうすぐ出発だ。

合宿場所が海だからという訳ではないけれど、わたしが今ここで描いているのは水と魚をモチーフにしたアクリル画だ。むしろこれは5月に行った水族館の影響が強い。

わたしはこの作品を高校美術展へ出展する予定だ。

合宿の初日は荷物の整理や食事の支度、あとは無駄にだらだらして過ごしてしまった。

美術部らしい活動は2日目からになった。

この宿泊施設には美術部以外の人は泊まっていないし、また外に出ても人通りは少ない。

だから屋外にイーゼルを立てて風景画を描く、なんていう画家みたいな――わたしは美術部員だけど――ことも気兼ねなくできる。それは子供の頃からの憧れであったが、肌の弱いわたしには長時間夏の日差しの下にいることは厳しい。なので、わたしは涙を呑んで(?)作業場所を大きな窓から外がよく見える風通しのいいロビーとしている。

今日の午後は静かだった。

朝からずっと晴れていて暑かったので水着を持ってきた部員の人たちは泳ぎに行っている。初日に見に行ったとき、泳いでいる人はほとんど見なかった。ここの海水浴場は穴場なのかもしれない。

今ロビーにいるのはわたしの他には星見先輩だけだ。

星見さんは例によって骨をモチーフにした作品に取り組んでいる。今回は木片を彫刻刀で削り、古代生物の化石の模造品を作っているのだ。

先輩もわたしも黙々と作業を続けていた。いい状態だ。

美術部での活動も、全員が集中して美術室が無音になった瞬間がたまらなく好きだ。

しばらくして玄関の方からがやがやとざわめきが聞こえてきた。

海水浴組が戻ってきたみたいだ。

わたしは絵筆を持つ手を休め、彼女達がロビーに来る前に自分の泊まっている部屋に戻り、外出準備をした。帽子をかぶることだけは忘れずに。ついでに色鉛筆とスケッチブックも持っていくことにした。

他の人と顔を合わせることはなく外に出た。独りのお散歩だ。

潮の匂いに導かれる様にわたしは海岸までの道を下った。

空では雲が風に流されており、暑さは和らいでいた。

次第に波の音が大きくなってくる。

少し離れたところで3歳くらいの子供とその母親らしき女性が寄

せる波と遊んでいた。

本当に人が少ない。実は遊泳禁止の場所なのではないだろうか。

海とこちら側の境界線に沿って砂浜を歩いてみた。

風が出てきて波が強くなったために海水浴組のみんなは引き上げたのだろう。

でもそのかわり、泳ぐための海は見るための海に変わった。

白い波の先端が押し寄せ、そして崩れて去っていく。

単調な繰り返しが気持ち良かった。

桑学高等部に入学して4ヶ月、わたしは孤立を恐れて、できるだけ友達や仲間達と行動を共にするようにしてきたが、この合宿の間は静けさを好む、本来のわたしのままでいいと思った。

孤立を恐れないはずはない。その自分もまた本当の自分だ。

中学時代はしばしば就寝前に急に寂しさを感じて、泣き出すこともあった。

けれど同時に、独りでいるが故の心地良さと言うのも覚えた。

独りじゃないという安心感が、独りを楽しむことを許してくれる。

砂浜に腰を下ろし、何分ぐらいぼんやりとしていただろうか。

彼の姿が視界に入っても、不思議と、独りを邪魔されたとは思わなかった。

目を細めて海の向こうを眺めながら歩く彼は、風景と溶け合っていた。

「やあ、関根くん」

「ああ、嘴本くん。みんなと一緒にじゃなかったの？」

彼は海水浴組だったはずだ。

「にぎやかで燃えるような海も好きだけどね、キミの色を見ていたら無音の海も見てみたくなった」

「わたしの色？」

「ロビーにあった、海の中で人と魚が戯れている絵はキミのだよね？」

「あ、ああ。うん、そう」

「海の色をもらいに行つたのかと思つたよ」

「ああ：そうかも」

とは言え、残念ながら今太陽は雲に遮られ海の色は濁っていた。

「キミの絵を見ていて思い浮かべた画家がいるんだ」

「？」

嘴本くんは、現在活躍中の、とある世界的に有名な画家の名前を挙げた。

「それは……そう、かな。うん、彼の影響はあるかもしれない」

彼の指摘でわたしの胸に相反する感情が同時に湧き上がった。

その画家はわたしも尊敬する人だったので、それを光榮に思う気持ちがまずあつて。

一方でオリジナリティを目指していたわたしのささやかなプライドは悔しさを感じた。

「彼の作品はボクも好きだよ。光と水と命のハーモニー。それぞれが素晴らしい輝きを放っているね」

「そうだね」

その意見には全く同意だ。

自然の中でのびのびと生息する海洋生物や野生動物がその画家のモチーフだ。

鳥肌の立つような精密さと質感は、見ているだけでわたしをその絵の世界に取り込みそうになる。

絵の中の太陽は「眩しい」し、海からは波の音が聞こえてきそうな錯覚を覚える。

彼は子供時代をハワイで過ごし、その自然に魅せられたという。そしてその自然の素晴らしさを世界に訴える為に絵を描いているのだそうだ。

「あの人の絵を思い出したら…。あの写真のようにリアルなハワイの海岸の絵を思い出したら、この海もくすんだ色の平凡な景色に見えてしまう。さっきまでは結構見とれていたはずなのに。優れた才能の持ち主が最高の環境のもとにいたら正に鬼に金棒よね」

嘴本くんはわたしの言葉に対し、ふふんと声を出さずに笑った。

「何？」

こころもち眉を顰めて彼の方を見る。嘴本くんは全く動じることなくにつこりと笑った。

「うん、確かに彼は恵まれた環境にいただろうね。だけど才能のある人間というのはね、どこにいてもその力を発揮するものだよ」

「……」

「例えばここにはボクがいる」

親指で自分を指し示す嘴本くん。最初に自分の名前を挙げるところが彼らしい。

「それにね、写真のようにリアルな絵を描く画家なんていないよ。

彼はありのままを描いているわけではないのだから」

「えっ？ そんなことはないでしょ」

わたしはその絵のリアルな質感に感動したというのに。

海中で戯れるイルカに太陽光がゆらゆらと当たっている絵をわたしは思い出した。

「イマジネーションだけではあの質感は出ないわ。それに、自然保護を訴えている人が嘘の自然を描くなんて本末転倒でしょ？」

「ああ、違う違う。そういうことを言いたいんじゃないんだよ。勿論彼の描くものは写実的で精密さ」

「さっきと言っていることが違うじゃない」

「ボクは『ありのまま』ではないと言ったんだ。ありのままでもいいなら、観光客が撮った写真でもいいのさ。そうなら芸術家はお役御免だよな？」

「それは……」

「彼は『ありのまま』を描いているのではなく『感じたまま』を描

いているんだ」

「……抽象的で、言葉の意味が分からない」

「キミ達だって、美術室のモチーフを描くときには視点や角度を選ぶだろう？ それは何かを感じたからだよね。この場合の角度というのは空間的な意味ばかりじゃなくて時間という要素や見る側の精神状態という要素も加わっているよ」

「……」

「彼は実際に自然と触れ合い、無限の瞬間における、あらゆる角度からの自然を目の当たりにしている。彼の描く世界は、それらが最も美しく見えるように組み合わされているのさ。現実で構成された虚構だから、現実以上にリアリティを伴っている。リアルだから人に感銘を与えられるわけではないよ。感銘を与えるための手段としてリアリティがあるんだ」

「わかるような、わからないような」

すると嘴本くんは、わたしの頭上の空間をしばし見つめたかと思うと、うん、と小さく頷いた。

「いいかい？」

「きゃああ！ 何、何？ 何するの？」

不意に彼は手を伸ばし、片方の手でわたしの目を覆い、もう片方の手でわたしの頭を押さえた。

ひやりと冷たく、わたしは悲鳴を上げてしまった。

「大丈夫。痛いことなんてしないから」

「手を、手を離して」

「ほら、落ち着いて。ボクの腕から手を離して」

「……」

わたしは仕方なく彼の手を引き離すのをあきらめた。

彼には何らかの意図があるのだろう。

「何なの？」

「魔法を見せてあげるよ」

「……？」

「いいかい？」

気持ちを感じ着けて…。

波の音を聞いて…。

潮の匂いを馨^きいて…。

潮風を肌で感じて…。

視覚以外の情報だけで海をイメージしてごらん」

「……」

嘴本くんはそう言いながらわたしの頭を動かして一方向に固定した。お母さんに髪を切られているときみたいだ。

「できたかな」

「できた……と思う」

「さて、どんな景色がみえるかな。3、2、1、はい」

……。

……！！

開けた視界に光が飛び込んできた。

海が、輝いていた。

雲が、輝いていた。

「え、どうして……！？ 嘴本くん、いったい何をしたの……！」

ついさっきまで見ていた千葉の海が一面向けたように鮮やかな色彩を露わにしていた。

「この世のすべてのものは美しさを秘めている。そして最も美しくなる瞬間が存在する。その瞬間を捕らえて感じ、皆に伝えるのがボク達芸術家の役目なんだ」

それが魔法。やはり彼は特別な世界の人間なのだろうか。

彼の声を左に聞きながらわたしは海を見つづけた。

「ただね……」

嘴本くんが意図的に口籠もったので、わたしは彼の方を見た。

人差し指を額に当て、苦笑いしている。彼にしては珍しい表情だ。「ボクは醜いものを見ると顔をそむけてしまうクセがある。それがボクの未熟な部分さ」

うーん、と唸って彼は立ち上がって伸びをした。

彼が自戒するところなんて初めて聞いた。無条件の自信家ではないんだ。

そう思いながら彼を見上げたとき。

わたしは気づいてしまった。

嘴本くんの顎に。髭が。正確に言えば髭をあたった跡が、見えた。

——当たり前じゃない。『気づいてしまった』だなんて大げさな。

理性ではそれを当たり前のことだと分かっている。彼だって普通……ではないけれど男子高校生なのだから。

わたしは髭が嫌いだった。

小さい頃、仕事が休みの日に家でゴロゴロしているお父さんの伸びた髭がわたしにはとても汚いものに見えた。

子供の残酷さでお父さんに向かってイヤダイヤダと叫んでいたらお母さんにたしなめられた。

お父さんには謝ったが、嫌いなものであることには変わりなかった。……今でも苦手だ。

通学途中にも電車の中でうっかり視線を上げると男の人の髭の剃り跡が目についたりして気持ち悪くなることがある。その汚いものが、彼にもある。

これは、嘴本くんの、美しくない、角度。

おかしい話だ。彼がわたしの嫌いなものを持っているというだけ

で――。

彼が美の女神ミューズの庇護下の世界から、わたしのいる普通の世界に降りてきたような気がした。

特別な世界にいる人間が特別なのは当たり前だ。だけど彼は降りてきた。今ここに、わたしのすぐ側にいる。

……どうしよう。敷島さんに対して誤解を解くのをやめてよかったとほっとしている自分がいる。

「何だか新しい世界を見たような気がする」

「よかったね。キミはボクと一緒にいることで新たなステップを踏み出したんだ」

こんな言い方をしなければ、もっと××××××××××のに。

――ねえ、思うだけで口を閉ざしているなら、誰も何も言わないよね。

第十話・小さな一歩

「ねえ、お母さん。お願いなんだけど……」

——わたしの綺麗に見える角度も探してくれますか。

洗い終えた手をハンカチで拭うと、わたしはそれをなんとなく目の上に当ててみた。

水で冷えた手のひやりとした感触が、彼の、

——って、何やってるんだか。

大体、あの千葉の海の一瞬のきらめきよりも、彼の手の感触の方を鮮明に覚えているというのは美術部員としてどうだろう。

——戻る。

わたしは食堂へ向かった。

今日は牧瀬さんと星見さんが食事当番だ。

おかずの焼き魚を食べながらわたしはテーブルの斜め向かいの彼を見やった。

嘴本くんは敷島さんと稲城さん改めセナちゃん（本人がそう呼んでと希望した）に挟まれて何かを楽しそうに話していた。

人を意識する、って怖いな。昨日まで何でもなかったその光景が今日は小さなストレスに変わる。でもだからといって、たとえば彼の隣に座ったとしてもわたしは話す言葉を見つけられず、余計にストレスがたまってしまうだろう。食事時の席なんて自由なのにわたしはわざわざ嘴本くんに近すぎず遠すぎずの場所を選んでしまった。今日彼と過ごした時間に感じたものを、またわたしは感じたいと思っっているのに。

たぶん今日が一番「彼と居たい」というテンションが上がっている状態だというのに。

あれは嘴本くんにとっては普通のこと。

わたしはたくさんの中の一ひとり。

勘違いしてのぼせ上がるな。

わたしに根付いていた卑屈な性格がわたし自身を諫める。

このまま気持ちさがフェードアウトするのを待つだけになるのだろうか。

後悔している。でも後悔しないような行動をわたしが取れたかというところ……取れなかっただろう。

夕食を終え、食器を流しに置いて戻る時に永山さんから声を掛けられた。

「和美ちゃん、お願いがあるのっ」

「何ですか？」

「夕食終わったら、遊戯室に来て」

「遊戯室、ですか？」

確かあそこは畳の部屋で、囲碁と将棋のセットが置いてあった部屋だと思ったけど。

わたしは将棋の駒の動かし方を知っている程度でどちらも全然出ない。

「うん。夏コミの原稿落ちそうなの。助けて」

永山さんはわたしの腕に手を絡めてきた。

夏コミというのは同人誌即売会の中でも特に大きな規模のもので、永山さんはそれに参加するそうだ。何でも夏コミはプロの仕事と同じくらい重要なものなのだそうだ。

「それって、この間合宿前に仕上げるとか言ってますでした?」

「ぐっ……。面目ない。恥を忍んでお願いします。バイト代はちゃんと出します」

「別にお手伝いは構いませんけど……。ところで何で遊戯室なんですか?」

「徹夜してノムちゃん（野村先輩のこと）に迷惑かけるわけにもいかないでしょ」

「徹夜は既に予定に入っているんですか」

何だか着々とわたしを漫研……というかサークルに入れる計画が行っているような気がした。

一旦部屋に戻って同室のセナちゃんに今夜はここに戻らないかも、と告げると彼女にエッチな冗談を返されてしまった。

遊戯室に来た時には既にマンガを描くための道具一式はそろえられていた。

わたしの仕事は、絵の中で×印のついたところを塗りつぶすことと、番号のついたところにその番号のスクリーントーンを探して貼り付けることだった。

「わたしって、悪い子よねえ。美術部の合宿で違うことやってるんだもの」

「まあ、でもご飯作ったり、遊んだり、美術と直接関係ないことはみんなでやっているんですからきつといいんですよ。この時間ならみんなゲームとかおしゃべりとかしてますって」

「そうかな? まあ悪くてもやるしかないんだけどね。数は少なくとも、わたしを待っているお客さんがいるんだから期待を裏切るわ

けにはいかないのよね」

「やっぱりお客さんは嬉しいですか？」

「嬉しいよ。何で同人やってるかって、自分の作ったものを見てくれる人と顔を合わせるのが嬉しいからってのが一番だもん」

「ははあ」

「そして他の作家さんとの交流ね。ジャンルが同じ人は売る場所も近いから話が合うのよ」

「ああ、そういうのって永山さんに似合ってますね」

わたしはニコニコと周りに挨拶回りする永山さんの姿を想像した。
「やっぱりわたしってそういうキャラクターに見える？」

「え？ ええ。だって永山さん、人と仲良くなるのが上手いな、って思いますもん」

「上手いっていうか、そうしないとわたしがやっていけないのよ。だから必死」

「？」

「わたしって、独りでいるときは結構暗い性格なんだよ」

「ええ？ そう……なんですか？」

「うん。自分でも嫌になるくらい暗い性格。他愛ない冗談の悪口でもいつまでも気にしてるし、あの人は自分を騙そうとしてるんじゃないかとか疑ったりね」

「全然そんな風に見えないですよ」

「他人と接するときにはキャラ作ってるからね、わたし。……独りの時の自分が嫌だから、出来るだけ他の人という時間を多くしてるの。他の人と一緒にいる間は自分を演じていられるからね」

「……」

わたしと話している今もですか、と訊こうとしてやめた。

独りでいる時に悪い方向へどんどん思考が傾いてしまうことがあるのはわたしも同じだ。

わたしはそれで人と距離を置くようになった。

でも永山さんはわたしとは違う生き方をした。

「わたしに彼氏がいる話したっけ？」

「ええ。話というか、ちょっと聞いただけですけど」

「彼の場合も同じで、独りでいるときは、わたしは彼のことが嫌いな」

「嫌いって……。それじゃ彼氏じゃないじゃないですか」

「うん。欠点しか思い出せない人間と何でつきあってるんだろうってよく思う。でも会う約束取り付けると、おしゃれしなきゃ、って思うし、会ったらちゃんと楽しく過ごせちゃうんだよね。ケンカしても、熱くなれる自分が気持ちよかったりして」

「……わからないです」

「うーん、何て言うのかな。ほら、小学生の頃学校に行きたくない、とか思うことってたまにあったでしょ？　でもお母さんに怒られるから仕方なく学校に行ったら、それなりに学校を楽しめた、みたいな」

「え、いや、その喻えも分からないです」

「あはは。まあ、結局わたしは独りじゃ絶対生きていけない人間なのよ」

正直なところ、永山さんの恋人に対する感情は理解不能だった。それは恋人に対する感情ではない、などと偉そうに言うことはできない。

片想いをしている時の感情はともかく、両想いになってからの感情というのはわたしには未知の領域だからだ。

これからは永山さんを見る目が変わるな、と漠然と思った。

「永山さん、わたしそろそろお風呂に行きたいんですけど」

「ああ、もうすぐ時間になっちゃうね。じゃあ、一緒に行こうか？」

「……はい」
入浴時間ぎりぎりだったので、浴場には永山さんとわたし以外誰もいなかった。

二の腕の部分に日焼けの跡が見て取れたが日焼け止めを塗っていたおかげでヒリヒリするほどではなかった。

「ねえ、カズミン？」

「はい？」

「カズミンは髪伸ばしていたことないの？」

「わたしの髪はクセがひどいですから」

髪の毛をつまんでその手を上下させる。

「わたしだってクセツ毛よ」

「永山さんののは良いほうですよ。わたしのは酷いですよ。うねうねとしてて」

「でもわたしは、カズミンはもう少し髪を伸ばした方が可愛いと思うんだけどなあ。その濡れた髪を見て今思っただけ」

その意見は初めて聞いた。わたしはずっとお母さんから、短髪の方が似合うよと言われて……ってまたお母さんだ。

服にしろ、髪にしろ、わたしはお母さんに任せっきりでいたんだ。

わたし、マザコン？

「でも、わたしは地が可愛くないですから髪を伸ばしたくらいで、どうってことないんですけど」

「うわー、関根くん。恋する乙女がそんな消極的なことじゃ駄目だなあ」

「わたしにはそんな人……いませんよ」

わたしは一瞬逡巡した後、言い慣れている返答をした。

「え？　そう？　この間、嘴本ちゃんとの関係を凄い勢いで否定していたから誰かもう決めている人がいるのかと思った」

「あ……」

ああ、そう言えばそんなことしちゃったなあ。

それは……ちょっと失敗だったかな。

言葉を途切れさせたわたしに、永山さんがごめんね、と眉を下げたのでわたしは慌てて手を振って気にしていないことを告げた。

夜も更けてきたせいだろうか。疲れるくらいのおしゃべりが適度に気持ちよかった。

そしてお風呂から上がると、わたしたちは深夜の部に突入した。

……………。

「よし、ここまで。とりあえずお疲れ様ー」

「ふう……」

作業が終わって時計を見ると、もう朝になっていた。

「ん……」

「永山さん……、今、寝ちゃだめですよ……。朝食の時間を寝過ぎちゃいますよ……」

合宿中の行動はほとんどが自主性に任されているが、朝食と夕食だけはちゃんと全員で取ろう、とは牧瀬部長のお達しだ。

「わたし……、顔洗ってきますね……」

「ああ……ズミちゃん。今から30分後に起こして……。仮眠とる……」

「はい……」

わたしは部屋の隅に干していたタオルを取るとぼんやりした頭のまま洗面所に向かった。

静かな廊下に朝日が差し込んでよけいに眠気をさそう光景になっている。

——まだみんな眠っているよね。あー、いいなあ。

——朝食が終わったらすぐ寝よう。

洗面所の鏡の前に立ってみると。

ぼけーっ、とした女の子の顔がそこにあった。

あれ、そう言えば有田先生のホームページになんか鏡の前でやるおまじないのことが書いてあったなあ。そうそう、鏡の向こうのわたしに向かって、

ニコッ。

わあ、わたしって可愛い…。

……………。

……………。

……………。

——はっ。

出来るかー！！

ジャバジャバジャバジャバジャバジャバ……。
ジャバジャバジャバジャバジャバジャバ……。

慌てて蛇口を全開にして顔を洗う。

疲れてたんだ。疲れてたんだ、わたし。

わあああああ……。恥ずかしいったらありやしない。

徹夜明けのわたしの顔は、とても人前にさらせるようなものではなかったのに。

魔が差してしまったとはこういうことをいうのだろう。

ジャバジャバジャバジャバジャバジャバ……。
ジャバジャバジャバジャバジャバジャバ……。

「ねえ、お母さん。お願いなんだけど…」

「何？」

準備中の「セキネ理容室」で。

椅子に座った鏡の向こうのわたしが、ハサミとクシを持った鏡の向こうのお母さんに頼みごとをした。

「わたし、今度少し髪を伸ばしてみたいの」

「あら、そう？ わかった。じゃあ、そのつもりでそろえるわね」

お母さんは聞き返すこともなく頷いた。

拍子抜けするほどに、簡単だった。

第十一話・恋愛指数

昨日から電車通学の行き帰りの時間を使って久し振りに小説を読んでいる。

今朝までで全体の3分の2とちょっとまで進んだので、帰りの電車の中で読了できるだろう。

学園恋愛ものだった。以前、わたしの好きなマンガをノベライズした作家さんのオリジナル作品だ。

主人公の女の子は、大好きな先輩がいるのにも関わらず、想いを伝えられず悶々とした日々を過ごしている。けれど親友や姉の励ましとアドバイスを受けて少しずつ勇気を得ていくというストーリーだ。

どこかわたしと重なる部分があった。

昼休み。いつものように机を寄せ合って昼食をとる時間がやってきたが、静香ちゃんとはわたしの席にお弁当箱の入った包みを置くと、椅子には座らず片手をお祈りのように顔の前に立てた。

「ごめん。先に食べていいよ」

そう言うと静香ちゃんは小走りにノートとペンケースを持って青野くんの席へ向かった。

たった今終わった四時間目の数学の授業のわからなかったところを教えてもらいにいくのだろう。

わたしは紀子ちゃんと顔を見合わせると、それじゃあ先に、と頷きあって二人で洗面所に向かった。

「勉強熱心だねえ。静香は」

なんて、紀子ちゃんは悪意の無い皮肉を口にする。彼女の眼鏡の

レンズがきらりと光った。

わたしは笑いながら、積極的なのはいいことだと思うよ、と応えた。

青野くんはこのクラスの中でトップクラスの成績の良さなので、質問しに行くことは不自然には見えない。

わたし達4人組の中で、想い人を明らかにしているのは静香ちゃんだけだ。

わたしは……まだ口外できるような段階ではないし（将来的にその段階にいけるかどうかは甚だ疑わしいが）、紀子ちゃんはその手の話題が好きなくせに自分のことは『ヒミツ』と言ってカワイコぶる。

珠美ちゃんは、言葉にこそ出していないがなんとなく態度で誰を想っているかわかる。授業中、その人の方を見つめていることがよくあるから。わたしですら分かるのだから他にも気づいている人はいるだろう。

現金なもので、わたしは最近他人の恋愛沙汰が気になるようになった。

これまで恋愛関係の話になるとさりげなく逃げていたわたしだが、今ではそういう話題になることを密かに待っている。あくまで待つだけ。

帰りの電車の中でも、いちゃいちゃしているカップルに目を奪われたりして——って、これじゃデバガメか。そのせいで今読んでいる小説を読み終える時間が1日半から2日に増えたのは内緒だ。

手を洗い終えたわたし達は教室に戻ってきたが、入り口のところに一人の男子生徒が教室の中を覗くように立ち塞がっていたのでわたしは小さく、すいません、と声を掛けた。

「ああ、悪い」

彼は振り返ってそう言った。その顔は……有名人のものだった。

この学校のもうひとりの王子様——風間圭。かざまけい

人の名前を憶えるのが苦手なわたしでもそのフルネームは簡単に思い出せる。

彼はモデルの仕事をしていた、よく雑誌にその姿が載っているのを見かけるのだ。

「このクラスに柚木っているだろ？」

表情を変えることなく、ぶっきらぼうな物言い。

彼には友達が少ないと言う噂を聞く。これが普段の態度なら本当かもしれない。女子の間でも、彼を称えるおしゃべりが多い一方で、冷たくて近づきがたいという声も上がっていた。

「柚木——珠美ちゃん？」

「いるなら呼んで欲しい」

「珠美ちゃんは今日風邪で休みだけど」

「風邪？ ……そうか。じゃ、出直すことにする。すまなかったな」
そう言って風間圭は手に持っていたハンカチをブレザーのポケットに入れて去っていった。

ハンカチは女物だった。その柄には見覚えがあった。

「なんだろうね」

紀子ちゃんが内緒話のようにわたしの耳元で小さな声を出す。

勿論わたしに答えられる筈もなく、さあ、と言うしかなかった。
でもいかなる経緯で珠美ちゃんが風間圭にハンカチを貸したのかは
気になる。

青野くんの席では静香ちゃんがうんうんと何度も頷いていた。

2学期が始まっていた。

高校美術展も近づき、美術部には何となく慌ただしく緊張した雰囲気
が漂っていた。

桑苑学園は今年の当番校なので会場設営や来客の受付の仕事も回
ってくる。

特に2年生部員の永山さんや野村さんは、修学旅行が間に挟ま
ていて気分的にも大変だと思う。

わたし個人の作業はほとんど終了しているのだが、桑学美術部と
して活動して初めて部外の人に見てもらおうということもあり、気分
は高揚していた。

実は中学のときも一度だけ展示会に出品した覚えがあるが、あの
ときはわたしは学校の宿題のように提出して「はい、おしまい」と
いう感覚だった。

時間と強制感にとらわれ、いかに自分がいい加減に絵を描いてき
たかということは今にして分かる。

……そう言えば、もう一作、描きかけがあったんだけど、あれは
中学の美術室に今でも置きっぱなしなのだろうか。もう捨てられち
やったのだろうか。

どんな絵だったか思い出せない。無理に思い出そうとすると余計
なことを思い出しそうだ。

わたしは嘴本くんの後姿を見つめることが多くなった。何故後姿
かというと彼の作品を見ているフリをすることが出来るからだ。い
や、実際に作品も見ているんだけど。

美術部員として彼の作品を見ていることは不自然ではない。

気づかれても、作品の感想を言ったり、道具の使い方の方の意見交換
をしたりすることでごまかすことが可能だ。……こうやって言い訳
を作っておくところは静香ちゃんと同じか。

でもそれで気づいたこともある。

嘴本くんがペインティングナイフを構える手、針金を曲げる手、
彫塑べらを返す手。彼の手に惹かれていた。手ばかり見ているけ
ど後姿だとそこが気になるのだからしょうがない。

わたしがコンプレックスを持つくらいに女性的な美しさを持つ彼
だけど、決して華奢というわけではない。器用に動く大きな手を見
ていると、ああ、男の子なんだなあ、っと思う。

小さい↓繊細、大きい↓大雑把、などという単純な先入観を持っているからなのかどうか、そのギャップは心地良い。

手に関して言えば嘴本くんだけでなく星見先輩でも素敵だなと思う。

帰りの電車の中野駅の辺りで小説を読み終えた。途中までは面白く読み進められたけれど、ラストが気に入らなかった。

主人公のあこがれの先輩には既に恋人がいたために、結局主人公は振られてしまった。

でも主人公は想いを伝えることができて満足した、スッキリしたというのだ。

わからなかった。

失恋したのに晴れやかな顔をしているなんて絶対おかしい。

主人公が苦しんでいたのは、好きな人と想いを交わせなかったからではなく、したいことができなかったからというだけなのか。

想いをただ伝えるだけで良いというのならそれは唯の自己満足だ。叶わなくてもいい想いなんて、信じられない。

——信じられない。

だってわたしは苦しいのに。

わたしが人を好きになったって——その恋は絶対叶う筈がない。だから苦しいのに。

家に帰ると珠美ちゃんの家で電話した。

もう身体は大丈夫だから明日は学校に行けるよ、という返事だった。

たので安心した。

電話を切った後に今日の風間圭のことを伝えるのを忘れたことに気づいたが、明日言えればいい事だと思ってかけ直しはしなかった。

次の日の朝。教室に入るともう珠美ちゃんが登校してきていた。

「おはよー」

「おはよー。身体、もう大丈夫？」

「うん。もう全然大丈夫」

両手を振って珠美ちゃんはアピールした。

「あ、そうだ。珠美ちゃん。昨日ね、風間圭が珠美ちゃんに会いに来たよ」

「葉月くん！？ ほ、ほんと？」

珠美ちゃんはぎょっとしたように大きく目を見開いた。思っていた以上に大きな反応だった。

「な……何て？」

「用件は言わなかったけど……ハンカチを返しに来たみたい」

「あ、そっか！」

珠美ちゃんはガタゴトと音をたてて立ち上がり、慌てて教室を出て行った。キュキュキュと廊下を走る上靴がリノリウムを擦る音が聞こえた。

わたしは彼女の行動に戸惑いつつ自分の席について鞆を置く。しばらくして珠美ちゃんは戻ってきた。

「まだ、来ていなかった…」

わたしの机に手をついてため息のように呟く。

「何か、あったの？」

ここまで極端な行動を取られては気になってしょうがない。

「うん……ちよっとね」

珠美ちゃんはわたしの机に両手をついたまま、沈みこむようにしやがんだ。

「どうしたのー？」

半分笑ったような声を作って、珠美ちゃんの手の手をさすすと撫でる。

「ねえ、和美ちゃん。恋愛って積み重ねじゃないんだね……」

机の陰に沈んだまま、出し抜けにそんなことを言った。

「え？」

「ちょっと優しくされただけなのになあ」

言っていることがバラバラで意味不明だった。

でも珠美ちゃんにもものすごくドラマチックな出来事があったのではないかと妄想してしまう。ねえ、珠美ちゃん。わたし、ちょっとウズウズしてる。

「ねえ、和美ちゃん。二人の人を同時に好きになったことある？」
机の陰から日の出の太陽のように頭を上げると、珠美ちゃんはわたしの目を見てそう言った。

その「二人」っていうのが誰と誰を指しているのか容易に推察できるといのはまずいんじゃないでしょうか、柚木珠美さん。いや別にまずくはないか。

「ないけど……。そういうことは『わたしは』ないけど、そんなに珍しいことじゃないんじゃないの？　むしろ普通？」

恋愛履歴書の記入欄が空白だらけのわたしは、無責任な発言をしてしまう。

「二人でも三人でも、様子を見てどっちがいいかゆっくり決めればいいんじゃないの？」

「うーん。……あのね、和美ちゃん。一般論としてよ。一般論として考えて。片想いのうちに浮気するっていうのは許されると思う？」

「え？　片想って、それは……浮気が成立しないでしょ。そりゃ恋人とか夫婦になってから他の人を好きになったらいろいろ問題が起きそうだけど」

「でもね。……えっと、例えばの話よ。ずっと前から『この人だ！』って決めていた場合はどう？　もう一人の人とのちょっとした出会

いで、ずっと積み重ねてきたと思っていた想いが、あっさり覆るなんてイヤじゃない？」

「……」

「思うだけなら、タダだよん」

「わっ」

「わっ」

突然（というかわたし達が気づかなかったただけけど）、紀子ちゃんが登場して珠美ちゃんの両肩を揉むようにポンと手を置いた。おはよー、と3人の声が重なる。

「なーんか面白そうな話してるじゃん」

「あはは……」と珠美ちゃんが変な愛想笑いをする。

「何人好きになろうが、思うだけならタダ。誰も文句は言わないよっ」

「むー」

何故か得意げな表情の紀子ちゃん。納得いかない表情の珠美ちゃん。

「黙ってれば、そりゃ誰も何も言わないだろうけど、だから本人の心の問題としてどうかと思ってるの」

「珠美ちゃんは恋愛潔癖症ね」

「えー？　じゃなくて一般論としてよ。例え自分の心の中だけの事としても、誓いを破るなんて、それまでの自分の感情は何だったのかというコトになるでしょ？」

珠美ちゃんが口を尖らせる。

「ふむ。だからさ、思うだけならタダ。心に誓いを立ててたとしても恋愛指数が低かったら新しい恋にあっさり抜かれちゃうよ」

「恋愛指数？」

「ふふん、最近わたしが理科Ⅰの授業中に気づいた法則」

紀子ちゃんはルーズリーフを一枚取り出して机の上に置くと、シヤープペンシルでそこに数式を書いた。

W ∥ F × S

「Wは仕事、Fは力、Sは距離、ってことね。とりあえずベクトルは無視の方向で」

「うん」

理科Iの教科書どおりだ。物理分野の。

「物理で言うところの『仕事』というのは使った『力』に移動した『距離』を掛け合わせたもの」

紀子ちゃんは両手の人差し指で「×」の形をつくる。

「だから、同じ条件の下で100kgの物を1cm動かすのと、1kgのものを100cm動かすことは仕事としては同じ値。これはいいよね？」

「うん」

「問題なのはね、S∥0のとき。移動していないときは。このときF……力がどんなに大きくても仕事量はゼロのまんま。つまり何も仕事をしていないのよね」

「ん……」

「二人の人がいて、100kgの物を動かそうとして失敗した人も、1kgの物を動かそうとして失敗した人も、どちらも仕事は0ということで同じなのよ」

「何か変ね、物理って。100kgの物を動かそうとした人のほうが頑張った感じがするけど」

私は疑問をそのまま口に出す。でも紀子ちゃん是不敵に笑った。

「わたしはそうは思わない。これって人間関係でも使える真理じゃないかと思ってる」

「どうして？」

「だから。『仕事』を『恋愛指数』に置き換えるのよ。『力』は本人の想いの力。『距離』は二人の間の距離……心の、ね。その縮まり具合。想うだけで実際に近づく為の行動に移さないなら距離が縮まるはずもなくS∥0。どんなに想っても……つまりFが大きくて

も……掛けたら0だから恋愛指数はゼロにしかないの。F＝0の何も想っていない人の恋愛指数と変わりないのよ」

「……ねえ紀子ちゃん、じゃあ、こういうこと？　いつまでたっても距離が縮まらない人よりも、想いは少なくとも恋愛指数の高い人を選ぶべきってこと？」

「それは当事者の自由よ。この『恋愛指数』っていうのは、そうだな……心が満たされる度合いの目安みたいなものね。あえてそれに逆らう生き方もわたしは否定しないよ？」

「……」

沈黙するわたし達に、紀子ちゃんは肩をすくめて笑った。珠美ちゃんは口をへの字に曲げて考え込むと自分の席に戻っていく。それを見た紀子ちゃんもわたしに向かって軽く手を挙げ自分の席に戻っていた。

紀子ちゃんの論理にはわたしもドキツとした。

『どんなに想っていても、距離を縮められなければ何もないのと同じ』

それは。でも、でも、でも……。

だって、そうだ。人と人との距離というのは縮まるだけじゃない。広がる事だってある。

そのとき、恋愛指数はマイナスになるんだ……！

始業のチャイムが鳴った。珠美ちゃんは風間圭に会いに行くことを忘れてしまったようだった。

今日もわたしは彼を背中側から見つめる。

だって。マイナスになるくらいならゼロのままでいい。

いくじなし。

第十二話・再読

恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人しれずこそ 思ひそめ
しか (壬生忠見)

県の高校美術展は10月2日(水)～6日(日)の5日間一般公開される。

今年の当番校である桑苑学園の美術部であるわたし達は、開催を明日に控え、市立美術館の展示室を借りて、入選した作品群を指定の位置へと配置していった。

かくいうわたしの描いた作品も「入選」の栄誉を受け、展示室の片隅に飾られることとなった。

美術室で描いている間は他の部員の人たちにさんざん見られていたのに、壁に掛けられた状態で見られるのはなぜか新鮮に恥ずかしい。

これでまた一般のお客さんが来たらわたしの絵をどんな目で見るとのだろうか。想像するだけで全身がむず痒くなる思いだった。

「和美ちゃん。手離すから気をつけてー」

「あっ、うん」

セナちゃんの声に、わたしは額 (がく) を持つ手に力を入れ直した。

「離すよ……。ん、よし」

水彩画をまた一品壁に掛ける。

「嘴本くん！ その位置から見えてどう？」

「OKだよ。うん。いいバランスだ」

「それじゃ、次。あっと、これ、野村さんのだ」

「わー、ほんとだ！」

「こらー、稲城、関根！ 鑑賞するのは後にしろ！ 作業が先だ」

「はあい」

「ほら、二人とも。こっちだよ。急ごう」

共同の作業っていうのはとてもいいと思う。『作業』だから何も緊張することなく普通に何度も嘴本くんと話をするができる。それがたとえ事務的な内容だけだったとしても『共同作業』だから息を合わせることが多いわけで。大きくて重い絵を苦勞して彼と一緒に掛けたときに微笑みあえたのは美術部に入ったことによる最大の役得だった。

すべての作業が終わったのは午後八時半ごろだった。

「よし、それじゃ全員1階ロビーに集合！」

牧瀬部長の声に皆はほっと息をつき、そろそろとロビーへと向かっていった。

ロビーのテーブルの上にはいつの間に用意されたのか、コンビニエンスストアの袋に入った飲み物のペットボトルが用意されていた。

「はい、皆さんお疲れ様ー」

それに応えて、全員の『お疲れ様でしたー』の声が重なる。

「あ、もう、お茶でもジュースでも好きな勝手に取って飲んでいいからなー。もう夜も遅いので、飲んで一息ついたら速やかに帰るようにー。じゃ、その間に明日からの予定表を配るー。回せ」

回ってきたプリントには、高校美術展の展示会場前での受付と見回り役のスケジュール表が印刷されていた。

わたしの割り当ては……あ、日曜日のに当たってる。

受付の仕事をする日は学校に欠席扱いされずに休めることになっているが、それが日曜日だと損をしたような気になる。

……敷島さんと一緒かあ。

わたしと一緒に受付をするのは敷島さんだった。目を上げると、おそらくわたしと同じ理由でこちらを見た彼女と目が合った。

わたしはプリントを指差すと、よろしく、と口パクして小さくうなづくように頭を下げた。

……そりゃ、嘴本くんと一緒にの時間になりたかったという本音もあるけれど、そこまでわたしは欲張りではない。

嘴本くんの方はと見ると彼は飲み物に手もつけず、じっとロビーの壁を凝視していた。そこには近々この美術館で開催される予定の展覧会のポスターが幾つか貼られていた。

「薫サマ、何を見ているの？」

嘴本くんの隣に座っていたセナちゃんがわたしの訊きたいことを代わりに訊いてくれた。「ああ、あのポスターを見ていたんだよ。あの絵を描いた人物……絵には見覚えがあるんだけど名が思い出せなくてね」

「うーん、どこかで見たような絵柄だよなぁ」

彼が指し示したポスターには人物画が印刷されていたが、ロゴは『第34回桑苑現代美術展』とだけ書かれていて絵の作者名はわからない。

でも偶々わたしはその名前を知っていた。

「……小川清明」

無視されたらそれでいい、ぐらいの気持ちでつぶやくと嘴本くんは顔をほころばせてわたしを指差した。

「そうだ、小川清明だね。思い出したよ。『太陽を射る少年』の作者だ」

「うん……。前に上野公園の美術館で見たことあったから」

はわあ……。喜ばれている……。喜ばれているよ……。

「関根くん、彼の作品は好きなのかい？」

「うん……。好き……」

「僕も好きだよ。彼は小さい子供の目の描き方に長けているからね」

——ああつ。

——あああつ、今の場面、録音だけでもしておきたかった……！

「ふむ……。関根？」

「はい？」

牧瀬部長がわたしに話を持ちかけた。馬鹿なことを考えていたのでちよつと声が裏返り気味になってしまった。

「それ。『桑苑現代美術展』。文化祭が終わったら美術部のみんなで行ってみないか？ 時期的にちょうどいいし」

「美術部みんなで？」

「おう。文化祭が終わったら3年生は実質引退だ。締めには皆で遊びに行くのもいいだろ」

「あ、はいっ」

身体が震えそうになった。顔が熱くなってくるのがわかる。 牧

瀬さん、それは……。

俗に言うデートというものではありませんか？

無理をしなくても、美術部にいるというだけでこんなに心地良い空気に包まれることができるなんて。

美術部は基本的に個人作業だけど、この間の合宿や今回の展示準備のおかげで部員同士の距離は大分縮まったような気がする。

——これでいいのかも。

片付けを終えて美術館を出ると、夜の外気が心地よかった。

「和美！ 今日には美術館に行くんじゃないの？」

日曜日。お母さんの声にわたしはぼんやりと目を開けた。

「ん……。行くけど昼からだよ……」

「もう10時半だよ」

「えっ……。あ、ホントだ」

「ごはんは出してあるから温めて食べなさい」

「ん……」

わたしはベッドから身を起こした。

今朝は遅く起きていいからと思って二度寝してしまったようだ。

眠い目を擦りつつ、机の上の鏡を手にとって中を覗き込む。

ニコッ。

……結局わたしはあの合宿の日以来、鏡に向かって笑顔を向ける練習を毎日続けていた。

もちろん恥ずかしいから一人でいることを確認してからでしかやらないけれど。

有田先生はこれが綺麗になるためのおまじないだと言うけれど、本当に効果があるのかはわからない。

実はわたしは誰にも言えない一瞬の自己陶醉を楽しんでいるだけなのかもしれない。どうせわたしを美しいと褒める人はいないのだから、せめて自分だけでも褒めてやりたいという思いで。

高校美術展はやっぱりプロの作品展ではないだけに、あまり人の興味は惹かないようだ。

それでも美術館は平日よりは人の入りが多いようだった。

訪れる人は県内の高校生（多分美術部関係の人）が多く、他にはときどき美術ファンと思われるおじさんやおばさんがやってくる程度だった。

一緒に受付をしている敷島さんとわたしはそれほど親しい間柄ではないので、二言三言どうでもいい会話をしてはしばらく黙り込むという繰り返しの時間を過ごしていた。

「すみません……いいですか？」

退屈になってうつらうつらと船を漕いでいたわたしを、男の子の声が目覚めさせた。その人は左手に鞆、右手に高校美術展の案内チラシを持っていた。

わたしは顔を上げ、どうぞ、と展示室内部を指し示そうとした。

——しようとした。

……けれど、できなかった。

——できなかった。

その人の顔を見た瞬間、わたしの身体も表情も彫像のように固まってしまったのだ。

「あ、関根さん！ あつれー。ひさびさー!!」

わたしは声も出せなかった。わたしの中の全ての時間が止まってしまったかのようだ。

「関根さん、こっちの方の高校に行ってたんだ……」

わたしは自分の二の腕を軽く叩かれる感触を覚えようやく緊縛から解き放たれた。

叩いたのは敷島さんだった。

「大丈夫？ 関根さん？」

「あ……。ん……」

「知り合いなの？」

「う、うん……中学時代の同級生」

ちらりと彼を見上げる。

「葛名君……。久し振り」

そう、彼。葛名弘明君。

彼はわたしが中学生のとき美術部で一緒だった男子だった。

わたしは彼とはわりと仲が良かったのだが、ある時、彼に纏わるちよつとしたことがあって部にいるのが辛くなりそこから逃げてしまったのだった。それ以来彼との交流も絶たれていた。

彼のことを思い出す度にわたしの心は深く沈んでいったのに、今ここで本人と出会ってみるとそんな不快な感情以上の別の感情が胸を占めたみたいだ。

「高校どこ？」

「桑苑学園……」

「あー、そんなところ行ってたんだ」

「うん……」

すると、敷島さんが人差し指でわたしの肩の辺りを突付いた。

「関根さん、一緒に回ってきたら？」

そのままその指を展示室の奥に向けた。

「えっ。でも……」

「ちようどいいでしょ？ 見回り兼ねて。何か話したいこといっぱいありそうだし」

敷島さんはわたしと葛名君を交互に見やった。

「……」

彼女の申し出は、有り難いようでおせっかいなようで複雑な気分だった。けれどせっかくの厚意なのでわたしは葛名君の方をちらりと見た後、じゃあお願い、と言って立ち上がった。

わたしたちは展示室の壁沿いにゆっくりと並んで歩く。

「どうして葛名君、今日ここに？」

「うん。このあいだ美術部の顧問の先生からこれもらったんだ。今日、こっちに来る用事あったからついでに」

葛名君はピラピラと美術展のチラシを振ってみせた。

「美術部……葛名君、高校でも美術部入ったんだ」

「うん。そっちもだろ？」

「高校はどこ？」

「ああ、山祥高校。……あつ、この絵、結構いいな」

山祥高校はわたしがかつて進学しようと思っていた公立高校だった。

「そういえば関根さん、髪、伸ばしてるんだね」

「！」

振り向きざまに彼が言った言葉に息が詰まりそうになる。

——どうして、どうして一番最初に気づくかなあ？

——クラスメートや嘴……美術部の人はまだ誰もその事に触れていないのに。

「中学のころめっちゃ短かったけど俺は今の方がいいと思うよ」

……考えてみれば当然かもしれない。

毎日見ているクラスメートよりもしばらく会っていない人の方が変化には気づきやすいものだ。

でも、最初の人によりにもよって葛名君になるなんて思ってもみなかった。

胸の奥で小さな鈴の音が鳴ったような気がした。

……何だろう、この気持ち。

「あ……れ？　ごめん。俺何か変なこといったか？」

わたしの表情を見たためか、葛名君は慌てたように言った。

「ううん。なんでもないよ。何も別に葛名君変なこと言ってない」
「そう……か？ いや、マジな話、俺が変なこと言ってたなら遠慮なしで言っていていいからな。中学の時もそれで嫌な感じになってしまっただろ？」

「え？」

「ほら、2年の頃だっけ？ 関根さん、急に俺のこと避けるようになっただろ？」

え……？ わたし「が」葛名君を……？

「俺が話し掛けようとしても睨み付けるしさ、美術室でもわざわざ俺の方に近寄らないように不自然に場所移動したりさ」

それは……。ちよっと待って。それは違う。逆。避けだしたのは葛名君の方だ。

「何か俺、関根さんを怒らせるようなことしてしまったかなって心当たりを探ってさ……」

「……」

「そしてとうとう美術部に来なくなったから、すげえ気になったんだ。『俺のせいかな？』なんて結構悩んだんだぜ」

あの時のこと……。葛名君が友達にからかわれていたときのことをわたしは思い出していた。

あれがきっかけで葛名君はわたしを避けるようになったはずだ。違うの？ どうしてわたしが避けただなんていうふうに覚えてるの？

「あつ、これ関根さんのか。へえー。いいねえ。水の感じよく出て」

「……」

わたし達はわたしの描いた絵の前に来ていた。

けれど、幸か不幸か今のわたしは彼にそれを見られても何も感じなかった。

「あのさ、今だから言えるけどさ。俺、関根さんの事、ちよっと好きだったんだぜ」

「嘘ッ……！」

反射的に声が出た。

——いくら何でもそれは嘘だ。

——どうしてそんなことを言うの？

葛名君は苦笑して舌を出した。

——それは照れ隠しのつもり？ それとも今言ったことは冗談だ
という意味？

「……それ、嘘でしょ？ だって学校じゃわたし『ネズミ』って男
子から呼ばれてて馬鹿にされてて……」

わたしは何かを否定したくて先に自分を卑下した。

葛名君は頭を掻いた。

「そのあだ名は俺が美術部に入ってからすぐにクラスの男子から聞
いてたよ。なんかニヤニヤ笑いながら関根さんの悪口言ってるさ」

「やっぱりそうでしょ？ わたしと同じ小学校の男子だと思うけど。
それ」

「だけどさ、クラブ活動しているとき見ても……あー、ごめん。
最初のころ関根さんを噂のせいで興味本位で見っていたことは確かに
ある。でも関根さんって噂されているような、その……気持ち悪い
女の子じゃなかったしさ。その……ブスでもないしさ」

彼は言葉を選んでくれているのだろう。

「それに、だって俺と話しているときとか全然普通だったじゃん」
葛名君は自分とわたしとを交互に指差しながら言った。

……ああ、そう言えばわたし、男子では唯一葛名君とまともに会
話できてたかもしれない。

「俺のクラスにすぐ誰と誰が好きあっているとかいう奴がいてさ、

俺もよくからかわれていたんだけど……。ん、まあ、それで関根さんのことも意識するようになったちゃってさ」

何、それ……。

「だから無意識のうちに関根さんに馴れ馴れしい態度を取って逆に嫌われてしまったんじゃないかとも考えたんだぜ」

「嫌ってた……ってわたし、そんな態度取ってた？」

葛名君は、そう思ったけど、と当時わたしが取った態度について繰り返した。

「美術部来なくなった理由とか聞きたかったけど本当に俺のせいだったら落ち込んで立ち直れそうになかったから結局話し掛けられなかったんだ」

……そんなことが。

避けるようになったのはわたしの方？

ぐるぐるとわたしの頭の中で記憶と感情がごちゃまぜになりながら巡った。

もしも、彼の言うことが本当なら……！

本当なら？

わたしはどうしようというのか。

わたし達は一回りして展示室の入り口に戻ってきた。

「なかなかレベル高い絵がそろってたな」

「そう？」

「ごちゃごちゃ考えながらもわたしは適当に葛名君の言葉に相槌を打って歩いていた。」

「（東京）都の高校美術展はもうちょっと後なんだけど参考になっ

たよ」

「うん」

「あ、そうだ。ちょうどいいや。お返し。今度は都の高校美術展に来てくれよ……って山祥は当番校じゃないけどな」

「うん。時間が合えば」

「えーと、一般公開の日程は……ちよつと待って。鞆に入れておいたはず」

葛名君は鞆を開き、中を覗き込んだ。

その時わたしは彼の鞆にフェルトのマスコットがくっついているのを見つけた。

「あ……かわいい。何それ？」

「ん？ ああ、それか？」

制服を着た男の子のマスコットだった。

わたしの目に狂いがなければその顔は葛名君によく似ていた。胸の中にもやもやした変なものが走った。

「うん。同じ美術部の女の子からプレゼントされたんだ」

笑みを隠しもせず葛名君は語った。

「付き合っている人なの？」

——何でそんなこと聞いてしまったんだろう。もう、口が滑ってしまったから遅いけど。

「ん、まあ、そんなところ」

……そうか、わかった。

葛名君がわたしのことを好きだったなんて言った理由が今わかった。

彼は今、幸せなんだ。だからそんなことを言っても心が揺らぐことがないんだ。

——わたしは揺らいだけど。

やっぱり彼がわたしに抱いていた感情は普通の友達感情だったんだ。

ただその過去をちょっと美化してみたただけなんだ。

もしも今恋人がいなかったのなら、それはわたしと付き合いたいという遠まわしな言い方に受け取られる。

当然彼はそんなつもりではなかったのだ。

そうだ。そうに決まってる！

わたしに東京都の高校美術展の日程を教えてくれた葛名君はそれじゃ、と別れを告げて美術館の出口へ向かった。

その背中を見つめながらわたしは彼と手をつないで歩く女の子の姿を想像していた。

もしも、あの時――。

Ifの世界を想像してしまうわたし。

そしてそれが全く意味の無いことであると分かりわたしは自己嫌悪に陥った。

――願わくはその恋人という人はわたしに全然似ていませんように。

自分の行動を正当化するための精一杯の願い。

どろっ……。

あ……分かる。自分の心に黒い墨が流れるのが分かる。

わたし、今、嘴本くんと一緒に受付になれなかったことを改めて

悔しがっている。

彼がここに来た時に嘴本くと仲良さそうに会話しているところを見せびらかしたかった。そう思ってる……！

いやな女だ。わたし。

……嘴本くん、ごめんなさい。わたし、あなたを利用しようとした。

「関根さん？」

敷島さんの声にわたしは振り返った。

そして、しまった、と思った時には遅かった。わたしは頬に熱い水滴が伝うのを感じていた。

敷島さんが驚いて立ち上がり、わたしに駆け寄ってくる。

ああ、ああ、ああ！！

馬鹿だ。わたしは馬鹿でどうしようもない女だ。

そして今、敷島さんにですら甘えたくなっているわたしが心底情けなかった。

第十三話・私はヒロイン

わたしは手の甲で目を拭って受付の席に戻ろうとしたが、敷島さんに押し留められてしまった。

「!？」

彼女はわたしの胸を右手で押さえたまま左手でトイレの方向を指差した。

「か・お！　ただでさえお客さん少ないんだから、そんな顔している人が受付にいたらみんな逃げちゃうでしょ」

「んっ……」

一瞬ムツときたけれど、すぐに敷島さんの言うことは尤もだと気づき、わたしは顔を洗いにそちらへ向かった。

洗面台の鏡に映るわたしの頬に涙の跡が残っていた。

——泣いたって意味無いのに。

じゃあじゃあと水を出して顔を洗うと少しはスッキリしたが、鏡に向かって笑顔のおまじないをする気にはなれなかった。そのかわり、鏡に向かって悪態をつく。

『凍ってしまえ。わたしの心』と。

ふっ、と息を吐き顎を反らす。

そして何もかもを見下した目つきをする。

……………。

ほら、簡単だ。こうすれば何もつらくなる。

展示室に戻ってきたわたしに敷島さんがちらりと視線をよこしたが、それ以上何も言わなかった。

その後は特に何事も無く受付の仕事の時間は終わった。

明日は美術館の休館日だが、わたし達美術部は高校美術展の後片付けを丸一日かけて行うことになっている。のんびりできるのはもう少し先だ。

帰りの電車はいつもより早く着いたような気がした。

電車の中でわたしは同じ事をぐずぐずと何度もリピートさせていたように思う。

夕食の席ではお母さんにまた「背中が丸いよ」と注意された。

自分の部屋へ戻ってきたわたしは深呼吸を一度すると身体から力を抜いてベッドに寝転がった。

ごろごろ。

——わたし、進むべき道を間違えちゃったのかなあ。

ごろごろ。

——もしもあの時、わたしが美術室で噂話を聞いたりしなかったら。

ごろごろ。

ごろごろ。

ああっ、もうっ!!

何度同じことを考えれば気が済むのよっ！

わたしは、ぼふつ、と枕に向かってうつぶせに顔を沈めた。

……わかってるよお。

心の中で呟く。でも誰に向かって言っているんだろう。

今日、葛名君に髪を褒められた時、本当は嬉しかった。凄く嬉しかった。

……認めるしかない。わたしは葛名君が好きだったんだってこと。だけど、遅すぎる。

葛名君の言葉は中学の時に聞きたかった。そうしたらきっとわたしの人生は変わっていた。

……ああ、違う違う。きっと中学の時には絶対聞けなかった。そしてわたしも自分の想いに気づくことはなかった。

たとえ葛名君の言葉が真実だったとしても、彼がわたしの側にいたならば、わたしだけに向けられるはずだった悪意が葛名君にも波及するようになっただろう。

人間の悪意は底なしだから、一度悪い方に考えたいと思えば何が何でもそう思うために周りのものも平気で飲み込んでいく。

そんなことにはなってほしくなかった。わたしが葛名君に対してどういう想いを持っていたかに係わらず、それだけは避けておきたかった。

だから、わたしが美術部を離れたのは間違ってたんだ。

……というのはい訳か。

もっとハッキリ言えば、わたしのせいで葛名君がからかわれ、そのせいで葛名君がわたしを避けるようになることを恐れたんだ。

もともとわたしは、呼ばれたくないあだ名を一番好きな人から言われたときから恋心を持たないフリをするようになった。

嫌いな人から嫌われるより好きな人から嫌われる方が何倍も傷つくから。

そう、わたしの行動の基準は「嫌われるか・嫌われないか」だった。だから「好き」という概念なんて考える余裕はなかった。けれどそんなわたしが葛名君への想いに気づけたのは「彼」がわたしに恋を思い出させてくれたからだ。

『嘴本くん……』

枕から顔を上げると呼吸ついでに呟く。目がチカチカしたのは闇の中から光の中へ急激に戻ったからだけではない。

珠美ちゃんがどうしてあんなに悩んでいたのか、今頃になって実感した。

いっぺんに二人の男の子のことを思い浮かべると、頭の中がはちきれそうになるんだ。

わたしの場合と珠美ちゃんの場合とはちょっと違うけれど、気持ちには分かった。

罪悪感と甘美な妄想とがごちゃまぜになってわたしの胸をくすぐる。

こらえきれない感触にわたしは右手でシーツをきゅっ、と掴んだ。

好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き！

好き好き好き好き好き好き！

嘴本くん……。好き……。

心の中で叫びながら、同時に別のわたしが彼にごめんね、と言う。今のわたしは嘴本くんを想って叫んでいるだけとは言いがたい。

胸のざわめきを押さえるために、もう一人の男の子を頭の中から追い出そうとして、嘴本くんの名前を使っている。

好き、好き、好き、好き、好き、好き、好きだよ……。

好き、好き、好き……。

強引なやり方だけど「好き」の連呼でわたしは昂ぶっていく。

嘴本くん、……薫くん。

わたしの背中が曲がる。

強く目をつぶると涙が滲んできたがわたしはそれを拭わない。

浸ってみたい。少女マンガに出てくるヒロインになりきって世界にどっぷり浸かりたい。

好き、好き、好き、好き……。

カオルくん、カオルくん……カオルウ……。

呼吸が激しくなる。

ただただ「好き」という言葉と彼の名前とを胸の中で何度繰り返しただろうか。

呪文のように言葉だけを繰り返す。

ヒューッ。

変な音が聞こえる、と思ったらそれは私の嗚咽だった。

体から力が抜けるまで想いの限りわたしは続けた。

……。

わたしはベッドから身を起こす。

気分が醒めていく。

そしてむなしくなってくる。

嘴本薫くん。

彼は何よりも美しいものを好む。それはわたしに一番縁遠いものだ。

彼を好いている女の子は多い。誰もがわたしよりきれいでわたしより積極的な女の子だ。

どう考えても適わない恋だから一緒のクラブにいられるだけでいいと思うとしていたのに。

わたしはどうとう現状に満足できなくなってしまった。

葛名君の言葉のせいで、自分みたいな人間でも好かれる可能性はゼロではないと思ってしまったんだ。

馬鹿みたいと言われるかも知れないけど、そのちよっぴりの可能性に期待しているわたしの感情が消せない。どうしても消せない。

「んっ」

涙が喉に落ちた。

わたしはぎゅっ、と目をつぶって頭をぶんぶんと振ると鞆からペンケースとノートを取り出した。

わたしは時々気晴らしのためにノートに落書きをすることがあるのだ。

おまじないというわけではないけれどある程度気は紛れる。

パラパラとノートをめくっていると中に折りたたまれた紙片が入っているのを見つけた。

?

わたしは不審に思いながらその見覚えのない紙を開いた。そこに
は女の子の文字が書かれていた。

$$\wedge \wedge \wedge \wedge \wedge \wedge \wedge \wedge \wedge \wedge$$

せきねさんへ

私はせきねさんと同じ美術部だけど、

特に友達と言う訳ではないから忠告させてもらうね。

今日みたいな、いかにも「強がってます」なんて顔は友達の前では見せないほうがいいよ。

心配させるだけだから。

何気ない表情とっているつもりだろうけど、

顔が固まっててバレバレだった。

今日、受付と一緒にやったのが友達でない私で
 ちょうどよかったのかもね。

昔あなたに何があったなんて聞く気はないし、聞く権利もないからね。

友達に甘えるなら同情引くような顔して甘えればいいし、隠したいならもつとうまい演技をしてね。

今日みたいな中途半端なのが一番悪いと思うわ。

明日はみんなで片付けだけど、

もうみんなの前で今日みたいな顔はやめてね。

それじゃ、また明日。

は
お
り

~~~~~

敷島さんだ…！

頬がカーッと火照るのがわかった。罵声や嫌みなら大抵耐えられるわただしだけれど、こんなふうに気を遣ってもらうことには抵抗がない。

でも、思いつきり見透かされていたんだ。

何かの本に「嫌がらせを受けても平気な顔をして無視していれば



向こうもやる気をなくしてしまう」って書いてあったからそれを実践していたつもりだったのに。

駄目じゃん、わたし。中学の頃からずっと恥をさらしてきただけ？  
ますます昔を思い出すのが嫌になったけれど、でも。

逆に言えば今のわたしは凄く幸せなのかもしれない。どうしてみんな優しいんだろう。不思議。

わたしが恋を思い出せたもう一つの理由は、クラスメートや美術部の皆が、わたしの「嫌われないだろうか」という不安を忘れさせてくれる人達だったからだと思う。

心を閉ざすことに憧れていた。

何を馬鹿なこと言ってるんだ、と思われるかもしれない。

でも、そうだった。

友達がいなかったら心を閉ざしたフリをすることができる。

おしゃべりする必要がないから。

でも本当は心を閉ざすことができるのは強い人だけなんだ。

わたしは誰からも話し掛けられたくないと思う一方で誰かが話し掛けてくれるのを待っていたのだ。

憧れていたのは心を閉ざした後のことだった。わたしが今まで読んできたマンガの中にもしばしば心を閉ざしている女の子が登場した。

彼女の心の扉が開かれる過程を見るのが心地よかった。

その役を果たすのは、その子がサブヒロインなら主人公の女の子で、その子が主人公ならカッコいい男の子であるというのが定石だった。

その人に。

……向かい合うことが出来なかったその人に、わたしは心の中で「さよなら」と呟いた。

### 第十三話・私はヒロイン（後書き）

第1話の前書きで述べたように、本作は以前にも公開していましたが、それは今話（の途中）まででした。次からは新規で書いていくので文体が変わっているかも知れません。違和感があるかもしれません。ご了承ください。

## 第十四話・W Ⅱ 0

「ね、静香ちゃん、さっき青野くんにVサイン出してたでしょ？」  
昼休み、わたし達はいつものメンバーで机を囲んでお弁当を食べ  
ていた。

「やだ、和美ちゃんてば見てたの？」

「見てたも何も、わたしの席、青野くんの後ろだし」

さつき——四時間目の数学の時間、静香ちゃんは音羽先生に指名  
されて黒板で問題を解いた時に「よく予習をしているようだな」と  
褒められたのだ。その後戻ってくる時に、青野くんに向かってこっ  
そりとVサインを出していたのだ。

青野くんの表情は真後ろのわたしの席からは見えなかったけれど、  
こくりと小さく頷いたのはわかった。

見ていて、いいなあ、なんて思ってしまうやりとりだった。

「この間たまたま青野くんに教えてもらったところと同じ解き方の  
問題だったんだもん」

「暑いねえ」

「うん、暑い暑い」

「何よう」

静香ちゃんは口を尖らせつつも目は笑っている。

わたし達がキャキャと騒いでいると、関根さん、と呼ばれた  
気がしてわたしは顔を上げた。美術部の小林さんがいた。

「あ、小林さん、何？」

「話、盛り上がってるところゴメン。……あ、いい？ 今日文化  
祭の共同製作の打ち合わせをするから放課後必ずクラブに出てきて  
ね、ってそれを言いに来たの」

「うん。分かった」

少し前からわたし達美術部員は共同製作のテーマを考えておくよ  
うにと言われていたので、わたしも一つ案を練っていた。

「そっか、文科系クラブの人はもう文化祭の準備始まるんだ」と、珠美ちゃんがつぶやいた。

小林さんは、じゃあまた後で、と言うと軽く手を振って教室を出て行った。

「美術部は文化祭何をするの？」と紀子ちゃんが聞いてきた。

「うん。個人個人では今まで美術部で作ってきた作品から自選したものを出して、それからまた別に部員全員での共同製作を展示する予定。……ああ、それから生徒会と協力して校門のところに掲げるゲート作りのお手伝いもあるなあ」

「結構いろいろなやんなきゃいけないのね」

「うん、まあね」

「あ、そう言えば、去年の文化祭、先輩に連れてもらったとき美術部の展示見た覚えある」と珠美ちゃん。

「そうなの？　去年はペーパークラフトでラピュタみたいな天空都市を作ったって聞いているけど」

「うん。そうそう。覚えてる。すごく綺麗に出来た」

「んー、じゃあ今年のわたし達はプレッシャーだなあ」

そう言っただけは冗談めかして笑ったけれど、自分の考えてきたテーマがありきたりでつまらないものではないかと不安になってきた。

「頑張っ。当日は遊びに行くからね」

「わたしも」

「わたしも行くよ」

「うん、みんな来て。頑張るからっ」

「今年は何をやるの？」

「だから、それを今日決めるんだけどね」

と、わたしは質問をした珠美ちゃんに苦笑い。

「あ、そっか」

「たまぷー、話、何も聞いてないじゃん……」

「うー」

紀子ちゃんの揶揄にプチ逆ギレしてほっぺを膨らます珠美ちゃん。その顔を見ていたら、わたしの不安も少し晴れた。

かつてわたしは文化祭が嫌いだった。

皆で協力しあって一つのことを成し遂げようとする空気の中、わたしは自分が孤立した存在だということ思い知らされてしまうのが嫌だった。

でも、今ならきつと大丈夫……のはず。

「そう言えばさ、美術部に嘴本薫くんいるでしょ？」  
「んっ!？」

急に紀子ちゃんに彼の名前を出されてわたしは一瞬ごはんを喉に詰まらせてしまった。あわててお茶を飲んで流し込む。二、三度咳払いをして「うん、いるよ」と答えた。

「その人って本当に凄いんだねえ。日曜に本屋さんに行ったとき画集が置いてあるの見かけたよ」

「ああ、そう言えばそうだった」

今思い出したようなフリをしたけれど、実はわたしも既にシヨツピングモールの本屋で彼の画集を見ていた。

気の無さそうな返事をしたのはわたしがミィハーだと思われたくないから、というささやかな見栄だった。

『新世紀の天才少年芸術家 ” 嘴本薫 ” 待望の画集』

などと書かれたポップスタンドがわざわざ積まれた画集の上に立てられていたけれど、考えてみれば嘴本くんはこの出身でもあるし、大きく取り上げて宣伝しているのは当然なのだろう。

「ねえ、和美ちゃん。やっぱり、凄い？ その人実際間近で見て」「ああ、うん、凄いよお。わたしも影響かなり受けていると思う」

あ……こうやって彼のことを人に話すのって何だか気持ちいい。こうしてみると、美術部以外の人に比べてわたしははるかに嘴本くんに近い位置にいるんだな、と実感できる。それはもう、素直に嬉しい。

「でもやっぱり美術作品って画集で見るより生<sup>なま</sup>で見たほうが全然いいよ」

とわたしは言葉が続ける。ちょっと得意げになってしまったかもしれない。

わたしは本屋で画集を手にとったとき、裏表紙の値段を見て購入をあきらめた。それよりも美術室で彼の作品を見ているほうがずっと為になると思った。

「そう？」

「ほら、例えば生徒玄関とこにある記念館の絵も凄いでしょ」

「あ、そうだね。あれも嘴本くんの絵だったっけ」

「あれを写真にして本に収めたものを見ても……インパクト弱いでしょ」

「んー、まあね」

「わたし、今でも絵描いてて行き詰ったらあの絵見てインスピレーションもらうんだ」

「へええ」

……と。なんかちょっと口が軽くなったけど、これぐらいならわたしの気持ちはバレないよね？

「あー、和美ちゃん、やっぱり芸術家タイプなんだな」

「え？ 何それ？」

「わたしらのように普通に……っていうか芸術の道を歩いてない人にとっては、いい作品を見ても『きれいだな』と思うだけだもん。」

そこからさらに進むのってやっぱり芸術家オーラのなせるわざだよ」

「芸術家オーラって」

そう言いつつ、わたしの胸はドキドキしていた。

そっか、他人の絵で創作意欲を掻き立てられるって、それほど平凡なことでもないんだ。それは逆に言うところ『特別』ってことで。

「そう言えば、風間くんも……」と珠美ちゃんがつぶやいた。

「ん？」

「うん、風間くんもあの記念館の絵をじーっと見てたなあ、って思

い出したの。何か思い入れでもあるみたいに。風間くんもモデルや  
ってるし、そういうセンスある人同士っていうのは通じるものがある  
のかもね」

「ああ、風間くんか。彼ならそういうこともありそうだね」

「改めて思ったけどうちの学校って凄くない？ 嘴本くんとか風間  
くんとかさ、有名人が寄り集まってるし」

「そういえば商業（高校）行ってる私の友達もうちをうらやましが  
ってたなあ。カッコいい男の子が多いって」

そうして話題は違う方向にズレていったけど、わたしの胸はしば  
らく鼓動が早まったままだった。

放課後になり、美術室は部員が入ってくるたびに少しずつ賑やか  
になっていった。

部員が全員そろったところで文化祭についての会議が始められる  
ので、それまでわたし達は雑談して過ごす。

「何か考えてきた？」

「うん、一応ね」

「どんなの？」

「会議になったらすぐわかるよ」

「そう言えば嘴本くん、遅いねえ」

気が付くと、まだ美術室に来ていない部員は嘴本くんだけになっ  
ていた。

「学校には来てるの？」

「来てるよ。今日のこと伝えにみんなのところに戻ったもん」

すると『噂をすれば影がさす』のことわざ通り、美術室のドアが  
横にスライドして当の彼が顔を現した。

「あっ、薫サマっ！」

「おー、嘴本。すぐ会議始めるぞ！」

部員の皆の呼びかけに嘴本くんは笑顔をつくって応えたのだけれ  
ど……何だろう、わたしがその表情を見た途端、胸に鈍痛を覚えた。

今の表情、何て言うか——うん、うまく表現できないな。笑顔は笑顔でも、その中に痛みが含まれていたような気がしたのだけだ。

他のみんなは何とも思わなかったのだろうか。それともわたしの気のせいかもしれない。笑顔でいることが多い彼だけにあの顔は瞬間的なものであっても印象に残ったのだけだ……。

会議は牧瀬さんが適当な順番で部員ひとりひとりを指名しそれぞれのアイデアを述べさせ、それを星見さんがノートに書いていくという運びで始まった。

わたしは文化祭の季節である「秋」をモチーフにした作品はどうでしょうか、と意見を述べた。

「秋、か。秋といっても漠然としているな」

「えーと、例えば『古き良き日本の秋』です。この国の原風景を再現するというテーマで。紅葉とか、田舎の家屋とか」

「うん、なるほどな」

みんなも横の人と顔を見合わせて何か囁きあったり、頷いたりしている。その表情から、わたしはハズした提案をしたのではないと判りホッとした。

嘴本くんはどう思ったのだろうか、と、それが知りたくてわたしは目を合わせないようにさりげなく彼の方を見ようとした。

——と、その時。

「部長さん」

嘴本くんが手を上げてそう言葉を発したのと彼に視線を合わせたのが同時だったのでわたしはギクリとした。わたしの提案に何か言われてしまうのだろうか。彼の表情も心なしか渋めだ。嘴本くんに否定されるのは嫌だな。

そう言えば嘴本くんは会議が始まってからだんまりのままだった。「共同製作には、ボクも参加しなければいけないのでしょうか？」

……え？



とりあえず彼の発言はわたしの提案とは関係ないみたいだ。だ  
ど嘴本くんはそれ以上の問題発言をした。

彼の語調が一瞬収まりかけたわたしの胸を再びざわつかせていく。

「どうした、嘴本？ 何か都合の悪い事でもあるのか？」

「共同製作は当然、美術部の作品として発表するのでしょうか？」

「もちろんそうだが？ ……わからないな。何を言いたい？」

「だったらボクはその共同製作から外して欲しいのですよ」

「何？ ということだ？」

牧瀬さんは眉をしかめて嘴本くんに尋ねる。それはわたしも聞きた  
いたいことだ。

「ボクが芸術作品を作るときは常に完全を求め全力を尽くします。

いい加減な作業は一切したくないのですよ」

「それは誰だって同じことだろ」

「ボクが共同製作に関わるということはその作品に完全を求めると  
いうことです。そうしたらボクは容赦なく他の人が作った部分でも  
切り捨てなければいけないことだってあるでしょう」

嘴本くんの言いたいことが何となく判ってきた。

この半年、彼の美術部員としての活動を見てきたけれど彼は自信  
家でありながら誰より自分に厳しい人なのだ。幾度も同じところを  
修正しては、納得いかず荒く小さなため息をついたりする場面は何  
度も目の当たりにしている。

その一方、彼は他人の作品に対しては褒め言葉しか言わない。と  
いうのは彼がお世辞好きだからなのではなくて美しくないものに対  
してはコメントをしようとしただけなのだ。彼の無意識の処世術  
なのかもしれない。もし彼が本気で他の人の作品にダメ出しを始め  
たら美術部の活動に支障をきたす事は明らかだ。

美術室に嫌な空気が立ち込めはじめた。嘴本くんの顔を見るのが  
怖かったけれど目を逸らすことはできなかった。

彼が作品に集中しているときの真剣な顔もちょっと怖さを感じる  
けど、それは嫌な感情ではなくてむしろ「好き」という気持ちに転

じることのできる怖さだ。でも、今の顔は正視していたくない種類の怖い顔だった。

「嘴本だから言える台詞だな」

星見先輩がぱたり、とシャープペンシルをノートの上に置いた。その表情もまるで嘴本くんのが伝染<sup>うつ</sup>ったみたいに怖くてわたしは小さく身を竦ませた。臆病なわたしは自分の身体がカチカチに硬くなってしまうのを感じた。

「だからボクの参加は個人製作のものだけにしてくれないでしょうか」

「待て、嘴本。この共同製作は美術部全員でやることに意味があるんだ。基本的に個人作業が中心の美術部だが、文化祭というイベントを通じて力を合わせて物事をなすという意味もあるんだ。嘴本も美術部の一員なら、」

「元々ボクは招かれただけで、自主的に美術部に来たわけではありません」

あっ…！

どうして嘴本くん、そういう言い方しちゃうかなあ。

胸の中に小さな氷が突き刺さったような気持ちになった。

たぶん、嘴本くんは自分勝手なのだと思う。でも、もう嘴本くんのことを好きになってしまったわたしはそんな彼の言い分も納得できしてしまう。孤高であるからこそ今の天才芸術家である彼がいるのだから。

「きっかけはどうあれ今お前が美術部員であることには変わらない」

「……美術部員であるということが枷になるのなら、ボクはその肩書きを捨てます」

悲鳴のようにええっ、という声が立ち上がった。わたしも声には出さなかったけれど心の中で全く同じに叫んだ。

「もともとこの美術部に刺激を与えるためにと呼ばれたボクです。もう、そろそろボクがいなくても美術部に問題はないでしょう」

待って。薫くん。私は、まだ、あなたの力が必要です。

「気に入らないことがあると辞めるのか。そりゃ、あまりにもいい加減な態度じゃないか」

「何と言われようとこれはボクの信念に関わる問題です。妥協して芸術作品に携わることなどボクにはできない」

そう言って彼は机に手をつけて立ち上がった。

「嘴本！」

呼びかけを無視して彼は速足で美術室を出て行こうとする。

その、一瞬。私は今までの人生の中で一番勇気を出した。

「待って！」

後で考えてみれば、私は運がよかった。私は会議で端っこの、美術室の入り口に一番近いところに座っていたから、物理的な障害がなかったのだ。

私は嘴本くんの前に身体を滑り込ませるように通せんぼをする。

「ね、嘴本くん、待って。もうちょつと話し合おう、ね？」

震える声。

それにつられるように、セナちゃん、続いて敷島さんや小林さんも立ち上がって助太刀するように同じような言葉を嘴本くん呼びかけた。協力者がいたことの安堵に加えて、卑しい嫉妬心がちよつぴりだけ沸く。

嘴本くんは黙って私の顔を見た。そして私の肩に何気ない様子で手を乗せる。

「関根君、退いてくれないか？」

語調は穏やかだったけれど、その声と彼の目つきは私をすくみあげらせるほどに冷たかった。操られているかのように私は嘴本くんの前を退いた。気圧された、という表現がぴったりだった。

嘴本くんはそのまま美術室を出て行った。私は渾身の勇気が無駄になり――その場にへたりこんだ。

「いや」とセナちゃんが叫んだ。その声もどこか遠くに聞こえていた。

## 第十五話・「好き」

セナちゃんから、一緒に帰ろう、と声を掛けられた。まだ胸がドキドキしていたけれど、彼女がとても切実な顔をしていたので、私はそれを承諾した。

私自身、とても弱い人間なので、無意識に私の中のセンサーは弱っている人を捉えてしまう。そういう自分の性格はちょっと嫌い。でもセナちゃんを元氣付けてあげたいと思うのは正直な気持ちだった。そしてそうすることで自分の気持ちも整理したいと思っていた。このまま彼がいなくなってしまうのは嫌だ。でも、臆病で口下手な私が、どうやって彼を説得できるというのか。会議の時のあれが精一杯。もう、彼のあの冷たい瞳を覚えてしまった私には、起動エンジンンを温めることも出来そうになかった。

「薫サマ、怖かったね」

と、校門を出たところでセナちゃんは呟いた。既に赤みがかかった太陽光が彼女の髪と唇を輝かせていた。残暑は厳しいが、日没の間は日々早くなっている。

小柄でぽっちゃりしたセナちゃんが落ち込んでいる様子は保護欲を掻き立てられる。ピュアな笑顔を見せることの多い彼女にとって、彼の負の感情は厳しかったのだろう。

「男の人って怒ったとき本当に怖いよね」

「うん」

嘴本くんが美術室を出た時、何人かが彼を追い掛けようとしたけれど星見さんの一喝で会議が続けられることになった。星見さんは普段は穏やかな人なので突然大きな声を出されたときには更なるショックで抵抗する力も失われてしまった。女の人に怒られたときでも胸にズキッとくるけど、男の人の場合、それに加えて肉体的な危険も感じてしまうから余計に怖い。他のみんなも同じように感じたせいか、続けられた会議はそれまでと一転して物凄く暗い雰囲気にな

なってしまった。

「和美ちゃん」

「ん？」

「和美ちゃんは薫サマのこと、好き？」

「……えっ、えっ、ええっ!？」

セナちゃんは自分の事を話すかと思っていたのに不意打ちで私の事を訊かれ、声が上ずってしまう。顔の血管がぶわっと拡がったのが分かる。

「セナは、薫サマのことが好き」

「え、あ、うん」

改めて言うことでもないと思ったけれど。

そんな私の気持ちが表情に出たのか、それを見たセナちゃんは首を横に振った。

「ううん。和美ちゃんの思っている『好き』じゃなくて、薫サマのファンとしての『好き』じゃなくて、セナが薫サマの唯一の人になりたいっていう『好き』なの」

セナちゃんは一応わたしの恋敵になるはずなんだけど、彼女に対しては敵愾心と云うものが持てなかった。情熱を言葉にできる彼女が羨ましかった。

「ホントはね、みんなでキャーキャー言っているだけじゃ不満なの。二人になりたいって思うことがよくあるの。だから前に羽織ちゃんが薫サマに嫌われたと聞いたとき、心の中ではこっそり喜んでいたんだよ。汚いでしょ。セナって」

「それは」

そう思ってしまうのは仕方無いことだと思う。

「誰だって好きな人を独占したいと思うよ。セナちゃんは何も汚くなんてないよ？」

「……もっかい訊くけど、和美ちゃんは薫サマのこと、好き？」

どうしよう。正直に言うべきか。心臓が縮み上がる。でも、セナちゃんが本音を語ってくれたのに、こちらが黙っているというのも

フェアじゃない気がする。

——ええい、彼のことを好きだっていう女の子は既にたくさんいるじゃない！

「うん、好き」

——これでもう、引き返せなくなった。

心臓が縮み上がったせいで、その圧力で勢いを増した血流がドドーッと顔を中心に全身を駆け巡る。誰かを好きだと他人に言うことは、こんなにも緊張を強いられるものなのか。

しんどい。

「好きだよ。でもセナちゃん、お願い。誰にも言わないで。そういうことで他の人からあれこれ言われるのは嫌なの」

「うん、分かってるよお。そんな、触れ回るような酷い事しないよ」  
セナちゃんは小さく笑った。ごめんね。私の嫌な思い出のせいで、セナちゃんを信頼していないみたいな言い方をして。

「でもね、最近そうじゃないかって薄々感じてたんだ」

「そ、そうなの？」

「うん。和美ちゃんの薫サマを見つめる目がね」

——また私の気持ちはバレバレだったのか。

「会議のとき……和美ちゃんが羨ましかった。オロオロしてる私と違って、真っ先に薫サマを止めようとしたでしょ？」

「あれは……」

羨ましがられるような事じゃない。

「どうして私が、和美ちゃんのように出来なかったんだろう、って、自分かもしかかったよ」

——それはたまたま、私がテーブルの端っこにいたから。

「でも、嘴本くんを少しも止めることが出来なくて、全然意味が無かったけどね」

「……薫サマ、もう美術部に来ないのかな」

「あんな風に言っちゃったら……」

言いかけて、駄目だ駄目だと自分を叱咤する。気休めでもいい。

私は自分にも聞かせるために言い直す。

「でも、嘴本くんだって感情的になって言ったことだと思うから、落ち着いたら戻ってきてくれるかもしれない」

「うん……そうかな。うん、私も、気持ちが落ち着いたら、薫サマを説得してみる！」

その表情は、憧れるほどに純粹で、自分とセナちゃんの立場も忘れて応援したくなるくらいだった。

駅へ続く道のところでセナちゃんと挨拶をして別れる。付き合ってくれてありがとう、とお礼を言われた。わざわざ遠回りしてまで私と話をしたかったのは何故だろう。内容もほとんど無く、似たような話を上辺だけ変えて繰り返すだけ。

でも何故か私も話ができてお礼を言いたい気分だった。暖かかったから。

帰りの電車に乗り込んで車体が外に出ると、空が日没直後の色に変わっていた。

いつぞやの彼の言葉を思い出す。

『明日からもっと楽しくなるよ』

『このボクも美術部に正式に入部することに決めたからね。間近でボクとボクの作品に触れ合えるよ』

まるで予言のようだった。私は彼の作品に触れて感性を刺激したと思うようになった。

彼の近くに居たいと思うようになった。

だから、あなたがいなくなると、楽しくなくなります。

窓の向こうに市立美術館の屋根が見えた。文化祭の後で、部の皆で美術館に行く予定があったんだった。

だから、あなたがいなくなると、楽しくなくなります。

差し込む夕日が熱い。どうして目の下に集中して差し込んでくるんだろう。

好き、と、窓に向かってかすれ声で呟き、セナちゃんに言った、  
独り言ではない意味ある言葉を思い出す。その時の胸の高鳴りと熱  
さだけが今の私の救いだった。



## 第十六話・魔法の言葉

「お帰り」

帰宅した私をそう迎えて、台所に向かい、鍋のコンロを点火したのはお父さんだった。

「あれ？ お母さんは？」

よもぎだ

「蓬田さんのところ。この前言ってただろう？」

「ああ、あれ、今日だったっけ」

何日か前に聞いていたが、日付は忘れていた。蓬田さんというのは、お母さんの大学時代の親友で、アメリカで服飾デザインの会社の社長さんをしている。その人が帰国するので久しぶりに会いに行くという話だった。

「早く着替えてこい。晩飯にしよう。腹が減ってるんだ」

「先に食べててよかったのに」

「一人で食事は寂しいんだよ」

私が部活で遅くなるときは、先に二人で食べているくせに。でもそんな寂しがりのお父さんに、今は優しくしたい気分だ。

お父さんと蓬田さんは仲が悪い。かつて、蓬田さんが会社を興すときに、お母さんにも声を掛けたのだけれど、お母さんはお父さんと一緒にいることを選んだのだ。そのことで、お父さんはいろいろと蓬田さんから言われたらしい。この件に関しては、私は全面的にお父さんの味方だ。

お父さんの作る食事は、まずくはないけど美味しくもない普通の味。私の涙はもう乾いていたけれど、胸にまだ少し溜まっていて、美味しい食事も美味しくなくなってしまっただったから不満はなかった。

「お父さん、冷蔵庫にビール入っているけれど一杯いく？」

と、お母さんの真似事してみると、お父さんは、ほう、と嬉しそうな顔をした。うん、家の中でなら私もこれくらいできる。

その晩はえっちくさい夢を見た。そこでの私は驚くほど饒舌で、思うことを整然と言葉に変換できていた。

あなたにそばに居て欲しい、私にはあなたが必要だから。そんな意味のことを伝えたように思う。

「ボクも好きだよ」

と答えられたとき、夢でなければいいのと思ったせいで目が覚めた。

ずずうん、という擬音がお腹から全方向へと走る。私は生理が重い方ではないけれど、昨日のことがその部分にのし掛かっているようだ。それでも頭の方はむしろ冴え冴えとしていて、いつもよりも早い時間に家を出た。

夢の中で言えた台詞は、反復しようとしても、もう思い出せない。淀みなく言えたことは覚えていて。恥ずかしい台詞だったことも覚えていて。だからそれは、私に都合よく、嘴本くんが私に好意を抱いている場合の会話だったのだ。さすがは夢。無意味な思考のリピートをしているうちに学校に着いた。

自分の教室に向かうとき、廊下から通りすがりざまに嘴本くんのクラスを覗く。彼はいつものようにクラスメートの女子たちと談笑していた。その空気は私の苦手とするもので、そのまま私は通り過ぎた。

一時間目が終わると、私はトイレに行くついでに、彼の教室を覗いた。彼はいつものようにクラスメートの女子たちと談笑している。や、今はトイレに行くところで別に話しかけるわけじゃないから別にいいけど。

二時間目が終わると、特に用事はないけれど、気晴らしのために教室を出て、彼の教室をそっと覗いた。彼はいつものようにクラスメートの女子と談笑していた。二時間目は退屈な授業だったから、いろいろ考えることができたけど、まだまとまらないので話かけられない。だからまだいいや。うん。

三時間目が終わったときも、特に用事はないけれど、やっぱり気晴らしのフリをして教室を出て、彼の教室をそっと覗いた。彼はクラスメートの女子たちと談笑していた。いつも通りに。

……おなががキリキリする。こんなときに女の身体を疎ましく思う。じれったい。彼にどういう言葉を掛けようかと頭の中でシミュレートを始める度に、痛みが走って邪魔をする。しばらく忘れていた重みだった。

それに引きかえ、どうして彼はいつも通りのように振る舞えるのだろう。彼にとって、退部宣言とは、大したことではないのかもしれない。それもそれで私にはつらい。それにしてもどうしていつも女の子に囲まれているのか。

「和美ちゃん、どうしたの？」

昼休みになると、珠美ちゃんに心配されてしまった。

「今日の和美ちゃん、なんかソワソワしてる」

「……別に、どうしたわけでもないよ」

「そう？」

どうもしないけれど、昼食が終わったら、彼の様子を見に行くときは不審がられないようにしよう。そう思っていたら、セナちゃんが教室にやってきて、一緒に行こうと誘ってきた。感謝、感激。

だけど胸をドキドキさせて行った彼の教室では「やあ」だなんて、拍子抜けするくらい軽く挨拶されてしまった。

「どうしたんだい？ 二人とも」

……信じられない。

私たちは彼の座る席の机の前に立つ。

「ね、薫サマ、昨日のことだけど」

セナちゃんが口火を切る。

「美術部、辞めたりしないで。戻ってきて、ね？」

くっ、とこぶしを固めるセナちゃんにそう言われたのに、嘴本くんはまるで初めてそのことに気づいたかのように、ああ、と声を漏らした。

「そんなことを言うためにわざわざやってきたのかい？」

「薫サマが辞めちゃったら、美術部が寂しくなっちゃうよ」

嘴本くんは表情を崩さず両手の指先を胸の前で軽く合わせる。無意識に取ったポーズみたいだ。

「辞める辞めないは大した問題じゃあないよ。ボクはどこに居ようとボクだからね。ボクに会いたいならこうやっていつでもボクのクラスに來ればいいさ。歓迎するよ」

そう言って微笑む天才少年芸術家。ええい、いちいち美しいヒトだ。

でもね、どこへ行っても自分が変わらない、なんて、言うのは簡単だけど、それはとても難しいことだと思うよ。だって私は、桑学に來たから、美術部に入ったから、あなたに会えたから、自分のことを、そんなに嫌わないでいられるもの。地元の高校に行ったら、どうなってたか。

「でも、あんなケンカ別れしたまま辞めるなんて後味悪いよ。嫌だよ」

セナちゃん。こうやって気持ちをハッキリ言葉にできる力をうらやましく思う。

「ケンカじゃないよ。星見さんは美術部の副部長として職務を果たしただけさ。ボクは受け入れられないから美術部を離れる。それだけだよ」

「それじゃ、今、嘴本くんが描きかけてる絵、どうするの？」

そうだ、彼は今、水彩画を描いている途中なのだ。

「ボクのアトリエで描き続けるさ。もちろん」

「じゃ、じゃあ、その絵、返さないもん！」

えっ!?

「辞めないって言うなら隠しちゃうもん！　そしたら薫サマ、困るよね？」

「ちよっと、セナちゃん、それは」

今まで黙っていたけれど、私は思わず彼女にツツコミを入れる。嘴本くんの方を見ると、眉根をひそめ、そして苦笑いした。

「それは……困ったね」

「でしょ、でしょ！？　描きかけのままじゃ、気持ち悪いもんね？」

……。

ふと。私は中学時代、描きかけのまま美術室に放置した絵のことを思い出した。葛名くんにまつわる苦い記憶を思い出さないようにしていたら、いつのまにか今の今まですっかり忘れていた。あの絵、今どうなっているんだろう。

「困った……けれど、共同製作はやっぱりダメだ」

「え」

その彼の声に人間くさい陰りがあって、私はゾクリと怯えると同じ時にちよっと安心してしまった。

「ならばボクのこの身が覚えている範囲であの絵を最初から描き直すよ。ボクの判断が気に入らないのなら、あの絵を隠すなり処分するなり好きにしていよいよ」

「そんなつもりで言ったんじゃないよう」

泣きそうな声に、私は助け船を出さなきゃいけないと自分をせき立てる。が、うまい言葉が思いつかない。でも、何か言わなきゃ。

「ねえ、嘴本くん。美術部にいることが嘴本くんにとってメリットにならないことは分かってる。だからこれは、ただのお願い。だけど、聞いて」

と、息を吸い込んだとき、他ならぬ嘴本くん自身に出鼻をくじかれる。

「悪いけど」

キリキリッ。

「ボクは午後から打ち合わせで早退するんだ。そろそろ解放してくれないか」

冷たい流体が、胸を通り抜けて、おなかの痛みに追い打ちをかける。聞く前から拒絶された。私が拒絶された。違う。ただ、嘴本くんは本当に忙しかったから。でもセナちゃんの説得は聞いたのに私は全部拒絶された。違う！ 打ち合わせ、打ち合わせってなんだろう。デザインの仕事の打ち合わせかな。仕事だよ。私を避けるために都合がよかったから仕事という口実を使った。脆弱な私の心が悲鳴を上げる。

そんな私の表情を見ているのかいないのか。嘴本くんは立ち上がって鞆をつかみ、じゃあね、と言って教室を出ていった。

魔法の言葉、なんて無い。

私がよく読む漫画での世界では、主人公の女の子が、好きな男の子の苦しみを、何気ない、それでいて思いやりにあふれた言葉で癒してあげて、それを機に親密になる展開なんてのがある。

だけど私には、そんなステキな魔法の言葉なんて思いつかない。意味ある文にして口から発することができない。

午後の授業も、もう必要のないのに彼を説得する方法をウジウジと考えていた。

それでも放課後はやってきて、部活の時間になる。美術部の活動は強制ではないから、体調もよくないし休んでもよかったのだけど、文化祭も控えているし、なんとなく出ようと思った。共同製作は、この桑苑学園高校のある諫谷市いさやの過去と現在ということになった。この地域は、ここ数年再開発が進んでいて、高校生ぐらいの人でも変化が明瞭だそうなのだ。地元の間人ではない私は過去の姿に馴染みがないので「現在」のパートを担当ということになった。

作業中の絵を取りに行った美術準備室で、水彩紙が貼られた嘴本

くんの描きかけのパネルを目にした。秋の花々が盛られたカゴの絵で、塗りの途中だ。彼にしては珍しくゆっくりした作業かもしれない。

美術室のほうで物音がした。私は絵から目を逸らし、自分の作業の準備を再開した。

夕日も沈みかけた頃、私は道具をしまいだした。自宅が遠い私は皆より先に帰ることになる。今はまだ余裕があるからいいけど、共同製作の詰めになるところで早く帰らなきゃいけないことになる、罪悪感が襲うだろうなと今からモヤモヤした。

帰りに、元気回復のために、もう一度美術準備室の彼の絵を見た。ちよつと失礼してパネルを抱え、間近で見つめる。

バランスのよい配置に、迷いのない塗り。未完成ながらもこの時点で既にオーラが漂っている。なのに、これを放棄してしまえるなんて、なんて――なんて怖い人なんだろう。

やっぱり嫌だな。もっともっと、彼から学ばせて欲しい。ううん、ホントのホントのところでは、学ばなくていい。顔を上げれば、すぐそこにいてくれる。それだけでいい。

ぼたり、と。……って、しまった！

こぼれた雫に水彩絵の具が滲み、サーツと全身の血の気が引く。パネルを床に下ろし、ポケットに手をやって、ティッシュを探したが手に当たった感触はハンカチの布地だけだった。いいや、嘴本くん程の人の絵ならケチってられない。上から当てて水分を吸い取る。でも、滲んだところは取り返せない。どうしよう。

「好きにしていっていいと言ったけれど」

ヒヤッ！！

その声に私は肩がすくみ上がった。反射的に振り返ってその声の主を確認をするが、その一瞬で後悔する。どうして、何で？ 早退したんじゃないかったの！？

「本当にするとは思わなかったよ」

「嘴本くんっ、こ、これはっ。違う、違うの。ご、ごめんなさいっ」

アーメン。



## 第十七話・刻む日

いつも、会話の輪の外側で、おとなしく聞いているだけだった。自分の意見は決して言わない。ただ求められたときだけ声を出す。そうやって自分を守ってきた。会話の輪を壊すのは、怖い。貧相なげっ歯類を観察するかのような目が怖い。

でも、そんなこと言ってられない。

「嘴本くんっ」

美術準備室で背を向けられた次の日、登校した私は、鞆を自分の教室に置くと、もう一つ持ってきたバッグを持って嘴本くんの教室に向かった。彼は相変わらず女の子に囲まれていたけれど、私の声のせいでその輪に乱れが生じた。

「ん？」

嘴本くんの目と、彼を取り囲む女の子たちの目。耐えろ、私。高校に入るまでは、大抵こんなもんだったじゃないか。

……ただ声を掛けるだけで血の巡りが早くなるのは私くらいのものだろう。

「あのっ、昨日のあの絵のことだけど」

私は持ってきたパネルバッグを軽く持ち上げて見せた。その大きさから彼も中身を察したようだ。

「その絵はもういい、って言ったよね？」

彼の語気に、ぐっ、と胸が痛む。

私は傷つける側の人間には絶対なりたくないと思っていたのに……嘴本くんを傷つけた。その絵を。心を。

同じ美術部の部員として僅かでも彼の気持ちにプラスなのは嬉しかった。それで満足していたのに。満足していたからこそ、マインスは嫌。ほんの少しでも嫌。つらい。

「見てっ！ 見てくださいっ」

大きく息を吸って。

「昨日のことは本当に悪かったと思ってる。だから、私なりに精一杯直しました」

緊張して、ですます調とだである調が混在する。

ファスナーを開き、バッグからキャンバスを取り出しかけたとき、彼の眉間に皺が寄った。ちよつと待って、と動きを止められる。

「関根くん。今は彼女たちと話してるから、そのバッグだけ受け取っておく。絵は後でゆっくり見せてもらおう」

私に対する非好意的な視線に気づく。また彼に拒否された。でも、受け取ってはもらえる。これでもよしとすべきか。私は、ん、言っ  
て頭を下げ、その場を離れた。

昨日、嘴本くんは午後の用事を済ませると、学校に戻ってきて美術準備室の自分の絵を持って帰るつもりだったようだ。そこで私がそれを持ってゴソゴソやっているとところに遭遇したというわけである。

あの時の嘴本くんの目。忘れられない。怖くって、目をつぶっても消えなくて。逃れられなかった。否、逃れてはいけなかった。

彼は私の謝罪の言葉にも背を向け、そのまま帰ってしまったので、その絵を持ち帰ったのは私になった。

自宅に帰った私は修正作業のために、家にあった痛み止めの錠剤を飲み（普段あまり薬に頼るのはよくないと思ってるけど）、頑張  
って夜更かしした。そんなに時間を掛けたのは、修正するだけでな  
く独断で余計なこともしたからだ。

冷静になって絵を見直せば、水張りもしていて、絵の具も乾いて  
いたのだから、滲みなんて些細なものだった。でもそこが焦点では  
ない。

描いている途中の絵に、勝手に手を入れられた時の気持ちは私が  
身をもって実感している。場合によっては殺意すら沸く。これは嘴  
本くんだって誰だって同じだ。上手い下手は関係ない。

寝不足で頭は痛かったけど、心臓はばくばくと激しい鼓動を打って、授業を受ける私を眠らせなかった。

そして彼が私の教室にやってきたのは放課後だった。彼は有名人なのでクラスメートの視線が多めに集まる。

手には彼の鞆に加えて私のパネルバッグも提げていて、私の胸が引き締められた。

「ああ、関根くん、これから美術部に行くのかい？」

「え、う、うん。そのつもりだけど」

……ここで嘴本くんにバッグをそのまま突き返されたらそこでおしまいだ。

「じゃあ、その予定を変更して放課後はボクに付き合ってくれ」「え？」

ナニを言ってるんだろう。想定外の彼の言葉に、私の身体は固まり、思考も止まった。

「それじゃ、付いてきて。ほら」

私が付いていくのが当然だとばかりに歩き出す彼。私は慌ててその後を追う。親切にも珠美ちゃんが私に鞆を渡してくれたのにお礼もそこそこになってしまった。

廊下を悠々と進んでいく彼。付いていく私。

「あ、あの、どこに、行くの？」

「ちょっと見てもらいたい場所があるんだ。学校から歩いて10分ぐらいのところだよ」

「外なの!？」

彼はマイペースな足並みで歩いていくため、私はペースを上げなければいけなかった。昇降口で靴を履き替えるときだけは少し待ってくれた。

「ね、嘴本くん、どこへ行くのか教えて」

「歩いてすぐだから、言うまでもないよ。付いてきて。ただ、付いてくる間、周りの景色をよく見ておいて欲しい」

彼の表情は静かで、怒りは浮かんでいないようだったが好意的なものだとも言い切れなかった。

彼は芸術に厳しい人とはいえ、鬼じゃないのだからひたすら謝れば許してもらえただろうとは思う。でもそれでは、私が許されてそれで終わりだ。だから私はある意味賭けと言える行為に出た。もしそれで彼の怒りを煽りたてていたなら――状況は変わらないけど私がより嫌われるだけだ。

彼の歩く道は途中まで私の通学路と同じだった。駅までもう少しといったところで別の道に入っていく。その道はやがて踏み切りに至った。ちょうど黄色い電車が通過するところで、通り過ぎたところで彼は踏み切りを渡り、私を振り返った。

「ここで……いいかな」

「ここ？」

首を左右に向けたり、遠くを眺めてみたものの、そこに目を惹くものは特に何も無いように思えた。ここは商店街の入り口で、錆びた看板に剥がれかけた赤いペンキで仲町商店街と書かれたアーチが道路の上に架かっており、新旧入り乱れた様々な店舗がその道の両脇に並んでいた。私の自宅がある古い商店街に雰囲気似ていない。ただ人通りは少ない。

「関根くん、ここまでの景色で何を感じた？ 踏み切りを渡る前と渡った後ではどう差異がある？」

「えー、ええっと」

彼の意図を量りかねて、答えに詰まる。

「感じたままに」

「う……ん、踏み切りを境界線にして、あっちとこっちで結構雰囲気が変わったな、って思う。こっちは、ちょっと古い感じ。昭和っぽい」

なんて、昭和を知らないくせにそんなことを言う私。お父さんとお母さんの影響だ。

「そう。諫谷市の再開発対象外の地域だからね。関根くんは地元の

人間じゃないから、その辺の事情はあまり知らないと思うけど」

「うん……」

「今年の文化祭のテーマがそれだったね。諫谷市の今昔」

「え、知ってたの？」

「昼、星見さんに聞いたんだよ」

星見さんと嘴本くんの声を荒げた言い合いを思い出す。今にも殴りかからんとする勢いだったのに、普通に話せたのだろうか。というか、何故嘴本君は尋ねたのだろうか。

「ボクが幼稚園に入るより前は、線路の向こうもこちら側と同じよ  
うな、いや、もっと閑散としていた記憶がある。だから諫谷市の過  
去を描きたいと思えばこの辺りの景色で記憶を喚起させることもで  
きるだろう」

当たり前のことだけど、彼にも幼少期がある。さすがの彼も、そ  
の頃は今の私より絵が下手だっただろう。少し不思議。

「キミはどちらを描きたいと思った？ 現在と過去とで」

「あ、私は『現在』を描くと割り振られて、」

「ああ」

彼は苦笑いして手を横に振った。

「今何をしているかじゃなくて、どちらを描きたいか、だよ」

私は即答せず考える。もし、過去と答えたら、描きたくないもの  
を描いているのかと言われるのかもしれない。尤も、彼が訊きたい  
のはそんなことではないのかもしれない。

「描きたいか、というか、もし誰かが描いたら見てみたいのは『過  
去』……こっち、のほうかも」

と、言いつつ、彼の機嫌を伺うような目つきをしてしまった。情  
けない。

「うん、キミのように地元出身ではない子の声を聞いてみたかった  
んだ。ボクや美術部の他の人はみんなこの辺りで育ったから、思い  
出で美化されている可能性が極めて高いからね」

「そう……」

だとしたら、私も思い出補正が入ってしまったかもしれない。

「それで、キミがこちら側を選んだ理由は何だい？」

「ん……」

私はまだ、それを巧く言語としてまとめられなかったが、新開発されている地よりされていない地のほうが、整頓されていないがゆえの美しさがあるというニュアンスのことを答えた。汚れた建物には経てきた時間が含まれ、様式の異なる建物が秩序立たず並んでいるのにはカオティックな魅力を感じる。

「それじゃ、向こう側、ボクらの高校がある地域には美を感じないかい？」

そんなことはない、と私は答えた。中学3年のとき、受験で桑学に來たときから、ここなら気分を一新してやり直せる、と感じたものだ。調和を考えて作られた駅前広場とそこから延びていく道、そしてそれらを挟む建物は、本来の機能を損なうことなく美しくそこに在った。

前に、美術部部長の牧瀬さんが、将来そんなランドスケープデザインに携わる仕事に就くために進学すると聞いたことがある。その時はなんとなく聞き流していたが、今こうして自分が口にするために思い出してみると、それはとても重要な仕事であると実感する。

「それじゃあ、あの駅前広場を実際に作った人たちに、美を作ろう、という意志はあったかな？」

「え？」

……なんとなく、彼が言わんとする事が見えてきた気がする。

「それは……無いんじゃないかな」

「そう、彼らは設計図に従った仕事をしただけだ。仕事に要求されるのは正確さと丁寧さであって、現場の人が自らの美意識に従って勝手なことをしてしまつては調和も秩序もない『作品』になつてしまう」

「……芸術と仕事とは違うね、うん」

でも、嘴本くんは自分の作品を既にお金にしているけれど、その

へんはどう考えているんだろう。そんなことをふと思ったけれど、話の腰を折りたくなかったのでその疑問は口にしなかった。

「キミもこれまで、展覧会などで小学校や中学校、高校の美術部の共同製作作品を観てきたことがあるはずだ」

「うん」

「ボクは昔からそれらが大嫌いだった」と、眉根を寄せる彼。

私は目で、どうして、と問うようにして続きを促す。

「一人ですべきことを何故わざわざ多人数に分けてやらなければいけないのか、とね。キミは嫌な気持ちになったことは無いのかい？」

「……嫌、なんてことはなかった、よ？」

また、機嫌を伺うような態度をとってしまう私。

「みんなで作っただけのことはある大作を見て、感動したこともあるし」

「大作、空間占有という意味で大きな作品ということならばそれはその通りだろう」

多分に嫌悪感を含んだ声に、ギョツとする。ここは大人しく同意しておけばよかったのだろうか。でも、自分の意に反する答えは絶対ボロが出るからしたくない。

「そこに創作性はあるのか、芸術性はあるのか。最初に設計図をひいた人にはあっただろう。でも、ただノルマを果たすことには何の喜びがある？」

「ま、待って」

畳み掛けるような彼に気圧されそうになり、私は大きめの声を出して遮る。

「私にとっては、少なくとも私にとっては、共同で作業すること自体が、楽しいことだから」

そういう形でないと、他人との繋がりを持つ喜びを得られない人だっているんだよ？

「ノルマだから仕方なくやるんじゃないくて、その範囲内で自分が出るだけの表現をすることも合作の面白いところだ、と、思う」

「だからキミはあの一輪のクロッカスを描いたんだね」

「!!」

ついに彼の口からその花の名がこぼれ、息をつく間もなく、カーツ、と顔に血が上った。

「ただボクの絵を直すだけだったら、ここまで描き込んだりしないよね」

手に持っている私のパネルバッグに手を触れて微笑む彼。ドドツ、と心臓の鼓動のテンポがアップする。

解って、もらえた！

彼の描いた花の束に添えた、クロッカスの花。彼とは技量に大きな差があったから、必死になって描いた一輪。

「ボクが使おうとした色とは違っていたけれど、青系統はキミの得意な色だったね。いい自己主張だった」

「あ……」

「あれで少し、合作の可能性を試してみたくなったよ。だから星見さんにそう言って参加させてもらうことにした」

「あ、あ……」

まずい。何か最近、涙腺が弱くなりすぎてる。

「それから」

まだ何かあるの!?

「この絵を、ボクに返してくれないか。キミにとっては何度目かの合作、でもボクにとっては記念すべき初めての合作。是非完成させたいんだ」

あ、決壊。

「わああああん」

一瞬にして溢れだした涙が視界をゼロにする。拭いても拭いても無くならない。そのせいで、私は目の前の彼がどういう動きをしているか、全く気づけなかった。



「あ、う……！」

後頭部に触れられた。そして彼の胸とその手の間に頭を挟まれた。あの日から伸ばしていた髪がクシャリと押さえつけられる。

「そんなに、気を張ってたのかい」

嘴本くんにはわからないかもしれない。ずうっと、天才って呼ばれて来た人だから。溢れる才能をもって多くの人を虜にしてきた人だから。

でも私は、生まれて初めて、自分の絵で人を動かすことが出来たんだもん。そしてその人が他ならぬ貴方なんだもん。

「落ち着くまで泣けばいいよ」

女の子を抱き寄せるのに何の戸惑いもない。

きっと、こんなこと何度もしてきたんでしょ？

でもいい。それでもいい、私にはこんなこと、二度と無いかもしれないんだから。今だけは、こうしていて欲しい。

クロッカスの花言葉……いいや、もうそんなこと。

髪を撫でられてるだけなのに、ポンプを押されてるかのように私の目からは水が止まらなかった。

## 第十八話・ステップ

「落ち着いた？」

「ん。ごめんね」

私は彼の顔を見上げ、息をついた。嵐のような感情も、泣いたおかげでやがて凧となる。涼しい風が涙を乾かした。けれど体がポカポカと温かくなっている。

身体を離して分かる、彼の残した温もり。もし私が彼の特別な人ならば、もっと甘えてもいいような体勢だ、と益体もないことを思った。

「それじゃ、これはどうしようか」

「え？」

「この絵をボクのアトリエに持って帰りたいけれど、キミのバッグは返さなきゃいけない」

「そんな、返すのなんていつでもいいよ」

「そうかい？ それじゃ、明日、部室で返すよ」

「うん」

明日も、部室に行けば彼がいる。

「えっと、嘴本くんのアトリエ、って？ 家じゃないの？」

身体が暖まって、口の滑りが容易になっていたためか、聞き逃せなかった言葉を聞き返す。

「ああ、何年か前に、ボクが作ったものが家からあふれそうになったから、この近くにボクのアトリエを建ててもらったんだ」

建ててもらった、って……いや、そうしてもらえただけの才能を持った彼だけれど、やっぱり彼の家はお金持ちなのだろうか。王子様っぽい扱いをされていると思っていたが実際王子様というのに近いヒトなのかもしれない。

すごいね、と彼に言いながら、そのアトリエを見たいという願望が沸き起こる。もし、さっき、パネルバッグをすぐ返してほしいと

言ったら、アトリエまで行けたのだろうか。

うん。欲張っちゃダメだ。私の絵が彼に認められたこと、美術部に留まって共同製作に参加してくれたことだけでも充分だ。

私は彼と別れる。踏切のところから線路の奥を覗けば駅が見えるけれど、彼に道の心配をしてもらったのが嬉しかった。

ここ最近、いろいろなことが立て続けにありすぎて、私の感情は波が立ちっぱなしだった。人前でぼろぼろ泣いてばかりで、恥ずかしいったらありやしない。でもこれで一段落して、穏やかな日々になるだろう。美術部で共同製作を続けていれば、彼と自然に言葉を交わせる機会も多いだろうし。

お願い、私の運命を司っている誰か。もう少し私にゆっくり恋させて。

その日はもう、電車の中で気持ちの反芻だけをして帰宅した。

お母さんが、おかえり、と迎えた。

「仲直りはできたみたいね」

「え？」

「いい顔してる」

「あ、うん」

そうだ、昨日はお母さんが帰ってきてたのに、彼の絵のことで頭がいっぱいで、おかえりも言わず自分の部屋に籠もってしまったのだった。心配して部屋まで声を掛けてきてくれたのに、切羽詰まっていた私はおざなりな説明だけをして、態度が悪かったと後悔する。それでも私の心配をしてくれたお母さんに感謝する。

「なんとかなった。ありがとう」

でも彼に軽く抱きよせてもらったことを思い出すと、恥ずかしくて、悪いことをしてきたみたいで、笑顔に後ろめたさが混じった。でもそんな気持ちを味わうこともまた心地よかった。

「電話が来てたわよ。柚木さん、って子から」

タマちゃんだ。

部屋に戻って鞆を置いてから、キッチンと居間の境界に置かれた電話から彼女に折り返しの電話をした。キッチンではお母さんが食事の支度をして、居間では店（床屋）の仕事を終えたお父さんが新聞を読んでいた。

珠美ちゃんは、放課後の教室でのやりとりを見て、何があったのか気になって電話してきたそうだ。私は珠美ちゃんに、お母さんに対してしたものと同じ説明をしようとする。でも、お母さんには同じ美術部の人の絵を汚してしまったとしか言っていないけれど、珠美ちゃんには反対に嘴本くんとのことだと知られている。両親に内容を聞かれるのが恥ずかしくて、彼の名前を出さないよう意識しながら説明した。携帯電話が欲しくなった。

美術室に行けば彼に会える。

放課後のH・R・は音羽先生から掃除をサボっていたクラスメイトに対する注意と叱責があったので遅くなってしまった。はやる気持ちも、先生の注意のせいで萎え、廊下を走る気にはなれず、静かに歩いて美術室へ向かった。

入り口のスライドドアの窓から中が見えた。男子の制服の背中が二つ、美術部の男子は二人。よかった。

中に入るとセナちゃんがトテトテと私に近づいてきた。

「和美ちゃん、薫サマ、美術部に戻ってくれたよ。よかったねえ」

「うん、よかった」

笑んで頷く。セナちゃんの笑顔が見られて嬉しい気持ちと、ささやかな優越感が気分を高揚させた。ごめんね。

彼と先輩は机に大きな西洋紙を置いて、メモや図を書きながら共同製作についての打ち合わせをしていた。怖いぐらいの表情だったけれど、それは真剣さの現れで、むしろ格好いい。

挨拶をすると、二人は同時に振り返って挨拶を返した。

「関根くん、あれは美術準備室に」

「うん」

何気なく言葉を交わせる。そんなに胸にさざ波が立たない。帰ってきたんだ。

美術準備室に入ると私のパネルバッグはすぐ見つかった。手に取ろうとすると、そのファスナーが大きく開かれていることに気づいた。

嘴本くんってズボラな人だったっけ？

変だな、と思いながらファスナーを閉じようとして私は異物に気づいた。

あれ？ 何だろう？

パネルバッグの黒い裏地の中の白い紙片を取り出す。前にもこんなことがあったっけ。

——次の日曜日、あの絵を完成させたいから、僕のアトリエに来て立ち会って欲しい。

……………えっ？ えっ？ えええっ！？

どうやら、運命の神様はまだ私を翻弄するつもりらしい。

## 第十九話・現実にするための理想

「おーい、関根、会議やるから来い」

「あ、はい」

牧瀬さんと呼ばれ、私はメモをパネルバッグの中に押し込んでフアスナーを閉じた。あせってクシヤツと折り目をつけてしまい、しまったと思った。

再び行われた会議で、共同製作の役割分担が再編成される。作業を分担するにしても、同じものを多人数で分断するのではなく、意味のある作業単位に分けて、部員が得意なものを選択していく。薫くんの意見を採り入れた形になったようだ。私は作業に取りかかる前だったので特に影響はない。

それはそれとして、私は会議中、ずっと別のことを心配して気を揉んでいた。

私服に自信ない。

笑わば笑え。

薫くんから、彼のアトリエにお呼ばれされて浮かれたのもつかの間、津波のように私を飲み込んでいるのはそんな不安だった。

彼に私服を晒したことは……合宿のときにあるけれど、あの時は特に意識していた訳ではなかったから。

私には縁のないこと、と自分に言い訳して、己を綺麗にすることを怠ってきた。醜い自分に注目されないようにと、目立たない色の服を選びそれに隠れて生きてきた。皮肉にも陰口で呼ばれていた、ネズミ、のように。

以前、たまたま入ったブティックで、偶然プロのファッションデザイナーから声をかけられたことがある。その人——有田先生からおしゃれに気をつかうようにと言われて、その人のWEBサイトを

覗いたことがある。おしゃれコーナーが充実していたが、実践しているのは普段の心がけや身体の手入れといったもので、流行の服装を、となると私の脳はキュッと閉じてしまう。

華やかな服に身を包んだ私を想像するだけで、自分がバカな子みたいで鳥肌が立つ。可愛い服装だからこそ、自分の可愛くなさが引き立ってしまう。嫌だ、やめて、脱ぎたい。可愛くないと分かっている、そちらの服のほうが落ち着けてしまう。

着る想像に耐え得る服の中で、一番可愛いのが……桑学の制服。ダメだああ……。

制服で嘴本くんに会いに行ったら、ものすごく軽蔑されそうな気がする。第一私自身がそれを許さない。なんて難儀な性格なんだ、私は。

助けて。誰か私に似合う服を見つけて。

タマちゃんの顔が思い浮かぶが、今サッカー部は地区大会で一番忙しい時期なのだ。今度の日曜日までの放課後に服選びに付き合ってもらえる余裕も見込みもない。というか私だって文化祭前にそんな私用で美術部の活動をおろそかにする訳にはいかない。家に帰ってからダンスを漁ってみよう、と、いったん自分を落ち着けようとするが、今度は頭の中のダンスが荒らされる。そんないい服あっただろうか。ズンタカズンタカ。

……心が迷うときは、とりあえず差し迫った義務を果たすのが一番だ。私は共同製作の担当分を開始した。

夕食を終えてお母さんとお父さんが下の階でTVを視ている頃、私は秋用（春用）の服を部屋に並べていた。

私の部屋には小さな鏡しかないのです、これと思ったたら着てみてからお母さんたちの寝室に行って全身を映す。

どうやら私は自分を過剰に卑下してしまっていたようで、鏡に映る私の姿は頭の中でイメージしていたもの程酷くはなかった。買うときに最低一度は袖を通して選んだものだから当然と言えば当然で

はある。

最終候補は、アイボリーの地に黒の柄が入ったスモックブラウスとグレーのワイドパンツ。やっぱりネズミっぽいけど、仕方がない。どうせネズミなら今の自分で出来る範囲で可愛いネズミになろう。よし、と拳を胸の前で握ったところで、お母さんが階段を上がってくる音が聞こえ、私は忍者の歩法で自室へと戻った。

腕を動かすとき、ちよつと脇のところが引つかかる感じがする。

1年前に買ったものだから、その時から太った……というか、うん、最近下を向いたときの視界が狭くなっている、そういうことだ。

ひと安心すると、今度は時間を早く進めたくなった。次の不安が見つからないように。

絵を描くときに、頭の中で想定していたものどおりに筆が走るとスーッとした嬉しさがこころを走るように、私自身の容姿がそうありたいと、願う。

だけど逆風は吹いて欲しくない時にこそ吹くものだ。曇天で始まった土曜日。

ノートに文字を書くときの紙の違和感、そして、ブラシを入れるときの髪の毛の違和感。湿度が高い。うねうね。

「お母さん、助けて」

「何？」

「髪が、爆ぜてる」

私は自分の髪を手で梳いて見せる。

髪を伸ばしたのは自分が決めたことだけれど、雨のときは、泣きたくなる。家が床屋だったのは不幸中の幸いだったというべきか。夜になって雨の音が外から聞こえてきた頃、とうとう許容範囲を超えた。

「うん？ そんな、気にする程の跳ね方じゃないわよ」

「お母さんは気にしなくても、私は気になる」



少し感情的になって子供みたいに苛立った語気になってしまった。

「明日どこかお出かけするの？」

一瞬息が止まり、うん、と弱く頷き上目づかいをする。

「……ん、じゃあ、お風呂入って、お店の方に来なさい。準備しておくから」

私がお母さんに髪を切ってもらうときは、お客さんのようにお店でやってもらっている。うちの店は男の人やちっちゃい子が主なのだが、ある程度の道具はあるはずだ。

小さい頃から癖毛で悩んでいた私は、お母さんから髪を短くされていた。それが当然のことと思っていたが、いつの頃からかそれに不満を持つようになっていた。男の子に間違われそうになるとか、そんな単純な理由ではなく、もっと……。

お風呂から上がった私は濡れ髪をバスタオルで拭くと、私は一部だけ照明のついたお店へと足を向けた。その途中で居間にいるお父さんと目が合い、いいよ、と告げた。我が家ではお母さん、私、お父さんの順にお風呂に入るのだが、それが普通というわけでもないこともある程度の年齢になってから知った。

「アイロン入れるから」

ヘアアイロンを手にしたお母さんが、私に鏡の前の椅子に座るよう促した。

「でも、若いうちから髪を傷めるようなことはあんまりして欲しくないのよ。和美はそのままでもいいのに」

胸の奥が軽く疼く。

「だからって、短いのは、もう、いや、だ」

語尾を発する声が小さくなる。お母さんに負の感情を向けることに罪悪感をおぼえる。

「そうね。私もいつまでも和美が小さいままのつもりでいたわね」  
ヘアアイロンの熱気がじつ、と頭皮を心地よく温める。髪の毛には神経が通っていないけれど、鏡に映るそれに、まっすぐになれと念を込める。

「ねえ、明日は、和美の大切な人に会いに行くの？」

「！」

お母さんが言い当てたのは初めてだ。当たり前だけど。体内から発した熱がヘアアイロンとは反対方向から顔と頭を温める。

「今日は時間もないし、和美も気が治まらないだろうから、こうしてるけど、これからデートする度にアイロン入れたりしてたらホントに髪を痛めちゃうわよ。縮毛矯正するにしたらって、時間もかかるし、高い薬品も使わなきゃいけないし」

縮毛矯正のことは前に何かの雑誌で読んだことがある。ストレートにすることは出来ても、髪が伸びてきたらその部分はまた改めてやらなきゃいけない。

「じゃあ、癖毛の人はあきらめなきゃいけないの？」

なんだろう、なんでお母さんにこんなに攻撃的な言い方をしてしまうのだろう。

「完全に治すことが出来ないから、むしろそれを魅力にしましょう」  
お母さんは私の肩に手を置いて優しくそう言う。

「だけど、そんなことは、」

結局ダメだったから短く切ってきたのだ。

「もちろん、口で言うほど簡単に出来ることではないわね。でも私だって結婚してから男の人の髪ばかりいじっているけれど、女の子を綺麗にしたいという願望がなくなったわけじゃないわ」

私が生まれる前にはファッションコーディネーターを目指していたらしいお母さん。お父さんがその話題を嫌がるのであまり詳しくは聞いてはいないけど。

「和美の、綺麗になりたい、っていう気持ち、最近よく感じる。だから私も協力は惜しまないわよ」

「……」

熱が、伝わってきた。

次の日の朝。目を覚ました時には雨は止んでいた。真っ先に鏡を

見て髪をチェックする。ホッとする。でも、まだだ、まだ。待ち合わせ場所の駅前まで行って彼の反応を見るまでは。

本当、恋をしている女の子って凄い。こんな気持ちを何度も何度も抱えてきて、それを抱えることに吝かでないのだから。

決めておいた服に着替えて家を出る。行きの電車の中で、彼とあの絵の前に並んで立つことを想像する。願わくはこの想像通りに美しくありますように。

## 第二十話・謎のライダー登場

矛盾してるね。

あなたのせいで、1秒前まで悩んでいたのに、あなたを目にしたその瞬間、そんな悩みが霧散する。

彼が私を見て微笑んでいる。こらえきれず、私の方から彼の方へ踏み出してしまう。2、3歩で、はしゃぎすぎと思われないようにストップ。頭の帽子を軽く押さえて胸のドキドキも抑える。

雨上がりの駅前には、ほんのりとアスファルトの匂いがした。

こんにちは、と普段しない挨拶の言葉を交わす。それだけで新鮮な気持ちだった。

白い襟シャツにダークなパープルのズボンなんてのは街を歩くそこらへんの男の子と変わらないファッションかと思いきや、よく見れば、肩のところに切れ目があったり襟が大きく開いたりして肌の露出が多かったりする。

TVに出演する男性アイドルが着るような、一言で言えば恥ずかしいファッションなんだけど、凄く似合ってる。私とは正反対のコンセプトの目立つ格好で、それを着こなしているところが彼の怖いところだ。

彼は、タクシー乗り場を指さして乗るかと尋ねたけれど、私はアトリエまで歩いて何分かかるの、と訊いて、それじゃあ歩こう、と言った。別に何分であろうと同じ答えをするつもりだった。

「美術部でも絵を描くし、そのアトリエでも絵を描くし、嘴本くんは本当に芸術漬けの日々ね」

歩きながら、彼の顔を斜め上に見上げる。

「絵を描くだけが芸術じゃないよ」

と、訂正されたけど、別に気を悪くした様子はなく。

「何かを作りたいという気持ちは時と場所を選ばないからね。重宝しているよ。気分がのついているときは土曜から日曜にかけてずっとアトリエで過ごすこともあるかな」

「わあ」

そこまで一心不乱になった状態を維持するのは、わたしも憧れるところである。

「アトリエ、ってどれぐらいの広さなの？」

と質問したところで、彼は私に立てた手の平を見せて遮った。そして反対側の手でフィンランドの国旗みたいな色合いの携帯電話を取り出して耳に当てた。

「何、パパ？」

わお。

私の聞き間違いでなければ、今、パパ、って言ったよこのヒト。

いや別に悪くは無いけどびっくり。瞬時に頭の中にダンディな口ひげのナイスミドルが思い浮かんでしまった。謎。

「今アトリエに向かって歩いているところだよ？　もうすぐ着くところだけど。……ん……え、いや……」

携帯電話を耳に当てたままキョロキョロする彼。

「わかったよ、パパ。気をつける」

そして電子音。

「どうしたの？」

「うん、悪いけど、今日の予定を変えなければならぬかもしれないかもしれない」

「えっ、どうして？」

疑問と同時にキュツと痛みが胸を襲う。イヤな予感がするのは私が悲観的だからだろうか。

「うん、アトリエにね……」

そのときだった。薫くんの名前を呼ぶ女性の声がして、アスファルトの道路をパンプスで小走りに駆けるカツカツという音が近づいてくるのが聞こえた。

その音が、何故かとても不安を煽った。

私は、あっ、と声を上げる。それは知っている人だった。

「あら、和美ちゃんじゃないの」

「蓬田さん……！」

ダークグレーのスーツに身を固め、長い髪を頭の上でまとめた40歳くらいの眼鏡の美人さん。お母さんの大学時代からの友達だった。アメリカで会社を興しているのだけれどちょっと前、日本に一時的に戻ってきている。

今薫くんが受けた電話の内容はこの人のことなのだろうか。

「偶然ね、和美ちゃん。よかったわ。嘴本薫さんのガールフレンドだったのね」

「……」

よかったわ、って何だろう。

その声に、笑顔に、胸の中が黒いもやもやに襲われる。

そう、以前、この人と話したとき、巧みに誘導されて、お父さんの悪口を言う羽目になったことを覚えてる。あの時はもの凄く後悔して泣きたくなった。

お父さんの嫌いなところは幾つもある。だけどそれは、お父さん本人か、お母さんかおじいちゃんの前でだけ言えるようなことで、家族でない人に明かすようなことではない。

こんなときでなければ、ガールフレンドなんて言われて浮かれちゃうところなのに。

「薫さん、この前のお話、条件を変えて提案させてもらいたいのだけれど、どうかしら、お話聞いて頂戴」

仕事の話だ……！

蓬田さんは、服飾デザインの会社の社長である。そして薫くんは、そういう仕事を実際にやっている。

薫くんの顔を見上げると、私と同じように顔をしかめていたのでなんとなくホッとして、嬉しかった。

「すみません、その話は父を通してくれますか」

あ、ちゃんと『父』って言った。なんて、どうでもいいか。

「お父さんではなくて、薫さんがどうしたいかを直接聞きたいのよ。これは薫さん自身の問題だからね。そうでしょう？ 契約に関しては法律があるから、保護者の同意を得なければいけないけれど、実際に決めるのは薫くん、あなたなのよ。まずは話を聞いてちょうだい。いい条件か悪い条件か、薫さんが見ないことにはお話にならないわ」

「ですから……」

いつもは自信満々に喋っている薫くんなのに、今は彼らしくもなく困っている。だけど、仕事の話は私が口を挟めるような立場ではない。

「ほら、和美ちゃんも、薫さんに言ってあげて。これは彼にとって才能を活かすまたとないチャンスなのよ」

「え、私は……」

頭の悪い私には、薫くんを助けられる詭弁が思いつかない。どうしよう。

その時だった。

ブオン、という大きなバイクのエンジン音が聞こえ、私は身体をすくめた。何、と思つてそちらを見ると、排気量の多そうなバイクがかなりのスピードでこちらに向かってきている！？

小さく悲鳴を上げて固まってしまった私を引っ張ったのは薫くんだった。道の脇によけると、耳障りな大きなブレーキ音を立てて、私たちと蓬田さんの間を遮るようにバイクが停まる。黒いヘルメットとライダースーツに身を包んだ背の高い男の人が乗っていた。

胸がドキドキして判断能力がおいつかない状態で、乗り主がバイクから降りてヘルメットを取る。驚いたことに、予想に反して、それは髪の毛がまっ白な皺の多いおじさんだった。

「困るな、勝手なことをしては」

「嘴本さん！ 危ないじゃないですか！」

「薫！ 今のうちに逃げろ！」

「あ、ちょっと！」

展開を頭の中で処理できないまま、私は急に手を掴まれる。

「行くよ」

それを了承する間もなく彼は走り出した。その力が強くて痛みが走る。

「わ、痛い、かお……」

私は仕方なく合わせて走り出す。彼は通りがかったタクシーに向かって手を挙げた。

後ろから何か言っている声が聞こえたがよく聞こえなかった。彼も完全に無視している。

停まったタクシーに飛び込むように乗り込んだ。薫くんは逡巡する表情を見せた後、運転手さんに市立美術館まで、と告げた。タクシーが走り出してようやく私は一息つく。

「痛かったかい？ ごめんよ」

なんて、彼にさっきまで掴まれていたところを撫でられて、頭が酸素欠乏症になりかける。

「う、うん大丈夫」

と、自分の方から腕を引いてしまう。もったいない。

「さっきのバイクの人……」

「ああ、ボクのパパだよ」

「ええっ、お父さん？」

似ていない。それに、年齢もお父さんというには少し離れすぎている気がする。

「そうだよ」

顔が似ていない、と言うのは失礼な気がしたので年齢のことについてだけ尋ねてみる。すると、彼はお父さんが50歳のときに生まれた子供だそうなのだ。なるほど。でも、それにしては……。

「随分、ワイルドなお父さんなんだね」

そう言うとは彼は声を出して笑った。

「そうだね、ボクがお金が発生する仕事に関わることになるパパ



は厳しくなるんだ。本当、感謝している」

笑い顔が優しいものになっている。

「仕事って、さっきの、あれ、何だったの？」

「ああ、トリハムの社長さんからね、会社の服飾デザイナーとして契約しないかって、誘われたんだ」

「そうなの！？」

トリハムというのは蓬田さんの会社の名前だ。

「キミがあの人と知り合いだとは思わなかった」

「知り合い、っていうか、お母さんの友達。でも私も知らなかった。蓬田さんと嘴本くんにそんな接点があるなんて。それって、そのう、有田先生のところからの引き抜き？」

私と同じ年で、そんな世界に足を踏み入れているというのにはやはり驚きだ。私なんか想像しただけでプレッシャーに押しつぶされそうになる。お父さんが心配して厳しくなるのは当然だと思う。

「そういうことになるのかな。ボクを買ってくれるのは嬉しいけどね。パパは許さないだろうと思う」

「えっ、嘴本くんは乗り気なの？」

「……ボクはね、ボクが紡ぎだした美をできるだけ多くの人達に見てもらって幸せになってほしいと思っているんだ」

「うん」

「だけど、パパはね、お金は心を惑わせるから、みだりにやりとりすべきではないと言うんだ」

でも……と私が言い掛けたところでタクシーが停まった。話をしているうちに美術館前に着いていた。

薫くんが代金を払うとき、チャッと財布の中が見えてしまった。お札がいっぱい。ううん、やっぱり私と金銭感覚が違うのかも、と思ってしまった。

「でも嘴本くん、ブティック・アリタで実際にお仕事してるでしょ？ 他にも画集だしてたり」

「うん、何年か前までは頼まれたことを全部引き受けてたけど、今はパパが雇ったエージェントが窓口を一本化しているよ。アリタとはそれ以前からのつきあいだから特別だね」

以前、桑学の玄関の絵で揉めたエージェントとかいう人がいたけどそれだろうか。

「ボク作品を買ってくれる人や、ボクにお金を払って作品を作ってほしいという人がいてくれるのは嬉しい。それだけボクの美が必要とされているということだから」

「……うん」

以前、私も芸術とお金について考えたことがあった。お金のために絵を描いたりするのは卑しいかと思った筈だけど、薫くんの言葉を聞いていると、そんなにかかしい事には聞こえない。単に私の考え方が浅かっただけかもしれない。

「でもボクは、お金があろうがなかろうが、やることは変わらないのに」

「うん……薫くんなら、そうだろうね」

「だけどパパには『お前が迷わなくとも他の人間の迷いまでも払うことは出来ない』と言われたんだ。つらいよ、目がくらんだ人間のために、ボクの作品を目にする幸せを得る人が減ってしまうのは。ボクに、人の心を清くする力があればいいのに」

それはとてつもなく難しいことだと思う。ダ・ヴィンチであろうとゴッホであろうと、その作品が高額で取り引きされて、犯罪を引き起こす元になっていたりする。ましてや薫くんは天才だけど、私と同じ年の少年だ。芸術などに目もくれず、欲望に利用しようとする人が出てきてもおかしくない。

美術館の窓口で彼は2枚の入場券を買った。タクシー代まで払ってもらっているのにさすがにそこまでは甘えられないと財布を出そうとしたが、彼から断られてしまった。

「キミとの約束を果たせなかったお詫びだよ」

「お詫びだなんて、あれは不可抗力だよ」

「でも、もう今日は何も描きたくない気分になってしまった。だから今日は、先人たちの作品を見て美を吸収しよう。それでいいかな？」

「う、うん、私は全然構わないよ」

そして、私は。

「嘴本くんの気分が向いたら、その時、また呼んで？」

言った。言っちゃった。

「そうだね、そうするよ」

彼は、私が振り絞ったことなど気にする素振りもなくそう返した。

## 第二十話・謎のライダー登場（後書き）

次回、美術館デートがもう少し続きます

## 第二十一話・醜さを愛する心

市立美術館に来るのは高校美術展以来だ。建物の構造は同じでも、特別展示の内容が変わっており、様相を異にしている。

この前話題にのぼっていた小川清明展は、もう開始されていた。その「小川清明」の名を見るだけでドキツとする。未だに薫くんに褒められた記憶を未だに反芻しているのだ。たはは。

でもこの展示は美術部全員で見に行くということになっていたのだ。薫くんにそう言って今日のコースから外してもらおう。常設展示は、諫谷市を中心とした地域を出身地とする芸術家たちの作品が並べられていた。

「関根君は、日菜巻重雄ひなまき しげおに興味があるのかい？」

壁のパネルに書かれた作品解説に目を走らせていると、薫くんから訊ねられた。

「ん、ごめん。ひなまきしげお、って今ここで初めて知った」

「そうか、日菜巻重雄は同期の小川清明と比べてあまり評価されることはなかったからね。多少なりとも認められたのは彼の死後だったようだ」

「そうなんだ」

薫くんはよく知っているようだ。同じ地元だから、その人に関するものに触れ易かったのかもしれない。とか言いつつ、私の近くの出身の芸術家と言ってパツと思いい出せる人がいない私が情けない。天賦の才能ばかりでなく、そういう勉強熱心さでも差が付いてるんだなあと思う。

「ボクらが生まれる前に亡くなった方だから、ボクはその人物像を彼の作品と彼に関する文章でしか推し量ることしかできないのだけれど、彼は迎合を酷く嫌う人物だったらしい」

そう言って薫くんは、日菜巻重雄の風景画を観るよう促した。海岸のある風景を描いた油絵だが、ひどく『熱い』と感じる。例えば薫くんの絵は基本的に『暖かい』感じを受けるが、この人の絵はそれを遙かに通り越した温度の高さを感じる。

「この河口の色……抽象的な意味の色じゃないよね」

「ああ、昭和三十年代から四十年代にかけて、日本の高度成長期に公害が問題視された時代の作品だ」

「工場の廃液なんかで海が汚された絵ね。文明批判を込めたのかな」

「いや、実は少し違うんだ。よく観てごらん」

彼に促されるままに絵を見直す

「この時代、作品に文明批判や社会批判を込めたアートパフォーマンスは数多く発表された。だけど彼はね、公害を肯定したんだ」

「……どういうこと？」

「彼は、公害もまた人間の行いであり、人間が前進するための過程として肯定したんだ」

「肯定……んん、でも、それは。ううん」

「もちろん、そんな意見を言って賛同を得られる筈もない。その意見が発表されて少なからず批判も受けた。幸か不幸か日菜巻重雄は著名人ではなかったから騒動も大したものにはならなかったらしいけどね。ボクの想像でしかないけれど、彼は批判行動が流行になったことに対する批判を筆に載せたのかもしれない」

「ん……この人がメジャーにならなかった理由は分かるような気がする」

人と同じことをするのが嫌で、わざと人と違うことをしたくなる気持ちには私にも解る。小学校低学年ぐらいの頃は、図工の時間、特に女子は友達同士で作品をまねっこすることが普通だった。そういうのが嫌だった私は違うものを描いて、結果先生に褒められた。

でもこの人は、その褒められることすら、他人と同じ感性になっ  
ているとみなしてアンチ的な行動をしたのかもしれない。

「ねえ、嘴本くん。嘴本くんは……もしも、自分の意志に沿わない

お仕事が来たら、どうするの？」

いい機会だと思って聞いてみる。

「うん？」

「作りたくないものを作ってくれ、みたいな」

「さあ、そんなことは無かったから分からないな」

「でも、もしも……」

言いかけて口をつぐむ。ちょっと意地悪な——気を悪くさせる質問だったかもしれない。だけど彼は微笑んだ。

「そうだね。ボクの作りたいものと相手が欲するものとのが重なり合うところを見つけようとするだろう」

うむむ。模範的回答。

「日菜巻重雄は、嘴本くんと同じような考えにはならなかったのかな」

「どうだろう。人の心の深いところまでは想像できないね。ただ、芸術家として、自分の満足のいかない仕事は残さなかっただろうとは思うよ」

「それでも公害をモチーフに扱ったのには『どんなものにも美しくなる瞬間がある』っていうことなのかな。ほら、前に嘴本くんに教えてもらったでしょ？」

「ああ、そのこと、覚えていたんだね」

覚えてますとも。忘れません。

「あの時薫くんに教えてもらったやり方、重宝してます」

けれど薫くんは苦笑いした。

「だけど、ボクのその考えと日菜巻重雄のそれとは違うよ。彼は醜さそのものを美だと言った。その考えは、正直なところ、ボクは理解しているとは言い難い」

口元は笑っているけれど、目つきが少し険しくなる。得意の分野で解らないことがあると口にしたせいかもしれない。そんな顔をさせた私を自己叱咤する。

「醜さと美しさが同じものならば……ボクらが存在する意味が無い。

そうだろう？」

「！」

当たり前のことだけど、彼に言われて改めてそうだと気づく。

「ボクらはなんのために芸術に触れ、作り上げていくのか」

「ごもつとも。……なんか、生意気なことを言っでごめんね」

「いいさ。ボクらはこうやって言葉や作品を交わし合うことで答えを探していくのだから」

「うん」

薫くんの言う「ボくら」というのは、私の願う「ボくら」とは違うけれど。あえて同じモノだと思いこむ。薫くん、愛しています。

それから私は薫くんの解説つきで美術展示を楽しませてもらった。その後、締めくくりに美術館のレストランに入って軽く食事を取る。その時に帽子を脱いだけれど、髪のことにもふれてもらえなかったのが残念だった。でも当たり前だ。私みたいなくせっ毛は、それを直してやっと普通なんだから。

そう、普通。これって普通のデートみたいじゃん。私みたいなのがそんなこと出来るなんて、ついこの間まで思ってもみなかった。私ができる話題と言え、文化祭に向けた美術部の共同製作のこと、クラス展示のことぐらいだったけれど、途切れることがないように必死で言葉を紡ぐ。彼との時間を独り占めしたいという強欲を、心の底から理解した。

「じゃあ、また、学校で、ね」

話題に困りかけたころには食事を終え、駅まで送ってもらう。寂しさというのは感じなかった。

「あの絵の完成会については、次にボクの都合が出来たらまた呼ぶよ」

「うん」



彼のほうから言ってくれたことに、安堵する。そして期待する。

「そう言えば関根くん」

「？」

「嘴本でも、薫でも、キミが呼びやすければ、どちらでもいいからね」

「えっ!？」

どういうことだろう。まさか無意識に、薫くん、って呼んでいたとか。顔に血が上って絶句する私を、彼は気づいてか否か、手を振って去っていった。

切りとられた入場券は、私の宝物。

これが、未来への過程になるのか、ただの結果になるのかは今の私にはわからない。

帰りの電車の中で私は今日の余韻を味わっていた。

## 第二十二話・自分のために頑張る

ほわほわとした気分の中で、私は今日の彼との会話を思い出しつつ、もっと上手い受け答えをすればよかったと悔やみながら歩いていた。悔やんでいたといっても、惨めな気持ちではない。また訪れる機会のときのための反省としてだ。

例えば、だ。ちっちゃい子が歩く練習をしているのを両親がビデオ撮影していたとする。子供にとって、一生懸命歩いているのに途中で転んでしまうのは、痛くて悲しくて恥ずかしいことだ。けれど、両親にとっては上手く歩けたことも上手く歩けなかったことも全てひっくるめて、愛おしい。彼の言った事はこれに近いのではないだろうか。

私の絵の歴史もそうだった。以前、押入れのスケッチブックをパラパラと見直していたら、その下手さが恥ずかしくて、その場で絵を手直ししてしまったことがある。でも今では後悔している。思い出のためにも、自戒するためにも、あれはそのまま残しておけばよかった。

薫くん。そう呼んでいいのかな。

ついさっきのことなのに夢のように遠い出来事のように感じる。彼との時間にうつとりとしていたけれど、でも彼に好かれるように精進していかなければならない、とも思う。もっと綺麗にならなくちゃいけない？ もっと美術的センスを磨かなければいけない？ 彼と肩を並べて歩くことが恥ずかしくないように。ほわほわと、ほわほわと、今の気分だから前向きに考えられる。

ああ、そう言えば、あの絵、どうなっただろう。

昔のことを思い出したせいだろうか。帰り道の途中の三叉路で、

中学校への道を示す色褪せた矢印のついた看板が目につくと、それを引き鉄に私の気持ちは中学の美術部へと飛んだ。あの日逃げ出して、描き掛けになったままのあの絵、どうなってしまっただろう。美術準備室におきっぱなしなのだろうか、捨てられてしまったのだろうか。

思いに釣られるようにその道を2、3歩歩み、そして足を止める。

だめだ、やめておこう。

すうっと胸を通り抜けた冷たい風におびえ、私は中学校に背を向けた。

今日ぐらいは、ほわほわした気持ちのままでいたい。  
嫌なことだらけの記憶はまだ蘇らせたくない。

ごめんね。

私の足は進路を戻し、自宅がある商店街へと向かった。タルカムパウダーの匂いを嗅覚の目印に、自宅へと戻る。

お父さんもお母さんも店で仕事なのでうちには誰もいなかった。けれど自室に戻って着替えて居間に下りていくと、お母さんが居た。お客さんが少なくなってくると、時々どちらかがこうやってうちで休憩するのだ。

「ねえ、和美」

お母さんが少し変な顔をしている。おかえりただいまを言い合った後で気づいた。

「うん？」

「今日、蓬田さんに会ったの？」

———ッ！

顔の温度が急変する。

「な、なんで？ 会った、けど……？」

「さっき……ちょっと前に電話が来たのよ」

「……」

「和美にモデルのアルバイトをしてみないかって」

何、それ……モデル？

「……い、いや、いやだ」

呼吸が乱れ、拒絶の意を声を発するのに数秒かかり、やっと出た声も震えた。こんな子供の駄々のような過敏な反応をする自分からわない。謎の不安感が私の心臓と肺臓をざわつかせた。

「どしたの、和美。何かあったの？」

私はぶんぶんと首を振る。

何だろう、何を怯えているんだろう、私。

今日、蓬田さんの前から逃げ出したのを責められると思ってるから？

薫くんとの予定を邪魔されて、蓬田さんを疎んだから？

蓬田さんを通じて、お母さんにまで薫くんと一緒にいたことを知られたような気になったから？

「だって、ほら、もうすぐ文化祭で美術部も忙しいからそんなことするヒマがないし」

咄嗟に出任せを言う。でも今日、薫くんと過ごしたことはそれと相反する。ああ、早くこの話題を打ち切りたい。

「……うん、分かった。それじゃ、私から断っておくわね」

「うん」

ホッとして少しは頭が回るようになる。もし私が直接蓬田さんに断ろうとしたら、きつと言いくるめられて承認してしまう羽目になりそうだから、そう言ってくれたのは安心した。

私みたいな貧相な身体でモデルなんてどう考えてもおかしいのに、そんなことお母さんだって分かっているはずなのに。今日久しぶりに私を一目見ただけの蓬田さんがそんな事を言ってきたことは、

きつと、薫くんに関係することなんだ。

ああそうか。私は、薫くん、蓬田さん側の人間と思われたいんだ。

私はぐるぐると全身をめぐる血流を鎮めるために部屋に戻り、ベッドに寝転がる。胸がざわつくときにはいつもベッドにお世話になる私だ。

せっかくの浮ついた気持ちはすっかりしぼんでしまっていて私は形のないものに八つ当たりする。今日一日くらいは彼との時間の余韻を楽しみたかった。目を閉じて、今日の彼の顔を思い浮かべて気持ちを再現しようと試みる。ごろごろしてたら1割くらいは再現できた。夕食は私の好きなものだったけど、どうせならほわほわした気持ちで食べたかった。

それでも一晩寝て起きたら、朝の眠気と前日の夢心地とを混同して、心も温め直される。月曜日がやってきて学校へ行けば彼に会えることに気づき、顔が緩む。近いうちに彼からまた呼ばれる。その日付を聞くのが楽しみになった。日付は英語でdate。だからどうしたって話だけど。

それからしばらくの間、私は急く気持ちに逆らえず、美術部で文化祭の準備をしながら、ついつい何度も彼の側を狙って行ったりきたりをしてしまった。間が悪くなりそうだったら文化祭の話題で適当に言葉を紡いでごまかす。そして彼からその日付を告げられてからは、私は今まで以上に作業に熱心になった。それというのも、その日付は文化祭前の最後の日曜日だったからだ。休日と言っても、自分の割り当てぶんの作業が遅れていたなら、その日も登校して間に

合わせなきやいけなくなる。そんな自分の怠惰で約束を反故に出来るわけがない。

だけど金曜日、牧瀬部長から声をかけられてしまった。

「関根、土日出てこられるか？」

「え、土日、ですか!？」

とっさに取り繕うことも出来ず、あからさまに嫌な顔をしてしまったことに自分でも気づいた。

「ああ、何か用事あるのか？」

「え、あの、その……」

「いや、実はな、最近敷島休んでいるだろう？　ちょっと製作が間に合わないかもしれないんだ」

「あ……」

確かに敷島さんはここ数日美術部に姿を見せていなかったが、気にしていなかった。

「関根は作業、余裕持って進めてきたみたいだからな、悪いけど、ちょっと埋め合わせを手伝って欲しかったんだが」

「……」

「いや、用事あるなら仕方が無い。家も遠いし」

「どっ、土曜なら、大丈夫です。日曜日は……すみません」

牧瀬さんの落胆する顔を見たくなくて、私はギリギリ出来る範囲まで手伝おうと思った。

「いや、謝ることはない。頑張っているお前がわりを食うのは理不尽だからな」

「すみません」

美術部のみんなが直前で頑張っているときに、私は自分のためだけの用事をしようとしていることにうしろめたさを感じてしまう。

薫くんはフリーダムな人だから気にしないだろうけど。

でもお願い。こればかりは、この機会だけは逃したくない。ごめんなさい。その代わり土曜日には2日分働きます。

**第二十二話・自分のために頑張る（後書き）**

次回、第二十三話「最悪の幸運」

## 第二十三話・最悪の幸運

薫くんのアトリエは、住宅街の中にぽつんとある何かのお店のような、白い外壁の2階建てのビルだった。それにしても、これを彼のための作業場として建ててしまうご両親も凄い。どんな仕事をしている方なのだろうか。65歳にしてバイクを乗り回す、彼のお父さんの姿を思い出した。がっしりした体型だけれど、顔つきは知的で学校の先生みたいだった。

「ようこそ、ボクのアトリエへ」

薫くんは入り口のドアを開けると、そのまま中には入らず、その場でドアを押さえて微笑みを浮かべ、優雅な仕草で私を招いた。そんなことをされるだけでドキドキとした。

「お、おじやます」

家——正確には家じゃないけど、そこから絵の具や粘土の匂いが混ざり合った空気が鼻孔に飛び込んでくる。私たちにはお馴染みの匂いだ。

彼の空間に入るのは、みねこ先輩の時よりもずっと緊張して、自分の装いがいつも以上に気になる。前回よりも考える時間があつたので、服装は今日のために選んで買ってきたものだ。白黒のストライプのシャツにモカのジャケットを羽織って黒のケミカルパンツ。帽子は前回と同じ。うん、恥ずかしい格好ではない筈だ。靴を脱いで足を踏み入れる。

玄関を入ってすぐの部屋は、作業場所ではないようだ。フローリングの床で、部屋の隅にはパソコンとバインダーが置かれた机がある。中央にはガラスのテーブルを挟んで二種類のソファが向かい合っていた。応接室みたいだ。テーブルの上に吸い殻の入った灰皿があつて一瞬ドキッとしたけれど、この間彼に抱き寄せてもらったとき、タバコの臭いはしなかったから、あれは薫くんのものじゃない。



彼のお父さんか、仕事関係の人のものだろう。

床は綺麗に掃除されていたが、数カ所絵の具の垂れた跡も見つかった。

「嘴本くんが実際に絵を描いているのはあっち？」

私は部屋の、机がある場所とは反対側の隅にあるドアを指さす。

「そっちは倉庫だよ。ボクの作業場所は上」

そう言って薫くんは天井を指さした。

「あ、2階なんだ」

彼は私に付いてくるように促し、奥のドアを開けた。美術品の匂いが途端に濃くなる。それを送り込んだ冷たい空気に一瞬息が止まった。

「わ、」

ドアの先の光景に少しばかり驚かされ、私は歓声を漏らす。クリム色の壁に、高い天井。この倉庫は、こちら側のような1階と2階を隔てる仕切がなく、ひとまとめの空間になっている。そしてその壁に大小幾多のキャンバスが掛けられ、それら以外にも部屋中に諸々の美術作品がもたれるように並んでいた。

「すごい……」

しばし見とれてぼうっとしていると、

「足下に気をつけて」

と注意される。

見ると、私たちの立っている場所は半畳ほどのカーペットが敷かれた床で、すぐ先はむき出しのコンクリートだった。そこは踏まれた絵の具の跡などで汚れていた。サンダルがすぐそこにあっただころを見ても、この倉庫は土足で立つ場所なのだろう。壁の一方ではシャッターが閉じている。

「さあ、こっちだよ」

その狭いカーペットの床から、こちら側の壁に沿って階段が上へ延びていた。その先は2階への入り口であろうドアになっている。階段を上りながら作品を見るのもまた雰囲気が変わって面白かった。

薫くんが2階のドアを開け、私をカオティックな暖色系に彩られた部屋へと通してくれる。ここが彼の作業場所なんだ。広さはうちのお店（床屋）と同じ18畳くらい、壁には作業机と画材を置く棚が並んでいる。学校の美術室よりも充実していそうだ。

ここにもいくつもの作品が並んでいたが、倉庫と違うのは作りかけの作品があるところだろう。部屋の中央にはイーゼルが建てられており、そこに今日、私がここにいる理由である絵が描かれたパネルが鎮座していた。生涯で一番集中して手を入れた絵だけに、目が離せない。

「ねえ、嘴本くん」

「ん？」

「今日まで、完成させないで待っていてくれたの？」

少し、尋ねる声が震えてしまった。

「ボクの初めての合作だ。完成させるときは二人で一緒のほうがいいだろう？」

「……うん」

彼は私に頷き返し、絵に向き直る。スッ、とその瞳が真剣になり、芸術家の顔になる。そしてイーゼルの横に準備していた絵筆を手にし、一気に花の絵を完成させた。驚くことに、私が覚えていた違和感は彼の手の動きと共に霧のように消えてしまった。それを見つめる私は息をつくのを忘れてしまった。

テレビ番組の一シーンみたいに、効果音が鳴るわけでもない静かな完成。彼が振り返り、私は思わず微笑み返してしまう。あはは、何だろう、この状況。

彼が場所を空けてくれたので私はその絵をよく見せてもらうために近づく。すると、ふわっと頭が軽くなったような気がして、驚いてそこに手をやる。帽子を彼に取られてしまった。

「つばが危ないよ」

「あ、ご、ごめんなさい」

また同じ過ちを繰り返しそうになる恥ずかしさもあったが、それ

よりも、彼に身につけているものを脱がされたという事実が、私の顔を紅潮させた。でもそのおかげで、絵がよりいっそう輝いて見えた。

今の気持ちは、生涯忘れたくないと思った。

「不思議」と、つぶやく。

「不思議？」

「うん、だって、私、もともと嘴本くんに迷惑かけたことから始まったことなのに、こうして嘴本くんから完成を披露してもらえなんて」

「ああ、そうかもね。ボクもついこの間まで美術部には拘るつもりなどなかったのに、もう少しいてもいいと思うようになった」

「……！」

私は上手く言葉を発することができなかった。彼は、下で紅茶を振舞うよ、と言った。

「今日は、呼んでくれてありがとう」

階段を下りながら感謝の気持ちを詰め込んだ言葉を伝える。

「どういたしまして」

階段は急なので彼は振り返って答えなかったけれど、彼の微笑が見えた気がした。

「そのソファに座ってて」

「うん、あ、お茶……いいの？」

男の子にお茶を淹れさせるのにちょっと抵抗を感じたのは、私の育った家庭環境のせいだ。

いいよ、と笑って彼はケトルのある流しの方へ向かう。私は待つ間、すぐには座らず、応接室にも飾られている作品を眺める。

「ここにあるのも嘴本くんが作ったの？」

「そうだよ」

そして私は一体の裸婦像を見とめ、ふとその意味を意識してしまう。やっぱりこれはモデルさんがいて作ったものなのだろうか。…

：薰くんは他の男子とは違う。見学旅行先で裸婦像を見つけただけでギャーギャー騒ぐようなバカな男子とは違う。これは芸術のためだ。そういう目で見ているわけではない。でも、モデルについて質問するのは（とても興味があるけど）恥ずかしくて出来なかった。

私は、落ち着くためにソファに腰を落とす。ところが、その途端、空間がぐるりと回った。

「きゃあっ」

視線の先が天井になる。間抜けにも私はソファの柔らかさを見誤って後ろに倒れてしまったのだ。しかも変に斜めに座ったものだから背もたれで止められることもなくソファに全身を横たえてしまった。

彼の笑い声が聞こえた。恥ずかしい。今日は自分のベストの状態の姿を見せたかったのに。でもスカートじゃなくてよかった。

「ほら、大丈夫かい？」

寝そべった私の視界に、彼の顔が入ってきた。

ああ、どうして。

こんなときにこういうシチュエーションになっちゃったんだろう。

寝そべりながら誰かと顔を合わせるなんて、普通、ごく親しい間柄でだけだし。

恥を搔いたせいで緊張感がどこかへ飛んでいってしまったし。

勇気なんて、必要なくなってる。

彼が私の身を起こすために伸ばした手を取った私は彼の目を見つめて、

「すき」

って言っちゃった。

でも、身を起こした私は正氣に戻って、自分がどんなに早まったことをしてしまったかと気づいた。

だって彼が微笑みながらも眉が困ってる。

「ボクを好きになっちゃいけないよ」

ああ、と思う間もなく、彼はそっと手を離し、私の手から急速に熱が失われる。

「ボクの美はみんなのものだ」

そんな言い回しをしたけれど、分かってる。私なんかが、恋愛対象になるわけないって。分かってたのに。

どうしてあんなに自然に告白できたんだろう。そんな幸運なんていらなかった。

体内を巡る血液のスピードが速くなりすぎて、身体が揺れているような気がする。

「罪なボクを許してくれ。紅茶を飲んで落ち着こう」

そんな彼の言葉の向こうで、ケトルが蒸気を吐き出す音が聞こえる。

でも無理みたい。私の胸の中では熱いものがさっきから膨れ上がっていて、きっと紅茶なんて入らないから。

## 第二十四話・終わりを始めない

あの時告白なんてしなければ、あの後も彼のアトリエに並ぶ画材や作品群を見せてもらって、気持ちのいい時間をもっともっと過ごせたはずのに。自業自得の後悔の念が何度も何度も襲ってくる。

昨日、帰る途中でアトリエに帽子を忘れてきたことに気づいたが、戻って彼と顔を合わせる気にはなれなかった。泣き落としをする女と思われたくはなかったので、あの場ではぐっとおなかに力を込めてこらえた。でも、私は自分が思っている以上に感情が顔に出てしまいうらしいから、彼に汚い顔を見せてしまったかもしれない。

いよいよ今週末は文化祭本番で、教室内にも、出し物の準備が並び、クラスメートたちもなんとなく浮き足立って授業に身が入らないような様子だ。私は違う理由で授業に集中できていないけれど。

どうしてその気になっちゃったんだろう。

彼のそばにいられるだけでよかった。ううん、そうじゃない。どうせ叶わぬ恋ならば、せめてそばにいたかった。叶わないと知っていたのに言葉が漏れたのは――彼のせい。

ずるいよ。あんなに優しい笑顔を向けられたら、私は自分のコンプレックスすら忘れてしまう。私は男の子から馬鹿にされているのに慣れきっているから、少しでも優しさに触れられたら、脆くもそれに蕩けてしまう。

「すき」という言葉が発せられた刹那、私は幸せの空間へと解放され、そしてその二文字は以後の私を縛り付ける。

どうすればいい？ もう一度好きだと言っても、最初のときのような心持ちは、二度と来ない。私を受け入れてくれないならば、言えと言うほど意味のない言葉になる。私はとっておくべき大切な機会をうかつにも捨ててしまったのだ。馬鹿みたい。

この前読んだ小説、やっぱり共感できない。だって告白したって全然スツキリしないもん。

振られたのなら、私は新しい恋を探さなきゃいけないの？ まさか！ それは私が発した「すき」という言葉への冒涇だ。

ぼんやりと同じことを繰り返して考えてばかりで時間が過ぎ、放課後になってしまった。

週末は2日とも出かけたせいで、心を休める暇もなく、彼やみんなと顔をあわせなければならぬ。今日は彼の教室の前を通り過ぎるときに、中をちらりと眺める日課もできなかった。もし目があったら、どんな顔をすればいいのか分からない。暗い顔をしていたら、彼に気負わせてしまうことになる。明るい顔をしていたら、昨日の告白は軽いものだったと思われる。どっちもダメだ。

美術部はどうしよう。いつそのこと、クラスの出し物の手伝いをして、美術室には顔を出さないようにしようか。文化祭を直前に控えた今の時期なら無理のない言い訳だ。あ、そういえば、お母さんとお父さんに、今日から文化祭までの間、帰りが遅くなると言っておくのを忘れてた。

「和美ちゃん、どうしたの？」と、タマちゃんが声を掛けてくる。私は美術部に行くか、クラスの手伝いをするかを決断するためにタマちゃんと二言三言交わそうとした。と、その時。

キヤーツと教室の外から女の子たちの悲鳴のような歓声が聞こえ、私たちは顔を見合わせる。そのまま釣られるように教室を出て歓声の出所を探す。わっ、と先に言ったのは私だったかタマちゃんだったか。

うん、いや、女の子の歓声という時点で、彼かもと想像したよ。薫くんだった。ドレス姿がとっても綺麗。とっても綺麗なドレス姿。

きっとあれは文化祭の女装コンテスト用のだ。でも女装コンテス

トって、笑いを取るのが趣旨だったと思うんだけどな。うちのクラスからも男子が一人出場をすることになってはいるけど、気持ち悪さで勝負するみたいなことを言っていたし。薫くんは綺麗すぎる。基本的に彼は男顔だとは思いうけれど、宝塚の男役と言われて信じてしまうくらいには綺麗だ。

「あはっ。似合ってるねえ、嘴本くん」

「……」

タマちゃんが半笑いで私にそう言うが、同意はしないでおく。綺麗ではあるんだけど、なんていうかな、やっぱり彼には男の子でいてほしいというか。彼の周りにいる女の子たちははしゃいでいるけれど、あれで嬉しいのかな。

「ああ、関根くん」

「！」

目が合ってしまった。彼とどんな表情で顔を合わせればいいのかわからなかったのに、ぽけーっと彼の顔に見とれていたせいで捕まってしまった。

「あ、え、何？」

彼の視線の他に、ちょっとチクチクするような視線がいくつか集まる。ううん、そんな目で見ないで。心配しなくても私は薫くんの特別な人なんかじゃないんだから。

「これから彼女たちとコンテストの打ち合わせをするんだ。美術室に行くのは遅くなる……ひょっとしたら行けないかもしれない。星見さんに伝えておいてくれないか」

「う、うん、わかった。伝えておく」

彼が、昨日のことなどなかったように話しかけてくるものだから、普通に言葉を返すことができた。そして放課後の私の行き場所も決まった。



私に気を使って普通通りにしてくれたのだろうか。それとも告白されるのには慣れてるから気にしていないだけなのだろうか。たぶん後者だろうけど、それでも気負うことなく言葉を交わせたことには彼に感謝。

私はタマちゃんに、美術部に行くことと、クラスの出し物を手伝えないことを軽く謝って美術室に向かった。

美術室に入ると、私が土曜日登校する原因になった、久しぶりの姿があった。

「敷島さん、身体、大丈夫？」

小林さんやセナちゃんから、敷島さんは最近、学校には来ているけれど具合が悪いから、ということですぐ帰っていたことを聞いている。

でも、ただ、そう声を掛けただけなのに、振り返った彼女の目つきは、さっき薫くんの周りにいた女の子たちのそれよりも厳しく、私は身が竦んだ。

「うん、大丈夫だよ。休んでてごめん」

返した声は普通だった。だったらどうしてそんなに怖い顔で睨むの？

と、そんな微妙な空気の中で、私は制服の肘の当たりを掴まれる。

「和美ちゃん、ちょっと」

セナちゃんだった。彼女に誘導され、廊下に出る。

「なに？」

「あのね、和美ちゃん。羽織ちゃん（敷島さん）ねえ、この間薫サマに告白して振られたの。だから元気なかったの」

「え、そ、そうなの？ でも、どうしてそんなこと私に」

振られた話なんて周りに広めるものじゃないのに。

「だから、羽織ちゃんが告白したのって、和美ちゃんのせいでもあるんだよ？」

「え、どうして？」

「……だってさ、最近和美ちゃん、薫サマにすごいアプローチかけてたでしょ？」

「え、そんなことは……ないと思うけれど……」

冷や汗が出る。確かに最近、彼とはいろいろあったけれど、人前でこれ見よがしに近づいたことはなかった……はずだけれど。

「そう？　でも、美術部でも話しかける回数とか増えてなかった？」

「そ、そうかな？」

私は浮かれてついついそうしていたかもしれない。

「うん、でね、羽織ちゃん、あせっちゃってさ、勝負に出たんだよ。……その結果が結果だったからショックで美術部に顔を出せなくなってたんだよ？」

「そうなんだ……」

だから私が声をかけたとき、カタキとばかりに睨みつけたのか。うむむ。なんか敵を作っちゃってるなあ、私。

でも、少しわかったことがある。

薫くんはすごいモテるから、一人の女の子との距離がちょっとでも縮まるとたちまち諍いの元になってしまう。だから彼は「ボク的美はみんなのものだ」なんて遠回しに言ったんだ。でも、もし彼のほうから誰かを好きになったらどうするんだろう。

ああ、なんだろう。私も彼に振られたことに変わりはないのに、特別に嫌われているわけではないことにホッとしている。いじましいなあ。

結局その日、彼は美術室に来なかった。

家に帰って居間のドアを開けた途端、お父さんの怒鳴り声が飛び出してきて、私は思わず反射的にごめんなさいと謝った。

## 第二十五話・偶然だとしても

だけど、お父さんが怒鳴ったのは私のせいじゃなかった。大声で竦んでしまったが、耳に入った言葉は私の帰りが遅くなったことを咎めるものではなかった。お父さんは私に気づき、気まずそうな顔をすると肩を落とし、おかえりと呟いて居間を出ていった。お母さんもすぐそばにいたが、目の周りが赤くなって涙が滲んでいた。

お父さんが廊下を歩いていく音と、寝室の戸を開けて閉める音が聞こえた。

「おかえり。文化祭の準備？」

声が少しやつれている。

「うん、今日から遅くなることを言っておくの忘れてた」

「ごはん、温めるわね」

「うん。ねえ、お父さん、どうしたの？」

「……うん、さっきね、蓬田さんから電話があったのよ。やっぱり和美にモデルをお願いできないかって」

「えっ、それって断ったんでしょ？」

「うん。だけど、なんだか本物のモデルの人が都合が悪くなってしまったから、緊急でお願いできないか、って頼んできたの。ほら、本社はアメリカだから、日本のモデル事務所にそんなにコネがないのよ。だけどそこで、話を聞いてた大助が出てきて、こじれちゃって」

「……でも、なんであんなに怒ってたの？　いくら仲が悪いって言ったって……」

「大助だって、心底蓬田さん……美佳を嫌っているわけじゃないのよ」

電子レンジの温めが終わる音が鳴り、お膳の上に私の分の夕食が並ぶ。

「大助は、私に服飾デザイナーの道をあきらめさせてしまったんだって、ずっと悩んでいたの。今でもね。だから美佳と会うたびに、つい感情的になってしまふのよ」

お父さんは昔、夢に破れて挫折した経験があるという。夢を見ること、夢を叶えようとするのを何よりも大切にしてきたから、お母さんの夢もまた同様に大切だったのだろう。お母さんが側にいてくれることを選んだのは嬉しかった筈だ。なのに、相反する感情をずっと抱えてきたのだ。

「和美にモデルの話を持ちかけたのを、当てつけのつもりだと思ってしまったのも無理ないかも知れない」

「それは……そんなことはないでしょ？」

私はお父さんと蓬田さんとなら、お父さん側の人間だが、それについては言い掛かりだと思う。

「そうね。大助だって頭では分かってる。でも、どうにもならない気持ちだってあるのよ」

「うん。……だけど、お父さんがお母さんを怒鳴りつけるのはダメだと思う」

そう言うと、お母さんは、ふっ、と苦笑いした。

「美佳が時々私に新作のデザインについて意見を求めてくるのも、ホントは嫌なんだろうね」

「お母さんは、悪くない、よ。お母さんにとっては、お父さんも蓬田さんもどっちも大切に思っているだけでしょ？」

あれ、なんか恥ずかしいこと言ってるかな、私？　なんだか胸の中に、普段あまり感じない名状しがたい想いが渦巻いている。それにしても、最近私は蓬田さんにマイナスの感情を持っていた筈なのに、お母さんの親友であることを思い出すと、その気持ちが和らいでいた。

「ありがと、和美」と、こんどは優しく笑った。

次の日の朝、私が起きて降りていくと、珍しくお父さんも先に起

きて食卓についていた。おはよう、と言いついて昨日の気分を晴らす。そう言えば早く寝たんだから早く起きるのも当然か。

「和美、ゆうべは済まなかったな」

「ああ、うん」

「つい怒鳴ってしまったけど、和美を悪く言うつもりじゃなかったんだ」

「え？　悪く、って」

「『和美なんかモデルが出来ないだろ』ってのは、和美が人前で緊張するタチだから言ったんであって和美に……」と、言葉を濁す。

「あ、そんなこと言ったんだ。それ、聞いてなかった」

「え、あ、しまった。じゃあ、言わなきゃよかった。悪い」

お父さんが頭に手をやり顔を顰めて笑う。私は、いいよ、と手を横に振った。

なるほど、私にモデルは向いてない⇒だけど蓬田さんはモデルに誘った⇒何か他に考えがあるに違いない⇒当てつけ、という思考順序か。

私は、蓬田さんに誘われたのはほんの偶然がきっかけだということとを説明してお父さんを納得させた。

お父さんはお母さんとももう普通に話している。ずっと悩んでいたとは言え、私が生まれる前からの付き合いなのだ。ちょっとやそつとの衝突なんてあったって壊れるような関係じゃないんだ。

文化祭の準備の忙しさが、私の心を助けてくれた。彼と正面切って顔を合わせることは出来なくとも（昨日はどさくさにまぎれた感じだし）、美術部の活動として、展示物の一部を手渡しながら一言声を掛けることぐらいは出来た。多分だけど、薫くんは共同製作についてはずいぶん口を出さない。その代わりに単なる雑用を引き受けてくれているようだった。

私も仕事と割り切って頑張ろう、そう思っていたら時計を見るのを忘れてしまった。

「関根、電車の時間、大丈夫か？」

「あっ」

牧瀬さんに声を掛けられたとき、乗ろうと思っていた電車の時間を過ぎてしまっていた。この後の電車でも帰ることは出来るが、乗り換え云々もあって家につくのはかなり遅くなってしまう。

「ええ、えっと、大丈夫です」

「何だったら健太郎の車に乗せてってもらおうか？」

「車？」

「あいつ免許持ってるんだよ。家も近いし、言えばすぐ出せる」

「え、でも悪いですよ、星見さんに」

「健太郎！ どうだ？」

「俺はいつでも」

と、すぐ返事が返ってくる。

「いえ、ホントに、悪いですから」

「こんな時間じゃ、駅から家までの道を歩かせるのも危ないだろう。ご両親にも心配かけさせるわけにはいかないじゃないか。遠慮しないで乗れ」

「う……」

そう言われると、強く断れなかった。お願いします、と頭を下げると、星見さんはすぐさま美術室を出て、しばらくすると牧瀬さんの携帯電話が鳴った。車で学校に来た合図だった。みんなに挨拶をして、生徒玄関に向かう。星見さんが手を振っていたので、そちらへ駆け寄った。

「吉祥寺駅までなら道は分かる。その先は関根がナビしてくれ」

「はい」

助手席に座ってシートベルトを締める。

星見さんは夜の道路を発進した。わたしはもちろんのこと、星見

さんも口数の多いほうじゃなかったもので、車内は会話と沈黙が交互に繰り返された。器用にギアを動かす星見さんの大きな手を格好いいと思って時々眺めた。

「関根」

「はい」

「今週末の文化祭で3年の活動はだいたい終わって美術部を引退する。後は、あー、みんなで美術館に行くくらいか」

「ああ、そうですね」

「それでだ、関根、お前、美術部の次期副部長やってくれないか」  
「……え、ええっ？」

今まで当たり障りのない話をしていたので、その話にドドツ、と心臓が波打つ。

「野村にも、あいつ（牧瀬部長のことだろう）が次期部長を打診している。多分引き受けてくれると思うが」

野村さんなら、部長に相応しいだろう。落ち着いた物腰で真面目な人だから。でも。

「あ、あの、私、無理ですよ、そんな、私」

「無理だと思わないから頼むんだ」

「どうして私に」

動悸が止まらない。

「関根は1年の中で一番真面目に美術部に出席しているし、製作もよくやっている」

「……」

「2年は野村以外なら永山がいるが、あいつは漫画の方と兼業しているし、そっち寄りの活動で結構休むから駄目だ」

それは分かるけど、でも私なんて。

「それにな、何より俺は、今回のことに少なからずお前に感心している」

「今回のことって、え、え？」

「関根は普段おとなしいほうだが、ここぞというときにちゃんと動

いてくれる。嘴本を引き留めてくれたこと、感謝している」

「！！」

彼の名前を挙げられて、一気に血が顔に上った。車内のランプはそんなに明るくないから、フロントガラスに映る私の顔色には変化は伺えなかったけど。

でも、どういうことだろう。どうして星見さんが知っているのだろう。そしてどこまで知っているのだろう。

「あ、あの」

「嘴本が、あの天才野郎が俺のところに頭を下げに来たんだ。美術部に戻ります、ってな。そして関根に説得されたからだ、って」

嘘……！？

「正直、あの時は俺自身のふがいなさに腹が立った。嘴本の言い分にかつとなって攻撃的な口を利いてしまったからな。関根のやったことは本来なら俺がやるべきことだった」

……だけど、あれは、部のためというより、私個人のために必死になってたからであって。

「嘴本、褒めてたぞ。関根のこと。共同作業に新しい世界があると気づかせてくれた、とかそんな意味のことを言ってた」

どどどどうしよう。喜びと痛みとが同時に私を襲う。

「美術関連抜きでも、俺はお前を副部長にしたいと思ったのはそんな理由だ。……いや、わかってる。関根は人前で喋るのとかそういうのは苦手なタイプだってことはな」

「……」

「分からないことがあったら野村に聞け。そしてあいつの部長としての行動をよく見ておけ。最初はただくっついて歩いているだけでもいい」

「そんな」

「まあ、一人になったらまた落ち着いて考えてみてくれ。そろそろ駅つくから、道順を教えてくれ」

「はい……」



時計を見ると、電車通学の時の60%くらいの時間だった。こんなに時間を節約できるのかと驚きつつ、誘導する。

家に着くと、星見さんも車を降りて、ドアチャイムを押した。出てきたお母さんに頭を下げ、遅くなって申し訳ありません云々とお詫びの口上を述べた。こういう挨拶をちゃんとするところが立派なところだと感じる。私も見習って、星見さんが車に戻るとき、ありがとうございますと深く頭を下げた。

お母さんがお父さんのいないところで「和美の大切な人ってあの男の子？」と尋ねてきたので慌てて否定した。ちよっと失礼な否定の仕方だったかもしれない。

## 第二十六話・火照（ホデリ）（前書き）

前話の補足のような話で、短いです。

## 第二十六話・火照（ホデリ）

ホントはね、男子だけじゃなく女子も嫌いだった。

クラスの席替えのとき、くじ引きで決めたのに、その後でトレードにトレードを重ねて結局仲良しグループで固まる女子が嫌だった。クラスの委員を決めるとき、気の弱い、強く断れない子を推薦して賛成多数で押しつけるのがとっても嫌だった。でもそれに関しては私も強く非難できない。私はと言えば、仕事の少ない委員をさっさと選んで押しつけられないように逃げていた。

今日ね、私は。

面倒な事を押しつけたという以外の理由で、初めて役職を頼まれた。

本気で拒否すれば、副部長にならなくてもいいのだろうとは思う。そこに待っているのはただ、星見さんの失望……そして、薫くんの私への評価が落ちること、か。

ん、ん、ん……。

中学の頃は、逃げてばかりで、そんな子だと思われることが保身の手段だった。期待されなきゃ、失望されることもないから。そうやって低い所から見上げて周りを軽蔑してきたのだ。

でも今は、失いたくないものができた。

この期に及んで、彼の気を惹きたいからなんていう行動原理じゃないよ？ でも「好き」という気持ちはまだ健在なんだから、それを原動力にするのはアリかなと思う。

そして立ち止まって踏ん張って受け入れた先にどんな世界が待っているのか。それを想像したとき、私はもう一つ、頼まれたことがあることに気づいた。

「ねえ、お父さん」

晩御飯の席に着きながら、私はお父さんに声を掛ける。

「ん？」

「私、蓬田さんのアルバイト、やってみてもいいかな」

その時のお父さんの目の色の変わり用。それはちょっと私をたじろがせたけど。

「人がいなくて困っているってだけだから、1回きり、人助けをすすめてだけ」

言葉を続けて自分の決心にもする。お母さんの顔は見ない。助けを期待したら、またこじれちゃう。

「ん……。和美がやるって決めたことなら、それに関して俺は強く言えない。やってみればいいさ」

そう言ってお父さんは目をそらす。そのタイミングで私はお母さんにも許可を求めた。

「そう、それじゃ、明日にでも蓬田さんに電話で聞いてみるわ」

さて、どうなることか。これで、もうアルバイトはいらなくなっちゃったとか返事が返ってきたら笑い話だけど。

次の日もまた星見さんに送ってもらった。帰りの電車の時間をまた忘れたわけではなく、出来るだけ美術部の展示のための時間を取りたくて、あらかじめ打ち合わせておいたのだ。

「俺さ、小学校6年のとき、県の絵画コンクールで最優秀賞もらったことがあるんだ」

星見さんがそんな話を始める。

「へえ、すごいですね」

「うん、まあその当時は俺って天才だ、とかうぬぼれていたよ。だけどな、浮き浮きして行ったその会場で俺はしたたかに打ちのめされることになったんだ。賞は学年別に分かれているんだけど、4年

生の部の最優秀賞が、どう見ても6年の俺のより上手かったんだなそれが」

「4年生……2学年違いってひょっとして」

「ああ。賞を取ったのは『はしもとかおる』っていう息を飲むような可愛い女の子だった」

「え？ 女の子!？」

「いやいや、見たときは本当に女の子かと思ったってだけだ。髪も長かったし、ピンクなんか着やがってたからな。性別を誤解したままだったら惚れてたかもしれない」

星見さんはハハハと笑う。ううん、薫くんなら充分にありうることだ。

「小学校の頃のあいつの絵、見たことあるか？」

「いえ……」

「すげえぞ。あの年齢で、デッサンが狂ってないんだ」

「それは見てみたいですね」

絵のほうはもちろん、彼のほうも。想像だけではたどり着けないその当時の彼の姿、一目見たいと心穏やかでいられなくなる。これは恋とは違う感情。

「小学生の頃の2歳差ってのは大きい。こんなちっこい子でも俺を遙かに上回るのか、と俺は世の中の広さを知って、絵を仕事にすることをあきらめたんだ」

「そんなことがあったんですか」

「まあ、その出来事以来、俺はあいつにコンプレックスかかえてきたようなところはある。それを乗り越える気合いがあったら俺ももっと先に進めたんだろうけどな」

「……」

星見さんが薫くんから受けた影響は、私とは対照的なものだった。それが文化祭の打ち合わせの時の態度になったというのは安易な考え方だけだ。

でも確か星見さんはあくまで趣味として美術部の活動をしている

と言っていたことがある。好きなことだから続けるといふのはごく当たり前のことで、考えてみたら私と同じだ。だけど、星見さんはもっと大きい視野で物事を見ている。

家に帰ると、お母さんからアルバイトの日時を覚えてもらった。私がヒマになる、文化祭の翌日の代休の日だった。今は展示物を完成させたいという、テンションが上がった状態だからいいけれど、そうでもなかったら、きっとその日まで緊張でストレスを抱えながら生活する羽目になっただろう。

## 第二十六話・火照（ホデリ）（後書き）

これがきっかけで和美がモデルを目指すとか、そういう展開にはありません。

## 第二十七話・買いかぶり

視界に入った彼の顔に、胸から頭へと鈍い衝撃がキュツと走った。その表情、見覚えがある。共同製作の題材を決める会議のとき。笑顔の中に陰りを宿したあの顔。

どうしたんだろう。何か変なところがあるのかな。……知りたい。でも、今の私じゃ、声を掛けるのに、以前以上の勇気が必要になっちゃう。誰か、誰か訊いて。

美術部の共同製作は、文化祭を明日に控えて、夕日が沈む前に完成した。

誰かが拍手を始めて、それが拡がり、つられて私も拍手をしながら、作品と完成を喜ぶみんなを見渡した。

美術室の中央に共同製作が配置され、その周りに各々の個人展示が並ぶ。共同製作は、過去の町と現在の町を表現した絵と紙細工とを立体的に並べて、時代による変化を感じさせる演出だ。

地元出身ではない私でもそう感じる、満足な出来だった。けれど、薫くんはそう思っていないようだった。

共同製作で黙って作業する薫くんの態度を、私は好意的に解釈していたけれど、彼の表情を見てしまうと、嫌な想像がもやもやと沸いてくる。

誰か訊いてよ、と身勝手に他人任せの願いを思っていたが、その望みは叶わないまま、牧瀬さんの解散宣言が発せられた。この後は帰宅するかクラス展示を手伝うかだ。

とりあえず、手を洗ってこよう。

私はポスターカラーで汚れた手を洗うために美術室を出て、トイレの出口わきの水飲み場へと向かった。



美術部の共同製作の完成で心に区切りが付き、どっと疲れが出たので出来れば帰りたい。でも、クラス展示の方で頑張っている人達を残していくのにも罪悪感を覚える。

そんな葛藤を抱えながら濡れた手を拭き、ふいっと顔を上げたとき、眼前の鏡に映った像に、私はひゃ、と変な声を上げてしまった。「何でそんなに驚くんさい？」

そう苦笑いしたのは鏡に映った薫くんだった。

手洗い場は男女のトイレのわきにそれぞれあって、短い廊下を挟んで向かい合っている。私たちは合わせ鏡ごしに目が合ったのだ。くるりと振り返って、ごめん、と謝る。

「ちよっと、怖い顔をしてたから」

「怖い？ そんなに怖い顔をしてたかい？」

鏡の中の彼の顔は、美術室でのそれよりも明確にしかめられた表情だった。

「う、うん……」

彼の笑顔にとまどいながら曖昧に頷く。

「そう……そんな顔をしていたんだ。ボクが」

自分の顔に手を当てて、頬をつぶす仕草をする薫くん。私はこの機会を活かすべく、言葉が続けた。結局自分が訊かなきゃダメか。

「もしかして、共同製作に何か気に入らないところがあったの？」

口にした直後に、問いを間違えていないか、不安になってしまう。「うん？ そう見えたかい？」

問いに問いで返されて怖じ気付く。

廊下はクラス展示の準備をする人の行き来が多かったが、美術室がある2階は、2年生の教室がある階なので、幸いにも学年の違う私たちに特に注目する人はいなかった。

「もし、私が無理言ったせいで、」

「それはボクに対する侮辱だよ。関根くん」

「！」

遮るその声は穏やかだったから、怒ってはいないようだけど「侮

辱」という単語が強く響いて私は口を閉じた。

「確かにボクは君がきっかけとなって美術部に戻り、共同製作に携わることにした。だけどね、それを決めたこと自体はボクの意志だ」  
「……」

「ボクは君の意見に納得して、それをボクの心に取り込んだ。今でもそれは変わらない。いい加減な気持ちで君に惑わされて、納得したつもりになっただけではないよ」

「……」

婉曲的な言い方で意味を把握しきれないけれど、私をフォローしているようでもあり、自分の行動は自分の責任だという矜持のようでもある。私が意味を解釈するために沈黙しながら懸命に思考を巡らせていると、今度は優しい声で私を呼んだ。

「関根くん」

「ん、うん？」

「『新しいぶどう酒は新しい皮袋に』」

「え？」

「それが君の問いに対する答えだよ」

「それは、どういう……」

「君にならわかるんじゃないかな。……さて、今日はボクはもう帰るよ。さすがに疲れた。しばらくはアトリエで自分のためだけに作品を創りたいね」

軽く手を振って去っていく。

私にならわかる、だなんて言われたせいで、重ねて問うことが出来なかった。買いかぶりだよ、と思っても買いかぶられて喜んでいる自分もいて、どうにもこうにも胸がくすぐったかった。

私は階段を上ってクラスへ戻り、タマちゃんたちがいる辺りに近づいて行く。タマちゃんは、美術部の方はいいの、と尋ねてきたので、うん終わった、と答えた。静香ちゃんと紀子ちゃんは紙束を持った青野くんから何やら指示を受けている。彼はクラスで一番頭の

いい男子なので、よくクラスのみんなから頼られていて、文化祭実行委員でもないのに、精力的に働いている。そんな姿を見て、私も彼に一つ頼ることにした。

「ね、青野君」

私が彼に話しかけると、青野君だけでなく、二人ともどうしたの、という顔で私を見つめた。

「はい、何でしょう？」

他の男子と比べて話しかけやすいのは、青野君が優しい人だからというのもあるし、女子の中では静香ちゃんと特に親しくしているからというのもある。

「青野君は『新しいぶどう酒は新しい皮袋に』って言葉知ってる？」

「何それ、クイズ？」と聞き返したのは静香ちゃん。

「あ、ううん。そういうことを言った人がいるからどういう意味かなと思って」

「それは……新約聖書の言葉ですね」と青野君が答えてくれた。

「聖書……キリスト教？」

「そうです。『新しいぶどう酒を古い皮袋に入れる者はいない』とも書かれていますね。新しい教えを受け入れるためには、それを受け入れる人間の側も考え方を新しくしていかなばならない、古い考えに固執してはいけない、というような意味です。それをワインと皮袋に喩えたんですね」

「……そうなんだ。ありがとう」

すると、薫くんの言っていたことはどう解釈すればいいだろう。共同製作の意義が新しいぶどう酒とすると、皮袋は、私たち……もうちょっと厳密に考えるなら、薫くん自身のことか、私のことか、それとも他の美術部のみんなのことか。いずれにせよ、それを古い皮袋とみなしたから、薫くんは完成した作品に不満がある、ということなのだろうか。

静香ちゃんは青野君に、すごいねえとか言いながら会話を続けている。

私は、みんなで協力して物を作り上げることの意味をもう少し考えたくなくて、タマちゃんたちの担当部分を手伝うことにし、あまり遅くならない時間まで教室に残った。

## 第二十八話・初めてのメイク

通勤ラッシュ時を過ぎた電車に揺られながら、私はぼんやりと外の景色を眺めた。これからのことを考えると緊張感が胸にたまるので、アルバイトのことは頭の片隅に追いやる。そのかわりに昨日の文化祭の記憶を反芻した。

文化祭の締めくくりは、校庭の中央で燃え盛る火を中心に全校生徒でフォークダンスをするスケジュールになっていたのだが、私はそれをボイコットして帰宅した。

汚い物が付いたかのように振り払われる手。鳥肌の立つような音を立てる男子たちの引き笑い。フォークダンスにはイヤな思い出しかない。

トラウマを抉りたくないという気持ちは、「彼」と束の間のダンスを愉しみたいという思いよりも勝った。そう、私はこういう人間だった。

それに、リスクを負って彼との接触を追い求めるくらいならば、彼と二人で過ごした時間を思い出す方がよっぽど胸が痛甘くなる。しばらくはこれで胸を満たすことができる。

彼と彼に憧れる女の子たちが踊る姿を想像して、後ろ髪を引かれなかった訳ではないけれど。

電車の窓から見える景色が、いつも見ているものと変わった。蓬田さんとの待ち合わせの駅への路線は、途中まで定期券で行ける場所だったが、そこから外れた途端に、日常から外れたことをするのだと実感した。さすがにもう、モデルの仕事を考えずにはいられない。

アルバイトを引き受けてから今日までの間に1度だけ蓬田さんと電話で話した。私がやる仕事はフィッティングモデルといって、背

の高い人、低い人、ぽっちゃりの人、痩せた人、と色々な体型の人に合わせた服を作るためのモデルだそうだ。撮影はするけれど、ファッション雑誌に写真が掲載される類のものではないそうで、少しホッとした。

以前、静香ちゃんからスタイルを褒められたことがあったことを思い出す。私の体型は痩せ型だけど、普通体型の女の子にしてみれば、憧れの対象になるのだろうか。

それにしても、蓬田さんに私のスリーサイズを言い当てられたときには驚きで顔に血が上った。私が自分で認識していたサイズと少しだけズレていたけれど、それは多分、私の方が間違っているような気がする。サイズをちゃんと測ったのなんて、中学生のときに初めてブラをつけたとき、お店の人にしてもらったのぐらいなものだ。後は持っている服のサイズが自分に合っているかで大体しか把握していない。やっぱりプロは違うなと感心してしまった。

そのせいで今日の私の服装もちょっと気を遣っている。蓬田さんは、着替えるから、ラフな服装でいいと言ったけれど、あんまりな服装だと、プロの人たちの前ではみつともないと思ったから。

待ち合わせの駅についた私は、蓬田さんに言われた通り到着を伝えるため、公衆電話へと向かった。

「はい、蓬田です」

「あつ、あの、関根、です。今日のっ」

舌がもつれてしまって、自分が思っている以上に緊張していたことに気づく。

「ああ、和美ちゃん。公衆電話だから誰かと思ったわ。随分早いからね」

「すみません」

時計を見たら、予定の約束の時間の30分も前だった。慣れない路線で遅刻してはいけなさと余裕をもって出発したが逆に迷惑になってしまったかもしれない。

「それじゃあ、今から私が駅まで迎えに行くわね。5分くらい待ってて」

「はい」

駅の出口で短い距離をうろうろしていると、やがて黒のスーツを着た蓬田さんが視界に入った。蓬田さんは手を振ってこちらへ近づいてくる。ヒールのこつこつ言う音が、この前は不安を掻き立てたのに、今は逆に安心できる音になっていた。

おはようございます、と頭を下げると、おはようと返された。

「和美ちゃん、ケータイ忘れたの？」

「え？ あ、いや、私、携帯電話持っていないんです」

「あ、そうなんだ。ん、和美ちゃん、緊張してる？」

「あ、はい……」

「大丈夫よ。この前も言ったけど、ファッションモデルとは違うんだからね」

「はい……」

会話をしながら、蓬田さんが来た道を、並んで逆に歩いていく。

「和美ちゃんところの学校は、女の子はあんまりメイクしないの？」

「え！ あ、どうでしょう」

タマちゃんは……していない。静香ちゃんや紀子ちゃんも……していない。でも、学校にメイクして来ている子はある。うちの学校は凄く厳しいという訳ではないけれど、ビューラー入れたりして一目で解ってしまうようなメイクをしている子が音羽先生に注意を受けているのは見たことがある。

前に紀子ちゃんたちと、化粧品の話題をしたことがある。学校にはしてきていないけど、休日のお出かけのときはファンデーションを薄くつけているらしい。

「している子もいますし、していない子もいます」

と、何の統計的価値もない答えをする。

「ふうん、そうなんだ。地域によって違ってくるのかしらね」

ふと、不安になる。今までメイクするなんていう習慣はなかった

から気にもしていなかったけど、お出かけのときはメイクする方が普通なのだろうか。

……彼は、どう思っているのだろう。今まで彼とデートした女の子達が気合い入れたメイクをしたということは、充分考えられる。っていうか、メイクしないで会いに行っただけだったらどうしよう。

「そばかす、気になる？」

思わず顔に手をやった私に蓬田さんが尋ねる。言われてますます不安になる。後悔しても今更どうしようもないのに、こんな汚いそばかすを彼の眼前にさらけ出したと思うと……あうあう。

「スタジオにメイク一式あるから、ちょっと塗ってそばかす隠しましょうか？」

「えっ」

「撮影するんだから、せっかくだし、ね？」

「え、でも、私の写真って別に雑誌に載る訳じゃないですよね？」すると蓬田さんは、肩を落とし、ふうっと息を吐きながら、眉を顰めて私を見た。

「そうだけど。……和美ちゃんはもうちょっと、おしゃれに気を……それともお父さんから化粧はまだ早い、なんて言われてるの？」

「あ、いえ、そんなことは、ないです……私が無頓着なだけで……」それでも数ヶ月前に比べたら、少しはマシになったんですケド。

「じゃあ、アルバイトついでにいい機会だし、入門してみましょ」

ちようどそこで蓬田さんの脚が止まり、目的地のビルの前に着いた。各階の案内プレートを見ると「須和田スタジオ」の文字が書いてあって、3Fか4Fで撮影するのだとわかった。蓬田さんの後に付いてエレベーターに乗り、3Fで降りる。そこは無地の壁で囲まれた部屋で、何かのテレビ番組で見たことがある、大きな照明器具がセツトされていた。

ごくっ、と喉が鳴る。

私達の姿を見た、部屋の中にいた女の人たちがこちらへと近づい



て来た。ぽっちゃり体型の、黒髪をアップにした三十代くらいの眼鏡の女の人。金色の髪、青い瞳をした二十代後半の外国人の女人。

「うちの会社のデザイナーの河上、とティラー」

名前を呼ばれた人が順に私に、よろしく、と頭を下げるのでそれに頭を下げ返す。

「で、彼女が関根和美ちゃん」

「今日はよろしくお願いします」と改めて挨拶する。

「リカ、それじゃ採寸お願いね。それから撮影に入る前に彼女にちよつとメイクしてあげて。そばかす目立たないように」

「はい」

河上さんは私を部屋の隅にある細いドアへ導いた。ドアの向こう側は、ハンガーと棚に衣類がずらりと並べられており、その様子は、芸能人の豪邸紹介で見る衣装部屋を思い出させた。

「これが今日、関根さんが着る服よ。全部で32セットあるの」  
「32？」

「関根さんはプロじゃないから、結構しんどいかもしれないけど、頑張ってね」

「……はい」

「それじゃ、服、脱いで」

そうしてスリーサイズのみならず、首や腕や太股の周りまで計られる。蓬田さんの目測は見事に当たっていた。

ブラウンのチュニックとピンクの水玉のパンツに着替えて撮影部屋に戻ると、河上さんに、コスメの載ったテーブルの横のパイプ椅子に座るよう促された。ケーキのような匂いがする。蓬田さんは向こうでティラーさんと肩を並べ、バインダーを見ながらなにやら英語で打ち合わせていた。

「関根さんが普段使っているファンデはどのタイプ？」

「え……」

ううん、なんか私がダメダメみたいに思えるから、メイクはして当然だなんて前提で話さないでほしい。

「あのっ、私そういうのつけたことなくて」

「あ、そうなんだ。……あっ、いいのよ!？」 すっぴんで充分いけるってのは若さの証なんだから」

「……」

若い、っていうのはフォローのつもりで言ったのだろうか。

河上さんはチューブのふたを開けて、リキッドタイプのファンデーションを手に垂らし、それを指先にちよっとつけて私の頬の上の方をなぞった。反射的に目を閉じる。

「ん……」

「うん。関根さん、高校1年生だったわよね。やっぱり肌が若くていいわぁ」

そんなことを言いながら指先を何度も濡らして私の顔の上でそれを伸ばしていく。洗顔料塗っているのと大して変わらないかなぁ、なんて思った。

「関根さん、どう？ 鏡見てみて」

「はい……あっ」

鏡に映る私は、毎朝洗顔直後に見ているものみたいだったけれど、それよりなんだか、つるんとしてスツキリした感じだ。

「だいぶ目立たなくなったでしょ？」

不覚にも、自分自身の顔に頬が緩みかけたので、唇に力を入れて堪える。決して美人になったわけじゃないのに、正直嬉しい。ファンデーションを塗ったからと言って、ケバい感じはまるでなく、遠目で見れば肌がきれいになっただけみたいだ。それに、心なしか、さっきより服が似合うようになった気がする。

「ありがとうございます」

「社長、こんな感じでいいですか？」

河上さんが蓬田さん呼び、私の顔を見せる。

「あら、いい感じじゃない？ どう？ 初めてのお化粧は？」

私は、なんと答えてよいかわからず、感情を殺した笑い声を漏らした。蓬田さんは笑いながら私に、印刷したA4の紙を渡す。着る服の名前と番号とが表になっていた。

「この番号順に着ていってね。『1』は今着ているそのチュニツクね。2番以降は、ハンガーに番号がついているから、この番号通りに取っていって」

「はい」

「トップスとボトムとワンピースはわかると思うけど、帽子とかストールの組み合わせもあるから忘れないように」

「はい」

「結構時間食うから、急がせる場合もあるけど、まあ、頑張って」  
「はい」

こうして私は、無地の壁の中で、3人の女性の視線にさらされることになった。ファッションモデルのようにカッコいいポーズではなく、ただ歩いたり、手を上げたりという日常的な動作を要求された。けれどテイラーさんがカメラのシャッターを押す音に緊張して時々蓬田さんから注意を受けた。私には緊張するとネコ背っぽくなるクセがあるらしい。

着替えるたびに着心地なんかも訊かれて、出来るだけ正直に答えようと思ったけれど、すぐくおしゃれな服なので、無意識に遠慮してしまったところがあったかもしれない。と、いうのも、私が歩いている最中に蓬田さんがストップを掛けて、袖や襟に赤鉛筆で線を入れたり、あるいはもっと大胆にハサミをジョキジョキを入れてしまったりするのだ。私が下手な動きをしたせいでデザインが悪い意味で変更されたらその責任は重い。そんなことを意識し出したら、

また蓬田さんに注意を受けた。

「和美ちゃん、疲れた？ 休憩入れるわよ」

「あ、はい」

「近くのお店で軽く昼食とりましょう」

緊張の糸が解けて身体から力が抜ける。そのせいでぼうつとしたためか、お腹が空いてたためか、エレベーターで1Fに降りてきたとき、前で待ってた黒い服を着た男の子に気づかずぶつかってしまい、慌てて顔も見ず謝った。

## 第二十八話・初めてのメイク（後書き）

構想段階では和美のお化粧は、美術部の追い出しコンパで部長がするという予定でした。しかし年単位の時間をかけて書き進めていくうちに、その役目が和美の母親へと変わり、最終的に今回の蓬田へと変更になりました。おかげで美術部の部長が存在意義の薄いキヤラになってしまったのは作者の失敗です。

次回はモデルアルバイトの続きです。更新がノロノロで申し訳ありません。

## 第二十九話・口紅

私たちはファミリーレストランに入り、軽い昼食を採った。

「近いうちに日本に支社を作る予定なのよ」

食後のコーヒーを飲みながら、蓬田さんは私のアルバイトの意義について話をしてくれた。

「会社を興すときは向こうのほうがやり易かったからアメリカに渡ったけど、やっぱり日本で認められたいからね」

それで日本での商品展開のために、日本人の女の子である私をモデルにしたということだ。

「そう、それにデザイナーも、日本向けに増員したいから、嘴本君にも声を掛けているわけ。彼はデザイナーとしての経験は浅いけど、これからまだまだ伸びる才能を持っていると踏んでいるわ。和美ちゃんも彼と交流があったとは知らなかったわ」

そうやって私を見る。

「あのっ、でも私、嘴本くんの仕事について口を挟めるほど親しい訳じゃないですよ？ 同じ美術部だっていうだけで」

何も聞かれないうちに、自分から、親しくない、なんて言ってしまう。ちよっと痛い。

「そう？」

その窺うような目は、私の心の中にまで向いていそうに見えて、私は目を逸らした。

すると、河上さんが、社長、と何かを促すように声を掛ける。

「そうね、時間もあまりゆっくりしてられないし。ねえ、ちよっと和美ちゃん」

「はい？」

「ついでにリップも塗りましょ」

「え」

蓬田さんはハンドバッグから口紅を取り出して、それを指につけた。

「『え』じゃなくて和美ちゃん、『えゝ』って言って」

言うとおりに口を半開きにした私に指を近づけると、それで唇を横になぞった。

「うん、よし」

唇のふちをポケットティッシュでぬぐわれる。

河上さんとティラーさんも私を見てにっこりと頷いた。

渡された小さな鏡を覗くと、私の顔全体が映らなかったせいか、その唇は妙に艶やかに見えた。

「それじゃ、スタジオへ戻りましょう」

鏡を見ながらいくつもの衣装に着替えていると、前に彼と待ち合わせたときに、着ていく服で悩んだことを思い出す。

自分の容姿に自信がないから、綺麗な服を着てもそれに押しつぶされそうになっていた。だけど今は、ちょっとだけ綺麗にしてみらって、そのぶん、似合う服も増えた、ような気がする。いま、いろいろな服が着られるのが嬉しい。

新しいワインは新しい皮袋に、ってね。うん。

——会いたいな。

昼食後は緊張が解けてきたけれど、今度は反対に疲れが出てきてしまった。それでもコーデの楽しさで気を紛らわして32番目の撮影も無事終わった。

「お疲れさま。今日はありがとう」

「はい、ありがとうございました」

「それじゃ、リカ、メイク落として……ああ、メイク直してあげて」  
「え」

「お化粧して綺麗になったところ、お母さんとお父さんに見せてびっくりさせてやりなさい」

ふふふ、と笑う。私は顔が火照るのを感じたが、拒否しようとは全く思わなかった。正直、見せびらかしたいという気持ちは、私の中にもあった。

河上さんに今日のねぎらいの言葉を受けつつ、されるがままにまた顔をなでられる。ちよつとめんどくさいな、と思ったのは私のおしゃれに対する自覚が少ないからかもしれない。それが終わった頃、蓬田さんが近づいてきて私に白い封筒を差し出した。

「それじゃ、今日のアルバイト代。プロの子じゃないからちよつと少ないけどね」

「いえ、そんな。ありがとうございます」

すぐに中を確かめてみたかったが、お行儀が悪いのでぐっとこらえる。

「駅に戻る道はわかる？」

「あ、はい、大丈夫です」

「そう。こっちは片付けがあるから……一人で帰れる？」

「はい、今日は本当にありがとうございました」

そう言って3人に頭を下げて別れの挨拶をする。初対面だったけど、河上さんやティラーさんと同じ時間を長く過ごしたために、前々からの知り合いのように砕けた態度で接することが出来た。

エレベーターを降りると、ビルとビルの間の狭い路地に滑り込んで、封筒の中身を覗く。……15000円。確かに疲れたけど半日楽しませてもらってこんなにもらえることに驚いた。うちの近くのコンビニのアルバイトの時給を思い出して計算するが、それよりはあるかに高いお給料だ。これだけあったら、携帯電話買えるだろうか。値段はよくわからないけど、このお金があれば、買ってもいいかとお母さんに聞けるだろう。

駅まで戻り、定期が使えるところまでの切符を買おうとして路線



図を見上げ、頭の中に選択肢が浮かぶ。

——会いたい。

彼は文化祭の後は、自分のために創作したいと言っていたから、あのアトリエにいる可能性は高い。

メイクしてもらって増長していることは、自分でもわかっている。でも、やっぱり彼に見てほしい。

置き忘れていった私の帽子を取りに行く、という口実がある。

——会いたいよ。

自動販売機に硬貨を入れながら、ドドドド、と心臓が鳴るのを感じる。その鼓動は、電車に乗って、帰り道と違う方向へ向かうに従って、振動周期が短くなっていった。電車の窓に映る唇の紅さを見て、私は自分を勇気づけた。

秋も深まり、太陽が沈む時間もだいぶ早くなっている。その低い光に追われるように、いつもの駅から彼のアトリエに向かう足も速くなっていった。臆病風が何度も私を遮ろうと囁く。でも、どうとう私はアトリエが見える場所へと角を曲がった。

すると、前からタクシーが向かってきたので私は避けるために道路の端に寄った。ところがそのタクシーはアトリエの前で停まる。アトリエに来たお客さんだろうか。だとしたら、邪魔は出来ない。やっぱり戻ろうか。でも、ここまで来たのに。いや、タクシーには運転手さん以外乗っていないので、既にアトリエに来たお客さんを送るものだろう。だったら、ちょっと待てば。

私がオロオロとしていると、物音が聞こえて、アトリエのドアが開いた。私はつい、反射的に角に身を隠してしまう。そしてそこからアトリエ前の様子を窺う。これじゃストーカーみたいだ。

中から出てきたのは、予想通りの薫くんと……黒いサングラスを

した短い髪の女の人だった。仕事関係の人だろうか……違う！

心臓の鼓動のテンポが急激に変わった。

女の人は、薫くんの腕に手をまわしていた。まるで、それは……  
みたい。

タクシーの後ろのドアが開き、薫くんが紳士的に手を添えて彼女を乗せる。彼女の服装はいいセンスとは言えないが華やかなもので、あまり仕事中に着るものには見えない。顔の半分はサングラスに隠れているので、年齢はよくわからないが低く見積もっても二十代後半というところだろう。どういう関係の人なのか。

女の人が、何か薫くんに話しかける。何か言っているのは聞こえたが何を言っているのか聞き取ることはできなかった。

薫くんは彼女の声を聞こうとするように、身を屈める。そのとき、女の人が両手を伸ばした。

――！

ガツン、と私の脳に衝撃が走った。次の瞬間、ほんの刹那ではあったが何も見えなくなった。あれは、何？

私はその行為を知っている。少女漫画の中では無数に繰り返されてきた行為だ。私はそれを何度も見て、さまざまな感情を持った。けれど今の感情は、それらのどれとも違う。

タクシーが行ってしまった後も私は彼から目が離せなかった。ああ、私の視力ってどうなってしまったのだろう。視力検査では両方0.8の目なのに、彼の唇に移った口紅の色がやけに鮮明に見える。自分の唇に同じものがついていて、意識しているからだだろうか。

そして、ああ、見た瞬間、逃げればよかったのに、ズルズルと見続けているから……！

愚かな私が愚かな私を愚かだと罵る。

私の視線を感じた彼が、こっちを向いて、今までに見たこともない表情を見せたのだ。

何でそんな驚いた顔してるの？

いつもは女の子とイチャイチャしてても、余裕の笑みを見せている貴方が。

どうして、そんな、弱そうな男の子みたいな顔をしているの？

私は、彼を好きになってから初めて、彼をカッコよくない、と思った。

## 番外編その1・学園の女王様（前書き）

番外編です。和美は登場しません。

## 番外編その1・学園の女王様

夢を見ていた。

3年前、中学3年の冬、3度目の失恋をしたときの記憶を。

ひとり残されたその身体に、ちらちらと小雪が降っていた。

それは心の痛みを癒すにはいささか優しすぎて物足りなかった。

「あれ？ 宇佐美さんじゃない。そんなところでどうしたの？」  
「えっ？」

声のした方を振り返ると、そこにいたのは――。

夢はそこで途絶えた。

カンナはゆるゆると覚醒し、そしてぶるっ、と震えた。

――寒いっ。

11月も半ばになっていた。肌寒い日と暖かな日が数日周期で交代していたが今朝は冬の始まりを知らせるかのように冷え込んだ。

――だから雪の夢なんて見たのね。

布団は恋しいけれど、夢の内容はすぐにでも忘れたい。カンナは

起き上がって着替えを始めた。

宇佐美家では両親が仕事で忙しい為、食事の準備は長女のカンナがすることになっていた。料理をしていれば暖かくなってくるのはありがたかった。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

「んー？ お姉ちゃん忙しいんだけど」

小学6年生の弟の陽一が台所にやってきてカンナの背中をつんつん、と突付いた。

朝食を終えるとカンナは母親以外の家族の食器を軽く水で洗って、食器洗い桶の中に入れておく。後は母親がやってくれる。

母親の仕事は夜間なので昼間と午後は時間が空いているのだ。

「お姉ちゃんってば！」

「もう、どうしたの？」

カンナは少し苛立ちながら振り向いてしまった。

しかし次の瞬間、彼女は自分の態度を反省した。

陽一だけではなく、そこには小学1年生の妹のユリカも並んで立っていて、二人は同時に歌いだした。

「ハッピーバースデイ トゥーユー♪ ハッピーバースデイ トゥーユー♪ ハッピーバースデイ ディア カンナお姉ちゃん♪ ハッピーバースデイ トゥーユー♪」

「……」

「お姉ちゃん、18歳の誕生日おめでとう！」

陽一とユリカは、包装紙とリボンで包まれた箱を片手で半分ずつ持ってカンナに手渡した。

じわっと目頭が熱くなった。

今日が自分の誕生日であることは憶えていたが、弟たちがプレゼントをくれたのは初めてだった。

「あ、ありがとう。嬉しいわ」

「お姉ちゃん、泣いてるー」

ユリカが指摘する。そんな妹にカンナはうふふと笑ってみせた。

——嬉しい不意打ちだった。

通学中のカンナの頭の中でまだ弟たちの歌声がリフレインしている。

吐く息が白い程に外は寒かったが、プレゼントの手袋をはめた両手はとても暖かった。

あんまり嬉しかったので、うっかり次の角を曲がる前に、ゆるんだ顔を引き締めることを忘れるところだった。

——っと、顔を上げて。

——顎を反らして。

——髪をかきあげて目つきを変える。

——さあ、わたしは女王様。

「おはようございます！ 宇佐美さん！ そしてお誕生日、おめでとうございます！！」

角を曲がったところでは、十人の男子生徒が待ち受けていた。

十人分の声は結構な音量で、通勤通学中の人たちは驚いて振り返るほどだった。

彼らは、カンナと同じく中央高校に通う、彼女に好意を寄せる男

子達が集って結成した『宇佐美カンナ親衛隊』のメンバーだった。

「おはよう。皆さん。お祝いありがとう。今朝も元気そうね」

「はい、いつも宇佐美さんの美しいお姿を拝見しているおかげです。今日の誕生パーティー、僕らの気持ちを受け取ってください」

彼らは今日の放課後、あるレストランに予約をいれていた。

「ふふ。楽しみにしているわ」

カンナは、スッ、と鞆を持った手を伸ばす。

今日のかばん持ち役の男子が丁寧になんかを受け取る。

そしてクイーンとそのガーディアン達はぞろぞろと学校へ向かうのだった。

「それじゃ。ごきげんよう」

教室に着き、鞆を返してもらうとカンナは親衛隊に優雅に微笑んで見せた。

「はい。失礼します」

カンナはふふん、と笑って自分の席に着こうとした。その時。

「バツカみたい」

小さく、呟くようにだがハッキリ聞こえるようにその声の主は言った。女の子の声だった。



反射的にカンナはそちらを睨みつけた。

高校に入って約3年、自分への女子たちの陰口は幾度となく聞いてきた。

もう慣れてしまったようなものだが腹が立つことには変わらない。

——蓬田さんね…！

その蓬田美佳はカンナと目が合うと、べえ、と小さく舌を出して馬鹿にしてから目を逸らした。

せっかく今朝はいい気分だったのに台無しにされてしまった。

——何よ。

——わたしが予想外にモテたんでやっかんでいるだけですよ。

——ふん……、だ。

カンナは美佳に恩があるので本気で彼女を憎めない。

けれど高校に入ってからこれまでの間にすっかり仲は悪くなってしまった。

——あなたはわたしの過去を知っているから、わたしを嘲笑っているのじゃない。

カンナの意識は今朝夢に見た時間へと遡っていった。

## 番外編その1・学園の女王様（後書き）

続きます。

本編の続きはもう少しお待ちください。

## 番外編その2・雪の日の回想

その日、カンナは眼鏡の矯正をしてもらうために商店街の眼鏡屋へと向かっていた。雪が降っていた。

途中で偶然にクラスメートの鷹野貴一と出会う。彼とは中学の3年間全て同じクラスで、気さくに会話のできる友達だった。

貴一が「よお」と声を掛け、カンナが「はあい」と返す。彼も商店街に用事があったので二人は途中まで一緒に歩くことにした。

他愛ない会話を続けていた二人だったが突然カンナが悲鳴を上げた。

道には薄く雪が積もり、彼女はうっかり足を滑らせてしまったのだ。彼女のお下げ髪がびよん、と跳ねた。

「危ないっ」

あわてて貴一はカンナの身体を抱き支える。

「大丈夫か？ 宇佐美？」

「あ、ありがとう……」

「……」

「……」

二人は自分達の身体が密着していることに気づき、顔を赤くするとお互いに身体を離しかける。しかしカンナは離れてしまう直前で留まり、真剣な顔を見ると貴一のコートの袖を掴んだ。

「鷹野くん」

「な、何だよ？」

「大切なこと、言っておきたいの」

「え？」

「わたし……鷹野くんのが好き」

ちやうど裏通りを歩いているときで、二人の周りには人気がなかった。

カンナはこのチャンスを逃したくなかった。

「……」

とても長い沈黙がおとずれる。実際には一分と経たなかったのだろうが、カンナにとっては胸のつまるような時間だった。

貴一は黙りこくったまま怖いぐらいの瞳で地面を見つめ続けた。カンナは彼が口を開くのを待つ。

——お願い。鷹野くん！ わたしのこと嫌いじゃないなら鷹野くんもわたしのこと「好き」って言って！

「……宇佐美」

「うん」

「ふざけるなよ」

「え……？」

意外な返事にカンナは戸惑う。普段の彼はこんな荒い口の利き方はしない。彼は袖を掴んでいるカンナの手を払うと怒りと悲しみの混じった声でカンナの方を見ずに続けた。

「俺だったら簡単にOKするとも思ったか？」

「えっ？」

「三好と桜庭」

カンナの身体はその二人の名前を聞いてぎくりと硬直した。

「どうして……どうして知ってるの!？」

それはカンナがかつて告白したことのある男子の名前だった。

「そういう話題になったんだよ。修学旅行のときに」

修学旅行の夜に、男子だけが集まって好きな女の子の名前を言い合うことはよくあることだが、さらに彼らはその流れで自分に告白したことのある女の子を暴露していったのだという。

——それって酷くない!？」

胸がぎゅ、と痛んだが声には出せなかった。

「そりゃ、俺はともじやないがモテるタイプの男じゃないさ。あいつらと違ってカッコ悪いし、運動神経もイマイチだし。だけど俺にだってプライドはあるんだぜ？」

「……っ」

「馬鹿にするな。俺は『滑り止め』なんかじゃない！」

受験生のせいか、口から出たのはそんな喩えだった。

「そ、そんなつもりじゃない。わたしはっ！」

言葉が繋げなかった。その二人に告白した頃、カンナにとって貴一は仲のいい男子ではあったても恋愛対象ではなかった。ただ何となく側にいて安らげる人。カンナがそんな彼の事を好きだと思いうようになったのはつい最近のことだった。

「俺、先に行くわ。じゃあな」

逃げるように貴一は駆け出した。

ショックでしばらく呆然としていたカンナだったが、やがてふつふつと怒りが湧いてきた。

——酷い。酷すぎる。

——必死の思いで告白した女の子のことをペラペラ他人に喋ってしまうなんて。

——いくら何でもやっていいことと悪いことがある。

そう思うと、それまで憧れの対象だった彼らの顔がとても憎たらしいものに見えてきた。カンナは時々男子が自分の方を見てニヤニヤ笑っていることがあったことを思い出し怒りを再燃させた。

——わたしの名前が二度出てきたとき、さぞかしいいネタになったでしょうね。

——哀れな女のレッテルを貼って笑いものにしたんでしょうね。

——わたしは自分でもあんまり可愛くない女の子だということは分かっている。

——だから振られてしまうのは仕方が無い。

——だからって！

カンナは拳を握り締めた。雪の粒が拳に当たって解けて水滴になった。

その水滴の中に一際大きなものを見つけたときカンナはそれが自分の悔し涙だと知った。

「あれ？ 宇佐美さんじゃない。そんなところでどうしたの？」  
「えっ？」

声のした方を振り返ると、そこにいたのは――。  
クラスメートの蓬田美佳だった。

……………。

「サイテー。男子、そんなことしてたんだ」

カンナは美佳に喫茶店に連れてこられた。

校則違反なのでカンナは落ち着きなく当たりをキョロキョロ見回していたが美佳は慣れた態度で紅茶を二つ注文した。

ふたりは特に親しい間柄ではなかったが、美佳が優しく事情を訊ねてきたのでカンナは少しずつ話し出した。

「宇佐美さん、プラス思考で行こうよ。そんな女の子の気持ちを踏みにじるような奴とくつついたって幸せになんかなれないって」

「ん……」

「だいたいね、男子はガキなのよ。アツタマ悪くて乱暴でガサツで」「ガサツ……うん、そうよ。この間も廊下で男子とすれ違うときちよつとぶつかっちゃったんだけど、謝りもしないでヘラヘラ笑いなから逃げてくの」

「ああ、わたしのときなんか……」

「そう言えばこんなことも……」

それから二人は男子の悪口に花を咲かせた。カンナの気持ちもそれで少しは晴れた。

喫茶店を出るとカンナは美佳にありがとう、と言ったが美佳は横

に首を振った。

「ねえ、宇佐美さん。男どもを見返してやりたいと思わない？」

「えっ？」

「うんと綺麗になって、今度は男の方から告白させるのよ」

「それは……そんな風にできればいいかもしれないけど、わたしには無理よ」

「そんなことないよ。例えばさ……」

うつむくカンナに対し、美佳はニヤリと笑ってみせた。

「ねえ、もうちょっとわたしに付き合わない？ 最近ナチュラルメイクに凝ってるんだよね」

美佳はカンナの手を引っ張って歩き出した。よろけたカンナは、不自然に一步踏み出したが、それが大きな一步になるということにはまだ気づいていなかった。



### 番外編その3・薔薇のつぼみ（前書き）

「マリア様がみてる」とは関係ありません。

### 番外編その3・薔薇のつぼみ

全ての授業とHRが終わり、カンナは鞆を持って席を立ち上がった。

今日の放課後のパーティーはめいはいっぱい楽しんでやろう。

カンナは美佳の席の方を見ずに教室を出る。既に彼女よりも早くHRの終わった親衛隊のメンバーがカンナを待っていて会釈をした。

「それじゃ、帰りましょうか」

「はい！ 宇佐美さん！」

一旦家に帰って着替えてからパーティー会場のレストランへ行く予定だ。カンナは親衛隊のリーダーと待ち合わせの場所と時間を確認する。彼女は私生活を見られなくなかったので、決して自宅付近を待ち合わせ場所にはしない。

「……っていうのはどうでしょうか？」

「そうね、それはわたしにふさわしい趣向かもしれないわ」

親衛隊の一人の質問に答えるためにカンナは振り向いて答える。

「あっ、宇佐美さん。前！」

「きゃっ！」 「ひゃっ！」

カンナは前方の廊下の角を曲がってきた女子生徒に気づくのが遅れて衝突し、同時に小さな悲鳴を上げてよろめいた。彼女は親衛隊に支えられすぐに体勢を整えたが、もうひとりの女子生徒の方はそのまま床に尻餅をついてしまった。

カンナが彼女に声をかけようとしたとき、脇から大声で怒鳴りつ

ける声が発せられカンナは言葉を呑み込んだ。

「馬鹿野郎！ 危ねーじゃねーか！」

親衛隊のメンバーだった。幼さを残した顔立ちであることから1年生のようだ。

「ご、ごめんね。勇ちゃん」

「宇佐美さんに怪我があったらどうするんだ」

「ごめんね……」

「まったく、ノロマのボケがあ……」

びくん。

女子生徒の顔を見ていたカンナの目蓋がかすかに震えた。そして、身体中がたちまち熱を帯びる。カンナは怒りを込めて足音を立て、一歩踏み出した。そして座ったままの女子生徒に手を伸ばす。彼女は勘違いしたのか、ごめんなさい、と顔を伏せた。

「別にあなたが謝る必要はないわよ。ほら。手を貸してあげるから立ちなさい」

「すみません」

今の言葉はありがとう、という意味のようだ。

彼女を立ち上げさせると、カンナは怒鳴りつけた男子生徒をキツと睨みつけた。

「どういうつもりよ！？ 女の子が倒れたのならまず助けようと手を差し伸べてやるのが礼儀でしょ？」

「え、あ、そのオレ、いえ僕は……」

「それとも何？ 貴方、わたし以外の女の子にはいつもこういう態度とっているの？」

「あの、そうじゃなくて、僕はこいつと…」

「ああ、不愉快だわ。女の子をそんな風に扱うような人に、わたしを祝ってもらいたくはないわね。パーティーは中止よ、中止。わたし一人で帰るわ」

「宇佐美さん！」

親衛隊の中にどよめきが走る。親衛隊の一人が大またで歩き出したカンナを引きとめようと駆け寄った。

「う、宇佐美さん」

「ついてこないで。怒るわよ」

大げさに彼を振り払う仕草をするとカンナは速足で歩き出した。背後がうるさくなったがそれを無視した。

——ちよつと怒りすぎたかしら。

今日は昔のことを思い出しすぎたためか、感情が過敏になっていた。

デリカシーのない男子の犠牲になる女子生徒の姿に、カンナはつい自分を重ね合わせてしまった。

あれから必死の思いで自分を変え、男子からはチャホヤされるようになった。向こうから下手に出られたカンナは、自己の中に眠っていた新たな側面を目覚めさせるようになった。見下した態度をとることが心地良く、そして相手もそれを望んでいるかのように思えた。そうやって過去に復讐し過去の惨めな思いを忘れることを覚えた。

けれど忘れていられるのは一時的なもので、今日のようなことが

起こると自分のことのように腹が立ってしまう。しかもその相手が、自分が何を言っても従ってくれる親衛隊だったとなれば尚更だ。

——わたしは間違ってない。

カンナは気晴らしにデパートに寄ってウィンドウショッピングをすることにした。

——あ、そうだ。今日の晩御飯のこと、連絡しておかなきゃ。

カンナはデパートの入り口のそばの公衆電話へ向かう。

『はい、宇佐美です』

『もしもし。あ、ユリカ？ お姉ちゃんです』

『うん』

『今日ねえ、高校の人とお姉ちゃんのパーティー無くなったから』

『えーっ。じゃあ、普通のごはん？』

弟達には今日は自分はパーティーに出掛けるから出前をとっていいよ、と告げていた。

カンナや弟達の誕生日は宇佐美家のご馳走の日であり、みんなその日を楽しみに待っているのだ。

「お姉ちゃんのご馳走作ってあげるから。お姉ちゃんの誕生日パーティーはうちでするからね」

『ホント？ じゃあ、それでいい』

現金な妹がおかしくて愛しかった。  
カンナはそこではた、と気づいた。

——そっか。あの子達、今晚わたしが遅くなることを知ってたから朝のうちにプレゼントを……。

胸が暖かくなる。その後、カンナは陽一に電話を換わってもらうと、今日の晩御飯（誕生パーティー）用の買い物を手伝ってくれるように頼んだ。

デパートのあちこちの売り場にはクリスマスツリーが飾られていた。

——ああ、あと一ヶ月ちよつともすればクリスマスなのよね。

そしてカンナはそこから学校主催のクリスマスパーティーのことを連想した。

——今年のクリスマスには何を着ていこうかしら。

中央高校の理事長は、日本でも有数の富豪、宝源寺家ほうげんじの人間である。理事長の邸宅は高校からそう遠くない場所にあり、毎年豪華なクリスマスパーティーが開かれる。それには中央高校の生徒も自由に参加してよいが、校内には、招待状を直々に送られる生徒もいる。その選定基準は定かではないが、成績が優秀であったり、部活で活躍したり、クラスのまとめ役をしていたりと、いい意味での有名人に送られるのは確かなようだ。招待状をもらうのは、中央高校生徒の名誉でありステータスであるとも言えた。

カンナもまた1年時、2年時とそれを受け取っている。今年もちろんもらえるだろう。校内のカリスマがそろう中、いかに自分を目立たせるか、カンナはそれについて思いを巡らせた。

——そうそう、ユリカにクリスマスプレゼント用意しなきゃ。

クリスマスパーティーに参加する代償として家族とのクリスマスは放棄しなければならないのが少々心苦しいが、彼女は家族というしがらみから抜け出すことにも密かな快感を得ていた。そのかわり両親がする妹へのプレゼントの相談には彼女も加わっている。

——お父さん、今度こそボーナス出るかしら。出てほしいけど。

カンナの足は洋服売り場からおもちや売り場へと向かっていた。宇佐美家にはサンタクロースのプレゼントをもらえるのは10歳まで、というホームルールがある。

これは3人のきょうだいがいるため生活にあまりゆとりがなく、プレゼント代が馬鹿にならないのでカンナの両親が考え出した苦肉の策だった。

——そう言えばユリカったら昔『サンタさんは世界中の子供達にプレゼントしてお金大丈夫かなあ』なんて言ってたっけ。

——お母さんかわたしが家計簿を見ながらため息ついているのを聞いてたからあんなこと言ったのよね。

——いちおう、陽一にはサンタクロースの正体について口止めしているけれど。

——子供の夢を壊しちゃまずいわよね。

腕時計を見ると随分時間がたっていることがわかり、カンナは駆け出した。

——早く帰って準備をしないと。あの子達がお腹を空かせて待っている。

次の日の親衛隊の朝の挨拶には元気がなかった。

「宇佐美さん。昨日は不愉快な思いをさせてしまって申し訳ありませんでした」

一斉に彼らは頭を下げた。

「今度からは……気をつけることね」

「はい」

「ところで、当の彼は？」

「戸中は責任を取ると言って親衛隊の活動を自粛しています」

「そう」

それくらいのにけじめをつけてもらえば、彼らを許す口実にはなるだろう。

そして親衛隊のリーダーがせめてプレゼントだけでも、と昨日渡す予定だった誕生プレゼントの箱をカンナに差し出した。カンナはあくまで尊大な態度を崩さずそれを受け取った。

「ありがとうございます。プレゼントにはお礼を言っておくわ。でも今日いっぱいまでは、わたしを一人にさせて。昼休みや放課後には来ないでちょうだい。まだ完全に許したわけではないから」

「はい、承知しました……」

落胆する親衛隊を後に、カンナは彼らと反対側の歩道を歩き出した。



昼休み、カンナは今日の昼食をどこでとるかしばし考えを巡らせる。なんだかんだ言っても結局のところ独りの昼食は寂しい。と、そこに元気な女の子の声が聞こえてきた。

「宇佐美先輩！」

「えっ？ あ……」

カンナが顔を上げると、教室の入り口のところに一人の女子生徒が立っていた。昨日学校でぶつかった娘だった。彼女は3年生の教室だと言うのに怖じることなくカンナの席の側までやってきた。

「昨日はありがとうございます。わたしは1年C組の明石っています。明石真実です」

「そう。ま、気にしないでいいわよ。当然のことでしょう？ ……」

ああ、わたしの昼食、広げてよろしいかしら？」

「あ、すいません。どうぞ。……嬉しかったです。宇佐美さんに手を貸してもらえて」

「あそこで手を差し伸べることができないなんて……。全く、あの人のことではわたしの方が恥ずかしいわ」

「それで勇ちゃんに親衛隊を辞めさせたんですか？」

「『勇ちゃん』？」

それが昨日、真実をなじった親衛隊メンバーであると思い当たるのに2秒近く時間を要してしまった。

「ああ、彼、彼ね。『勇ちゃん』って、彼、あなたの知り合いなの？」

「あ、はい。戸中勇はわたしと幼馴染なんです」

「そう……って別にわたし彼を辞めさせた訳じゃないわよ。彼はじしゅ……」

カンナの言葉が終わらぬうちに彼女は訴えだした。

「勇ちゃんをあんまり怒らないでやってください。元はと言えばわたしが悪いんです。わたししてば、どん臭くさくて、いつも失敗ばかりしてて、勇ちゃんにもいつも怒られてばかりなんです。そう、いつものことですから大げさに取らないで下さい」

「……」

「お願いします！ 勇ちゃん、高校に入ってから宇佐美先輩のことを知って、本当に幸せそうなんです。親衛隊の活動をしているあいだの勇ちゃんの目って活き活きとしていてるんです。わたしに免じて勇ちゃんを許してやってください」

——そういうこと。この娘、彼のことを。

どことなく自虐的な言動はカンナの癪に障ったが必死なことは伝わった。

「わかったわ。わたしから彼に言っておくから」

「ありがとうございます。よかったあ」

胸に手を当てる仕草はなかなか可愛かった。

「実はわたしも宇佐美先輩のことは前から憧れていたんです」

「え？」

「美人だし、センスもいいですし」

「そ、そう？」

同性から容姿について褒められたのは久しぶりだった。ちょっとキレイだからっていい気になるな、という匿名の手紙をもらったこ

とはあるが、イヤミのない、同性からの褒め言葉はなんだかくすぐったい気持ちだ。

「それにプロポーションも抜群だし。やっぱり、何か特別なことなさっているんですか？」

「特別って何よ」

真実の視線が自分の胸に刺さっているのを感じてカンナは顔を赤らめ身体を捻って避けた。こっちのほうは高校に入ってから勝手に膨らんだものだ。別に努力したというものでもない。

「あわわ、そっちのほうじゃなくて。今は、つい目が」

否定のためにわたわたと手と顔を振る仕草があまりにも可愛いのでカンナはクスッ、と笑ってしまった。真実も照れ笑いをする。そして二人はそのまましばし雑談に興じた。

「ほら、このおかず1個あげるわよ」

「わ。ありがとうございます……ごくん」

やがて昼休みも終わる頃になって、真実はそれじゃ戻ります、と小さく頭を下げた。

「わたし、前から宇佐美先輩とお近づきになりたいと思っていましたけど、思っていたよりずっと話しやすい人で嬉しかったです。それじゃ」

「ええ、それじゃ。……あつ、待って」

「はい？」

去る前に、一言だけ。

「よかったら、明日の昼休みも一緒にお昼いかがかしら？」  
「！」

その笑顔。

「はい。喜んで。明日はちゃんと自分のお弁当を持ってきます」

カンナは無意識のうちに自分が小さく手を振って去っていく彼女を見送っていることに気づいた。なんで初めて会ったばかりの1年生のコとこんなに楽しく話せたんだろう。

——あの娘が自分の過去と重なったから？

——なんてね。分かってる。わたしが、女の子との無駄話に飢えてたのよ。

男の子達は一生懸命カンナを楽しませる話題を考えてくれる。

でもやっぱり、女の子同士だからこそ盛り上げられる話題というものもあるのだ。

カンナはクラスメイト達が自分の方を珍しそうな目で見つめていることに気づいたが無視することにした。

中央高校の名物である「宇佐美カンナとその親衛隊」の図に変化が現われたのはそれからまもなくのことだった。カンナの隣には、地味な——カンナの隣にいるから地味に見えるのかもしれないが——容姿の1年女子が寄り添う姿が付け加えられた。

「ほら真実、ちゃんと顔上げて、胸張って歩きなさい」

「はい、お姉さま」

「わたしの隣を歩くからには、それなりの様式ってものが必要なの

よ」

「はい。おねーさま」

——宇佐美カンナが女王様なら、明石真実は王女様か。

——いやいやお嬢様キアラに、取り巻きが付くのは漫画でもお約束だ。遅すぎたくらいだ。

彼女たちについて様々な噂が流れた。

## 番外編その4・小さなケンカ

「あんた、最近は男だけじゃ飽き足らず女の子にも手エ出してるんだ」

美佳の言葉でカンナの顔にみるみる血が上った。

「そういう品の無い表現はやめて頂けるかしら？」

「まあ、今のは単なる挑発だけだよ」と、美佳はぬけぬけと嘯く。

カンナと美佳のクラスは自習時間だった。最近ではまともに口もきいていなかった美佳がどういうつもりかカンナにからんできた。教室内は皆が好き勝手に勉強しているかおしゃべりしているか寝ているかだったので、二人に特に注目している者はいなかった。

「あの娘を2代目『学園の女王様』にでもするつもり？」

「そんなことあなたに関係ないでしょ」

カンナは突き放したように美佳に言い放つ。美佳はからかい口調をやめ、真剣な顔になった。

「……あたしさあ、確かにあの時あんたに綺麗になって男を見返してやれって言ったけど今はそれを後悔してる」

「何よ今さら。自分から持ちかけたクセに。わたしは満足しているわ」

「言っておくけど、わたしに言わせればあんたはあの頃より綺麗になってなんかいない。むしろ悪くなっているわ」

「！」

「わたしは本気でそう思っているからそう言ってるだけ。あの頃の

あんたは確かにパツとしない女だったけど、目はキラキラ輝いていた。振られても振られてもめげない強さは持っていた。でも今のあんたは、男にちやほやされればされるだけ、目の輝きを失ってしまったのよ」

「このっ……！」

「ハッキリ言ってあげようか。あんたは取り巻きの男がいなくなるのを恐れて恋の出来ない女になってる」

「なっ！」

カンナは平手を振り上げた。しかし美佳の頬を張る前に美佳自身の手でそれを止められ膠着状態になり二人はにらみ合った。

「あたしはあんたのことが嫌い」

「わたしだってあなたのことは嫌いよ」

「でも、あんたはあの娘のことは好きなんですよ？」

「……またそっちの方向に話を持っていくとするわけ？」

「カンナ！ マジな話よ。聞いて。あの娘を見ている間だけは、あんたの目は昔みたいに優しいんだよ。それに自分で気づいてる？」

「……」

「そんなに好きなら、いつまでもあの娘を生殺しの状態にしておく訳にはいかないでしょうが」

「真実が、何だっていうのよ？ 生殺しって何よ？」

「気づいてないとは言わせないからね。あの娘の視線が、あんたの親衛隊の中の一人の男の子に注がれているってこと」

「……それは……知ってるわよ」

「でもその男の子は彼女を見ていない」

「……」

「残酷なことをしてるって気づかない？ それとも彼女を『学園の女王様』にして恋を忘れさせる？」

「……知った風な口を聞かないで。だから……わたしは……真実と

一緒に行動していたのよ。あの娘が彼の側に少しでもいたいと思っていると思ったから」

「バカじゃないの？」

「あなたに馬鹿呼ばわりされる筋合いはないわ」

美佳の手を振り払うと彼女は押し黙った。

2学期の期末テストが終わるとカンナと真実は一から約束していたデートに出掛けた。

しばしショッピング街をぶらついた後、一息つくためにとある喫茶店に入った。ちょうど二人用の席が空いており、カンナと真実はそこに向かい合って座った。

「もうすぐ今年も終わりですね」

「そうね。年が明けたらセンター試験、そしてすぐ本試験、それが終わったらもう卒業ね」

カンナは既に来春からプロとしてモデル事務所に所属することが決まっていたが、両親から浮き沈みの激しい業界だからいざという時のために大学で勉強しておきなさいと言われていた。

「早いですね。わたし、お姉さまと別れたくないです」

「そうね」

出会ってからたった一ヶ月なのにカンナも同感だった。



——でも、わたしが卒業したら親衛隊も解散。その時、戸中くんは真実の方を向いてくれるのかしら？

そしてカンナは美佳と口論したときのことを思い出していた。

——わたしがしようとすることはただのおせっかいかもしれない。でも、卒業までに真実には一度でいいから何かしてやりたい。

「ねえ真実、戸中くんの事、好き？」  
「んんっ!!」

カンナのストレートな質問に、真実は吹き出しそうになるのを堪えて慌てて口元を押さえた。

「突然何を言い出すんですか、お姉さま」

「好きなの？」

「……勇ちゃんは……勇ちゃんとは幼馴染みですから、わたしの気持ち持ちは……その……」

「好きなのね？」

「………はい」

真実は耳まで真っ赤になった。

「でも……勇ちゃんは今、お姉さまに夢中じゃないですか。だからよしましうよ。そんな話」

あまりにも分かりやすい作り笑いを見せる真実にカンナは眉をかめた。

「馬鹿ね。彼がわたしへ向けている感情は全然質が違うわよ。ほら、

テレビに出てくるアイドルに向けられるようなものよ。安心して。わたしが卒業したらすぐに醒めるわ。だから……」

カナナは真実を力づけるつもりでその言葉を口にした。

「お姉さま……！」

真実は一瞬うつろに目を見開いた。

「真実？」

彼女はカナナと目を合わせるのを嫌がって意図的にうつむいた。

「いくらお姉さまでも、怒りますよ」

「え……？」

いつもと明らかにトーンの違う低い声。カナナは背筋がぞくつとした。

「どうせすぐに醒める想いだから……本気じゃないと思って親衛隊にしたんですか？ そんなの……そんなのって勇ちゃんに凄く失礼なことだと思います！」

「真実！」

「勇ちゃんが初めて夢中になった人なんです。お姉さまは。親衛隊の一員になったときは本当に嬉しそうでした。

お姉さまにとっては、言い寄ってくる男の人たちが多すぎて存在が薄く見えてしまうのかもしれないけど、決して想いまで薄いわけじゃありません！ だから……今の発言だけは……許せません」

「ちよっと待って。わたしそういう意味で言ったんじゃない……わたしはただ、仲を取り持ってやりたくて……」

「わたしは、勇ちゃんが幸せならばそれでいいと思ってます。たとえ勇ちゃんの幸せのフアクターにわたしが組み込まれていなくてもいいんです。わたしの『勇ちゃんのことが好き』っていう感情は変わりません。でもお姉さまがそんな風に思ってたなんて……悲しすぎます」

うつむく彼女の目から雫がこぼれ落ちた。

「ごめんなさい。お姉さま。わたし、今お姉さまの顔、見られませんか」

真実はバッグから財布を取り出すと不器用にジャラジャラと小銭を取り出してテーブルの上に置いた。そして、ごめんなさい、ともう一度呟いて喫茶店を出て行った。

これまで男達を愚弄してきたことは自分が承知の上でやってきたことだったが真実の涙には胸が痛んだ。

次の日、真実がカンナのところに来ることはなかった。

——やっぱり、わたしから謝るしかないか。

家に帰るとカンナは真実の家に電話をかけた。真実の母親らしき婦人が出たので、挨拶をして真実に替わってもらった。

「はい。真実です。お姉さま？」

「そうよ。迷惑だったかしら？」

「そ、そんなことはありません」

「昨日のこと、謝っておきたくて」

「いえ……わたしこそごめんなさい。酷い言い方しちゃって」

「ううん。わたしももっと気をつかうべきだったわ。悪かったと思ってる」

「……あれからずっと自分の想いを整理していました。わたし、勇ちゃんの幸せのため、なんてカッコいいこと言っちゃって本当はズット我慢していたんです」

——そうね。それが自然な心の働きよね。

「お姉さまにも凄く嫉妬していたんです。その気持ちを押し殺すために自分もお姉さまのいいところを見つけよう、お姉さまを好きになろうって自分に言い聞かせてきたんです」

——そっか。この娘、本当に……本当にどうしようもないお人よしなのね。

真実が自分を好いてくれた理由が分かったが、カンナは彼女が愛しくなるばかりだった。

「だからお姉さまの言葉を聞いて、自分が我慢してきたことがものすごく無意味な気がして……」

——やっぱりこの娘には何かしてあげないと。

「真実」

「はい」

「それじゃ、お互いに悪かったということで。仲直り」

「はい♪」

「実はね、今度の学校のクリスマスパーティー、わたし、招待状を貰っているの。だから真実、一緒に行きましよう？」

「え？　は、はい。わたしでよければ」

「ん」

ほっとしてカンナは真実のために一計を案じた。

## 番外編その5・サンタクロースなんていない

「お姉さま、なんでこんな時間にわたしを呼んだんですか？」

クリスマスパーティーの当日、カンナは出掛けるにはまだ早すぎる時間に真実を呼び出し、彼女を自宅へと招いた。

時間のことも勿論だがカンナは親衛隊も自宅に寄せ付けないようにしていたので真実は不思議がった。

「わたしから真実にクリスマスプレゼントがあるのよ」

「プレゼント？」

二人が家に上がると、小学生くらいの男の子が一人、玄関にやってきた。

真実はこんにちは、と笑顔であいさつする。

「あー、この人、お姉ちゃんの友達？」

「陽一、ちゃんと挨拶しなさい。……そう、お姉ちゃんのお友達。あんまりドタバタとうるさくしちゃ駄目よ」

真実が居間の方をちよつと覗いてみると、カンナの妹らしい女の子がクリスマスツリーの飾り付けをしていた。

「こっちよ」

カンナの声に導かれ、真実は彼女の部屋へと案内される。華やかだがきちんと整頓された感じのいい部屋だった。カンナは真実をベツドに座らせた。

「クリスマスパーティーはね、一応自由参加だけど、身なりを最低限きちんとしていないと入れてもらえないのよ」

「ああ、そうなんですか。当然と言えば、当然ですね」

「そう。だから今日は、わたしが真実にめいっばいおしゃれしてあげる」

「えっ！？ この格好じゃ駄目ですか？」

「服はそれでいいわよ」

そう言いながらカンナは鏡台の引出しから自分の化粧道具を取り出した。

「わわっ。駄目です。お化粧はっ！ わたし化粧は似合わないんです！ 前にお母さんの化粧品を使ったらお化けみたいになっちゃって……」

「バタバタ暴れないで。真実。それはただ真実の化粧の仕方が間違っていたというだけ。正しいやり方をすれば誰もが美人になれるのよ」

ずっと前、美佳が自分に言った言葉を思い出す――。あの時の美佳の立場に今は自分がいる。

「わたしを信じて。真実。絶対綺麗にしてあげるから。わたしが言うのだから信じてくれるでしょう？」

「う、わかりました」

「ん。それじゃ、まず洗顔から」

カンナは、ぽん、と真実の背中を叩いた。

――絶対綺麗にしてあげる。

.....  
.....。

他人に化粧をするのは初めてだったので、1時間の格闘の間に何度か失敗もした。だが最終的には満足のいく出来になった。

そして更にカンナは真実の髪の毛を丁寧に編み上げた。カンナの妹、ユリカはまだ髪質が幼くてこういうのが出来ないため、勝手がわからなかったが、思っていた以上にうまくできた。

「ほら、完成」

「.....」

「どう？」

「お姉さま」

「ん？」

「あの……自分で自分を褒めていいですか。……ハッキリ言ってますごく綺麗です！」

「ん。わたしもそう思う」

「凄いです。さすがお姉さまです。わたしみたいなのがこんなになれるなんて……」

「ふふ。それじゃ、いいものを見せてあげる」

カンナは机の引出しから何かを取り出すと、それを真実に差し出した。

「それが、3年前のわたしの写真よ」

「えっ……ええっっ！！ 嘘っ！！ だって、こんなに地味……」

真実は大声を挙げて写真と本人を何度も見比べた。

「そう、そんな冴えない女の子でもテクニック次第でこうなるのよ。」



わたしが実証したわ」

「……！」

「だから、真実を美人にすることなんてわたしにしてみれば簡単なことなのよ」

「お姉さま……嬉しいです。素敵なクリスマスプレゼントです！」

「ん、それじゃ時間もちょっどいいことだし、そろそろ出掛けましょうか」

「はい！」

冬の太陽は早く沈むので辺りはもう暗くなっていた。

カンナと真実が街へ出てみると、今夜はいつもよりも出歩くカップルの数が多いような気がした。

「ちょっと待って」

カンナが駅前広場のところで立ち止まる。広場は本物の木を利用した大きなクリスマスツリーのイルミネーションで飾られていた。そのまわりには多くのカップル集まっていて、何か幸せそうに語っている。

「どうしたんですか？」

カンナは腕時計を見てあたりをきょろきょろする。

「そろそろ来るはずね」

「『来る』って？」

「あっ、来たみたいね」

「えっ？」

真実はカンナと同じ方向を向く。

しかし、そこからこちら側に向かってくる人物の姿を見たとき、彼女は踵を返して逃げ出そうとした。

「逃げちゃ駄目」

カンナは真実の手首を掴んで離さない。

「宇佐美さん！ 遅れてすいません。……って、あれ？」

カンナの親衛隊の一人、戸中勇だった。

「よく来てくれたわね」

「もちろん！ 宇佐美さんのお誘いを断ることなんて決していたし  
ません！ でも、どうして真実が？」

「お姉さま……こういうことだったんですか？ だったら帰ります」  
「駄目よ。……戸中くん、実はね、今日はあなたを真実に会わせた  
くて呼んだのよ」

「どうして……」

「ほら、真実。ちゃんと顔を上げて。せっかく綺麗にしてきたんだ  
から」

「……………」

おずおずと真実は顔を上げた。

「えっ、あれっ？ 真実……だよな」

「勇ちゃん。おかしくない？ 変じゃない？」

「何か……あれ？ 顔のパーツは全部真実なのに……あれ？ 別人  
みたいだ」

勇が、真実に見とれている。カンナはその反応だけで充分に手ご

たえを感じた。

「どう？ 戸中くん」

「綺麗……です。あ、いえ、宇佐美さん、その……」

「わたしのことはいいから。真実の方を見て言っただけ」

「真実」

真実と戸中がしばし見つめ合う。その二人をカンナが見つめる。

「正直、驚いた。俺……おまえがそんなに綺麗になるなんて思わなかった」

「ありがとう。……お姉さまに全部やってもらったんだけどね」

「それは違うわよ、真実。あなたの心の中に綺麗になりたいという想いがあったからこそ、こんなにうまくいったの。わたしが手伝ったのは技術的な部分だけ。真実はね、今日、あなたのためにここまです綺麗になったのよ」

カンナはでまかせをもっともらしく語った。違う、と口にしようになる真実を手の甲でそっと止めた。

「今夜は特別な夜。戸中くん、今夜だけでもいいから真実の想いを受け止めてあげて。想いの強さならここにいて誰よりも真実が一番なのよ。だからわたしからのお願い。真実に付き合っただけ」

「……」

「戸中くん。返事して」

「勇ちゃん。嫌なら無理しなくてもいいんだよ」

「嫌じゃないさ……嫌じゃない。そんな情けない顔するなよ！ せっかく綺麗になったんだろ」

「……」

「真実が俺のことどう思っているか……ってのは薄々気づいてた。

だけどお前、俺の前だといつもビクビクしててそれが嫌だったんだよ。ああいうの結構傷つくんだぜ」

カンナは二人の手を引いて近づけさせた。

「真実はね、臆病になりすぎてそれが美しくなることの妨げになってしまったの。そして戸中くんはそれが嫌で、代償的にわたしの美しさに惑わされただけなのよ。二人はちよっとすれ違ったただけなの」

妹と弟をあやすように優しくカンナは語った。

とはいえ、カンナはいつ自分のでまかせと詭弁を看破されるかもしれないと内心ビクビクしていた。

「お姉さま……」

「宇佐美さん。俺、今日だけは――すいません、真実の為に時間を使います」

カンナは大人びた微笑を浮かべる。

「さあ、クリスマスパーティー、いってらっしゃい」

「えっ、お姉さまは？」

「わたしはお邪魔虫になりたくないわ」

「そんな。駄目ですよ。元々招待されたのはお姉さまじゃないですか」

「真実、わたしに一度くらいはお姉さまらしいことをさせて。ね？」

「……」

「これがわたしからの本当のクリスマスプレゼントなのよ。受け取って」

「……ありがとうございます。お姉さま。最高のプレゼントです」

真実はカンナの首の後ろに手を回して抱きついた。

——がんばって、真実。あとはあなた次第よ。

二人が伊集院家に向かったのを見届けるとカンナは空を見上げた。サンタクロースはタダで子供達にプレゼントを配るけど、損をしたなんて思わない。なぜなら子供達の笑顔こそが、サンタクロースへの何よりの報酬なのだから。

——めでたしめでたし、ってところかしら？

ぽつ…。

冷たい水滴が頬に当たった。

——あつ、雪……。

黒い空から白いかけらがクリスマスツリーの光を受けてゆつくりと落ちてきていた。

駅前の何組ものカップルも同時に気づいて歓声をあげた。

「雪だわ！ 雪！ 素敵！」

「ホワイトクリスマス、か。ロマンチックだな」

クリスマスイヴに雪が降るなんて本当に久し振りだ。

今宵はサンタクロースが恋人達にプレゼントをしたとでもいうのだろうか。

——不意に。

カンナの心に何かが差し込んできた。

邪な感情が突然沸き起こることを「魔が差す」と言うが、寂しさの感情が突然沸き起こることは何というのだろうか。

真実に嫉妬している。恋愛をしている彼女に嫉妬している。

――サンタさん。

――もしあなたが本当にいるのなら。

――わたしが見失った「恋」をください。

雪は止むことなく、降り続ける。

――なんてね、さあ、帰ろう。今年は家族とクリスマスなんだから。

カンナは自宅の方向へ足を向けた。

「宇佐美！」

カンナは初め、雑踏にまぎれてその声が自分に向けられたものだと気づかなかった。

もう一度、宇佐美、と呼ばれたときにそちらを見て彼女は我が目を疑った。

彼は少し遠いところにある高校に進学して、今は下宿生活のはずだ。その彼がどうして？

――まさか。

――本当に。

――サンタさんが。

彼は、よお、と片手を上げた。幻なんかじゃない。

「どうして？ 鷹野くん！？ どうしてここにいるの？」

カンナは貴一に駆け寄った。

「いや、冬休みだから帰省してきたんだけど」

「あ、ああ、そう。そうね…」

言われてみれば不思議でもなんでもない当たり前のことだった。去年も一昨年も帰ってきてはいたのだろうが、顔を合わせていないだけのことだ。

「久しぶり……」

「うん。……宇佐美？ 泣いているのか」

「え。……違うわ。これは……これは雪よ。雪が融けただけ」

カンナは顔の水滴を拭った。

でも拭ってもなぜかすぐに目元が濡れてしまった。

「あ、あれ？ やだ、本当に、わたし、泣いてる」

短い沈黙の後、カンナは貴一に寄りかかるように彼の胸に顔をうずめた。

「会いたかった……！」

拒絶されるかもしれないという危惧が頭をかすめていた。けれどそれ以上に懐かしさと嬉しさがこみ上げていた。彼は拒絶しなかった。

「宇佐美……俺、ずっと宇佐美に謝れずにいたことがある」  
「え……?」

身体を離すと貴一は口を開いた。

「あの日……、あの日も雪が降ってたな。宇佐美に好きって言ってもらったとき、本当に嬉しかった」

「……!」

ホント? という言葉を口に出そうとしたがのどがつかえてうまく発音できなかった。

「だけどあの時俺はガキだった。カンナが前に別の男を好きだったって聞いただけで妬いてしまって……つっぱねてしまったんだ。すまなかった」

「……」

「でも、この間、俺、他の女の子に告白されて、わかったんだ。俺は宇佐美じゃなきゃ駄目なんだって」

夢? 夢ならこのまま醒めないで。

——嫌。夢なんかじゃイヤ!!

「宇佐美、俺は——」

その言葉はカンナにとって一生忘れられない言葉になった。

「宇佐美。雪で足元危ないから注意しろよ」



「ええ」

家までの短い距離を惜しむように二人はゆっくりと空白の時間をおしゃべりしつつ帰り道を歩いた。

綺麗になったな、という褒め言葉が、他の誰に言われるよりも嬉しかった。

「でも不思議な偶然ね。ちょうどわたしが帰ろうとした時に鷹野くんと出会えるなんて……」

「あ、いや、電話があっただよ。今、駅前に宇佐美がいるから会いにいったやれ、って」

「え……ええっ!? 誰が!？」

「ほら、中学のとき俺たちと同じクラスだった女子の……」

貴一は、その名前を告げた。

「!」

——そうか、サンタクロースなんていないのね。

カンナは駅の方角に振り返る。そこには自分の姿を見ていた彼女がいたのだろうか。気づかなかった。けれど、そこにいるものだと想定して、カンナは彼女に向かって泣き笑いの表情を向ける。

——素敵なクリスマスをありがとう。

胸の中からそんな声が溢れた。

**番外編その5・サンタクロースなんていない（後書き）**

番外編はこれで終了です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8538f/>

---

ねずみ姫

2011年12月13日20時54分発行